

ソウルエッジ

昏(くら)き森の彷徨

ジークフリート編

中井紀夫

ASPECT NOVELS

9784893666918

1920293008509

ISBN4-89366-691-6

C0293 ¥850E

定価 本体850円＋税



小説「ソウルエッジ」完結編

16世紀後半の神聖ローマ帝国。帝国騎士と娼婦との間に生まれた少年ジークフリートは、それとは知らずに父をその手にかけてしまう。現実を受け入れられず、存在しない「父の仇」を創り上げたジークは、「仇」を倒すために無敵の剣”ソウルエッジ“を求めて戦いに臨む…。彼を救わんとする神の少女ソフィーティア。”ソウルエッジ“に操られる海賊セルバンテス。物語は舞台をヨーロッパに移し、いよいよ邪剣の正体を暴く！



カバーイラスト／橋本正枝

中井紀夫　Norio Nakai

1952年、東京に生まれる。武蔵大学人文学部卒。ハヤカワSFコンテストでデビュー。短編『山の上の交響楽』で星雲賞受賞。主な著作に「タルカス伝シリーズ」全五巻、「能なしワニシリーズ」全七巻、「山の上の交響楽」（早川書房）など多数。

ソウルエッジ

昏(くら)き森の彷徨

ジークフリート編

中井紀夫

ASPECT NOVELS

ソウルエッジ
Soul Edge
昏(くら)き森の彷徨
ジークフリート編
ASPECT NOVELS

16世紀後半のヨーロッパ





『独断刀』　黄星京



『待ち合わせ』　成美那



『清流に待つ』　李龍

SOUL EDGE CG ILLUSTRATIONS



『月ノ光』　タキ



『刺客』　御剣平四郎



『DUELLISTS』　デュエリスト


ソウルエッジ
昏(くら)き森の彷徨
ジークフリート編

ソウルエッジ

昏(くら)き森の彷徨　ジークフリート編

イラスト　橋本正枝

目次

CONTENTS

主な登場人物



ジークフリート・シュタウフェン

神聖ローマ帝国騎士と娼婦との間に生まれる。16歳。自慢の長剣ファウストを操り、盗賊団「黒い風」を率いる。自分と母を捨てた父を憎んでいる。



ヴォルド

南イタリアの武器商人ブルク家・頭首ベルチーに仕える従者。43歳。主人の財宝が眠る秘倉マネーピットを護り続け、視力と思考能力を失う。



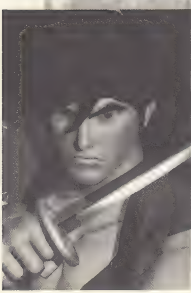
ソフィーティア・アレクサンドル

ギリシア生まれの平凡なパン屋の娘。18歳。キリスト教が支配する世の中にあって、ギリシアの古の神々に心を寄せている。神々の声を聞くことのできる唯一の少女。

タキ

特定の領国や根城を持たぬ『世を忍ぶ一族』の女忍者。22歳。生まれながらに霊力を持ち、妖怪退治を生業にしている。





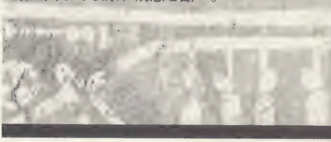
みつるぎへいしろう
御剣 平四郎

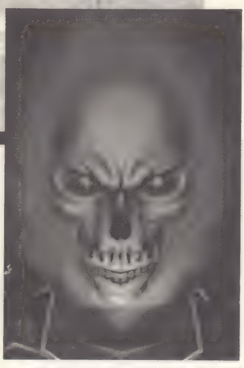
備前国（岡山）の農民の出で、「鬼神」と呼ばれるほどの剣豪。22歳。己の腕を磨くため、傭兵稼業を続けている。



セルバンテス・デ・レオン

かつて世紀の大海賊と怖れられたが、
ベルチーの依頼により"ソウルエッジ"
探索に乗り出して以来、消息を断つ。





ソウルエッジ

古代の鍛冶師が執念の末に創
り上げた、人智を越えた剣。
餌食となった人々の血と怨念
を吸って魔剣と化している。

プロローグ

海は荒れていた。

天には岩のような黒雲が低く垂れこめ、大粒の雨が横殴りに降り注いでいた。

黒々とした波が船を翻弄し、海水が滝のように甲板を洗った。

船にはバイキングの末裔たちが乗り組んでいた。

ノルウェーの港を根拠地とし、北極圏に近い海を、まさにその根拠地へむかって航海していた。

天候さえ順調なら、その日、日のあるうちに港へ着くはずだった。

それが不意の嵐に襲われたのだ。

怪しい風が吹きはじめたかと思うと、雲が渦巻きながら空を覆った。

たちまち、海面がざわめき波立ち、巨獣の咆哮（ほうこう）するような音を立てて、風が吹き荒れはじめた。

知りつくした海である。

この季節に、こんな場所で嵐に遭うはずはないと、船員たちは不吉なものを感じた。

故郷が近づいて、浮かれた表情になっていた顔が曇った。

それでも、この嵐を乗り切れば、家族に会える。

生まれた土地を踏みしめることができる。

帆をたたみ、甲板の水を掻（か）いだし、必死で嵐に耐えた。

どれほどの時間が経ったろう、帆柱にみずから体を縛りつけ、波しぶきにずぶ濡れになりながら、見張りの船員が大声をあげた。

「前方に船！」

船員たちが、いっせいに前方を注視した。

雨と波しぶきにかすんで、黒い大きな影がこちらへ近づいてくるのが見えた。

それは、この激しい嵐にもかかわらず、凪(な)いだ海を行くかのごとく、平然と航行しているように見えた。
ただならぬものを、船員たちは感じた。
「取舵いっぱい！」
衝突を回避しようと、船長が叫びをあげた。
が、間に合わなかった。
相手の船の船首像が雨と波の向こうからぬっと現われ、破れた帆と髑髏(どくろ)の旗がはっきり見えたかと思うと、そのまま舳先(へさき)がこちらの船の舳先にぶつかってきた。
船首外板の割れるめりめりという音が聞こえた。
船員たちは一瞬、相手側の船首に書かれた船名を目にした。
〈エイドリアン号〉
と読めた。
それから、異様な腐臭を嗅いだ。
恐怖が、船員たちの肌を総毛立たせた。

二隻の船ががっちり噛みあって離れなくなると、エイドリアン号から海賊たちが乗り移ってきた。
一様に青い顔をした、亡霊のような男たちだった。
一声も発さず、黙ったまま、いきなりノルウェー船の船員たちに斬りかかった。
抵抗する間はなかった。
瞬く間に、甲板は血の海となった。
吹きすさぶ風と波がそれを洗い流していく。
その地獄絵図を見ても、エイドリアン号の海賊たちは、表情ひとつ変えなかった。
一方的な殺戮の終わったころ、エイドリアン号の船長が乗り移ってきた。
眼光鋭く、口髭をたくわえ、海軍提督風の衣裳をまとい、両手に長短の剣を握っていた。
甲板のようすを見まわすと、何も言わず自分の船に引きあげていった。
海賊たちは金目のものや食糧を掠奪し、甲板に油を撒(ま)いて火を放った。

炎に包まれたノルウェー船から離れて、エイドリアン号はなにごともなかったかのように、ふたたび静かに航行しはじめた。
にわかに嵐が収まりはじめた。

舷側の外板も甲板もあちこちで朽ちて穴があき、帆もぼろぼろに破れて力なく垂れ下がり、エイドリアン号はまるで幽霊船のように見えた。
その姿で、シェトランド諸島沖を西へと進んでいった。
冷たい北風も、高い波も、この船の航行にはいっこうに差し支えないようだった。
船長室にセルバンテス・デ・レオンの姿があった。
瞑目する彼の背後の剣掛けに、長短二本の剣が掛けられていた。
長い方の刃はまっすぐで雄々しく、短い方の刃は波打つような曲線を描いていた。
雌雄を成すこの剣をセルバンテスから献上されたロシアのイワン雷帝は、取り憑(つ)かれたように世界征服の野望に燃えた。
しかしその野望は果たされず、雷帝はロシアの大地に身を沈めた。
剣はふたたびセルバンテスの手にもどった。
セルバンテスは、みずからの船をロシアへ呼び、その船を駆ってスカンジナビア半島をまわり、本拠地であるイスパニアへと向かおうとしていた。
ひとたびは伝説の邪険の呪縛(じゅばく)から逃れたセルバンテスだったが、この航海のあいだに剣の邪悪な声がふたたび頭のなかに響きはじめ、その力の影響下に自分が入りつつあるのを感じていた。
それは一方で苦しみだった。
自分の意志を失い、傀儡(かいらい)となり果てていくのが自分でもわかった。
剣に関わった人々の醜悪な欲望や悲痛な体験を、直接肌に突き立てられるような苦痛として、味わわざるをえなかった。

しかし他方でそれは、歓びでもあった。破壊と殺戮のみを目指す苛烈な意志に自分を同化させる快楽があった。

人知を越えた強大な存在に身を任せることの安楽があった。

そしてなによりも、破壊と殺戮それ自体の、麻薬のような愉悦を味わうことができた。

しだいにその禁断の快楽へ、欲望を解放する歓びへと、セルバンテスは突き進みはじめていた。

人倫という敷居を越え、次々と快楽への扉を押し開いていった。

セルバンテスの背後で、ソウルエッジがかすかに震えた。

その刃から、一瞬、不気味に赤い光が放たれた。

セルバンテスはかっと目を見開いた。

声が聞こえた。

〈暗い魂が生まれようとしている〉

声は、耳に聞こえぬほど低く、しかし凄まじいエネルギーを秘めた波動として伝わってきた。

腹の底が掻きまわされるような気が、セルバンテスはした。

〈ドイツへ行け〉

声は命じた。

抵抗することのできない、強圧的な命令だった。

〈いまはまだ若い無垢の魂だが、いずれ血塗られた運命をたどるはずのものがドイツにいる。それを探しだし、我に捧げよ〉

——イワン雷帝の次なる犠牲を見つけたのか、ソウルエッジ……。

セルバンテスは立ちあがり、蹌踉(そうろう)として甲板へ出ていった。

シェトランド諸島沖の暗い海を西に向けてゆっくりと進んでいた、朽ちたマストと破れた帆の幽霊船じみた船が、急に南へと進路を転じ、黒い波を蹴立



てて北海へと入っていった。

やがて行く手に現われてくる大地は、封建領主とその配下の騎士たちが闘争に明け暮れ、重税に耐えかねた農民たちが反乱を起こし、いままさに宗教改革の火の手があがらんとする神聖ローマ帝国……。

第一章

1

波がまぶしく光っていた。
まるで古代の英雄イアーソーンの探し求めた黄金の羊の毛皮を、何万枚も海面に敷きつめたようだった。
海沿いに白い道が続いていた。道までもがまぶしく光っていた。
ひとりの若者がその道をたどっていた。
まだあどけなさが残っているが、あと何年もしないうちに幼い皮が一剝けすれば、島でも一、二の男前になることが約束されている、彫刻のように整った顔をしていた。
簡素な半袖シャツを無造作に被った、かすかに汗の浮いた厚い胸に、十字架のペンダントが揺れていた。
緩やかな登り坂を登りきったところに、石造りの家があった。
若者はその家の前で足を止めた。
強い陽光を厚い石壁が遮って、涼しげに薄暗い家のなかで、ひとりの娘が忙しく立ち働いていた。
大理石の板のうえに置かれたパン生地に、粉を振ってはは使いこんだ麺棒で延ばしている。
粉で白くなった娘の手が、慣れたリズムで軽快に動くのを、若者はしばらく眺めていたが、娘は仕事に夢中で、いっこうに気づく気配がない。
娘より先に、その家の主人が若者に気づいた。
奥にあるパン焼き窯の方から、太った腹を揺すりながら表へ出てきた。
「コルネーテウスじゃないか」パン屋の主人は陽気な声をあげ、両手を広げて歓迎の態度を示した。「そ

んなところで何をやっている。さあさあ、家に入れよ。うまいワインもある。焼きたてのパンもある」
「そうよ、遠慮することはないわ」主人を追いかけて出てきたその連れあいも口を添えた。「だって、あなたはもうすぐ家族になるのだもの」
「いえ、あの……」
と若者はちょっとはにかみを見せて口ごもった。
「なんだ、わしらには用がなくて、娘にだけ内緒の用事か」
「はい、ちょっと……」
「こいつ、結婚式前に妙なことをしたら承知せんからな」
パン屋の主人アタロス・アレクサンドルはうれしそうに言って、コルネーテウスの背中をどやしつけ、娘を呼ぶように連れあいに言った。
「ソフィーティア、花婿さんが来てるわよ」
呼ばれてようやく、パンをこねていた娘が顔をあげた。
「どうしたの、急に」
大股で歩いていくコルネーテウスのあとを、ほとんど小走りになってついていきながら、ソフィーティアが訊(き)いた。
コルネーテウスは答えない。どんどん歩いていくばかり。その背中をソフィーティアは頼もしいものに見た。
やがて道をはずれ、浜へ出た。
白く輝く砂浜に、古びた漁船が幾隻も引きあげられているなかに、真新しい一艘(そう)の小舟があった。
「あなたが？」
目を丸くしてソフィーティアが訊いた。
「親方が許してくれたんだ。結婚して一人前になるんだから、ひとりでやってみろって。驚かそうと思って、内緒にしていた」
「ひとりでぜんぶ造ったの？」
「二十日かかった。初めてのことだったからね」
「すてき」

「最初にきみを乗せたいと思った」
どこまでも青く広がるエーゲ海に包まれて、二人は揺れていた。
ソフィーティアの金色の髪の毛も、白い指先も、着ている衣裳までもが青く染まってしまいそうだった。
「きれいな海。こわいぐらい」
「きみのその青い瞳の方がもっときれいだよ」
二人の間にたくさんの言葉はいらなかった。
太陽の黄金の光と青い風、白い波。
そのまま時間が止まってしまえばいいのに、とソフィーティアは思った。
そうすれば、何も思い悩む必要はなくなるのに……。
結婚式を控えて、ソフィーティアの心にひとつだけ抵抗があった。
コルネーテウスがためらいがちにそのことに触れた。
「今朝、教会に来なかったね」
ソフィーティアはかすかに悲しげな表情を見せた。
「ちょっと忙しくて」
「それは言い訳のように聞こえてしまうな。ほんとうは、礼拝に行くのがいやだったんじゃないかい」
「いやというのじゃないわ。ただすこしだけ心にひっかかるものがあって」
「やはり、ひっかかっているのか」
「わたしはゼウスやヘーラーやアテーナーとともに育ったわ。雲間から海へと射しこむ日の光を見ればアポローンのことを思ったし、底知れず深く広大な海が天候によって表情を変えるのを見ればポセイドーンのことを思った。冷たい北風が吹けばボレアースのことを、暖かい春の風が吹けばゼピュロスのことを思った」
「それはぼくもおなじだ。島のだれもがおなじだよ」
「神々や英雄の話をたくさん聞いたわ。その愛や嫉妬や冒険の物語に夢中になった。輝く雲の上や青い

水平線の彼方から、いつも神々が自分を見守っていてくれるのを感じていた。だから、わかるでしょう、イエス・キリストを信じろと言われたって……」
「気持ちはわかるよ。けれどもいまはローマの時代。ぼくらの島も教皇グレゴリウス十三世の支配下にある。教会に従わないわけにはいかないんだ。現にきみだって、洗礼を受けているんだからね」
「それが悩みなのよ。自分の心を偽っているような気がするの。島の人々は悩むことがないのかしら」
「どうにか折り合いをつけているんだろう」
「わたしだけが特別なの？」
「そうかもしれない。きみは美しすぎて、特別にアプロディーテーに愛されているんじゃないか」
「そんな、からかうようなこと言わないで」
「からかってなんかいないよ。ほんとうにそう思うんだ。ソフィーティア、きみの美しさは特別だよ。太陽の光のような金色の髪、海のような青い瞳、砕ける波のような白い肌。それはいつだってぼくを夢中にさせる。愛しているよ」
「わたしも愛しているわ、コルネーテウス。でも……」
「でも……？」
「その愛を、教会で誓うというのが、どうしても受け入れられないの」
「しかたないよ、いまはそういう時代なんだ。きみのご両親もそれを望んでいる」
「それはわかっているのだけど」
「それに、どこで誓おうと、ぼくがきみを愛する気持ちに変わりはない」
「それもわかっているわ」
「きみがぼくを愛してくれる気持ちだって、変わりはないだろう？」
「もちろんよ」
「じゃあ、予定通り、教会で結婚式を挙げることに同意してくれるんだね」
ソフィーティアはこっくりとうなずき、コルネー

テウスのたくましい肩にもたれかかると、小舟の揺れに身を任せた。

2

カシントスの町からエウリュディケーの神殿を見ることはできない。

丘の上の神殿と町とのあいだに、教会の堂々たる礼拝堂が立ちはだかっていたからである。

礼拝堂のスレート葺きの屋根、その上に立つ十字架、聳えたつ鐘楼が視線を遮り、神殿を隠していた。

教会の所有地を迂回して、神殿の丘へと登っていくたびに、ソフィーティアはこの教会と神殿の配置に苛立ちを感じずにはいられなかった。

坂道を登って教会を見下ろす高さに至り、神殿が見えてくると、ほっとした。

神殿といっても、いまや遺っているのは、白い石の列柱とその台座だけである。

それでも、柱の間から青く輝く海を眺め、丘を渡る風を肌に感じるのは、心の落ちつく時間だった。

そうしている間、ソフィーティアは、たとえ神殿が列柱だけの廃墟と化しても、この丘にまといついて漂っている古代の神々の気配を感じ、その囁きあう声さえ聞くことができるような気がした。

自分は引き潮のときに岩場にできる潮溜まりのようなものなのではないかと、ソフィーティアはときどき思うことがある。

いまは孤立して外洋と隔てられ、岩の狭間に小さく身を縮めているが、やがて潮が満ちれば、ふたたび無限に広がる海――すなわち神々の世界とつながるときが、かならずやって来るはずだと想像するのである。

そんな思いを抱いて神殿で時を過ごしたあと、ソフィーティアがいつも立ち寄る小屋が、丘の中腹に

あった。
老いた巫女が住んでいた。
その日も、ソフィーティアは巫女の小屋に寄った。

メリボイアは、それが彼女の趣味の、むやみに多種類の色の布を縫いあわせた貫頭衣を着て、その上に、これも極彩色のスカーフや帯やネックレスや腕輪、そのほか実用的な意味のよくわからない布や派手な飾りを、たくさん巻きつけたり垂らしたりして、まるで色とりどりの羽色のアフリカ産のインコのように見えた。

その恰好で、小屋の外に出した椅子に腰かけ、身をかがめて何かの手作業に没頭していた。

近づくと、小声で歌を歌っているのがわかった。気だるくも神韻縹渺としたギリシア旋法のメロディで、小声ながら鍛えられてよく響く声だった。

ソフィーティアに気づいて顔をあげると、歌い続けながら、気難しげな薄い唇の端にわずかに微笑を浮かべた。

皺だらけの年老いた顔だが、黒い瞳にある種の若々しい力が宿っていた。

オリーブの匂いを、ソフィーティアは嗅いだ。

巫女が手にしているのは、熟したオリーブの実で、積みあげた実の山からひとつとっては、皮を剝き、種を抜き、果肉だけにする作業を続けているのだった。

「油がお要りだろ」

メリボイアが言った。

「もしかして、わたしのために？」

ソフィーティアは目を見開いた。

「そうさ」メリボイアは作業を続けながら言った。「髪を結うのに油が要るだろ。この丘のオリーブの木には最高の実が成る。うんと上等の油を搾ってやるよ。結婚式に間に合うように」

「なんだか、まだすっきりしないの」

老婆の隣にしゃがみこんで、オリーブの実の皮剥きを手伝いながら、ソフィーティアは言った。

「あんたとコルネーテウスはいいカップルだよ」メリボイアは言った。「お似合いだし、心の通いあってるのが傍目にもよくわかる。町の人々も祝福するだろう。それでいいじゃないか。教会での結婚式なんて、どうせただの儀式、ワインを飲んでどんちゃん騒ぎをするまえに、ちょっとの間、気取ってみるだけのことなんだから」

「ほんとうにそう思うの、メリボイア?」

幼いころから、ソフィーティアはしょっちゅうこの巫女の小屋へ遊びにきていた。

メリボイアが深みのある声をたくみに響かせて語る古代の神々や英雄の物語――人間界に火をもたらしたプロメーテウスの物語や、災いや悲しみとともに希望をももたらしたパンドーラーの話、クレーテー島の迷宮から英雄テーセウスを救いだしたアリアドネーの物語や、この神殿に祭られるエウリュディケーに因むオルペウスの冥界冒険譚や、海獣のいけにえとなったアンドロメダーを救うペルセウスの物語を聞くのが大好きだった。

町の人々からのわずかな喜捨で細々と暮らすメリボイアに、ソフィーティアが家からパンを持ってきてあげたり、老いた身には辛い井戸の水汲みを手伝ってあげたりすると、メリボイアはお礼がわりにそれらの物語を語り聞かせてくれるのだった。

決して大仰にならない、抑制された老婆の声は、しかしかえってそのせいで、一言ごとにソフィーティアの心の奥深くに染み入った。

いつしか、ソフィーティアの心のなかに、ギリシアの神々が生き生きと息づくようになっていた。

それは、ソフィーティアが生まれながらにして血のなかに受け継いでいたものが、老練な巫女の言葉と共鳴し、命を与えられ、成長していった結果だった。

もとより、メリボイアの心のなかには、神々が息

づいていた。
かつて、神々を讃える祭がさかんに行なわれたころには、巫女は祭の高揚のなかで、忘我の恍惚状態に至り、その口から神々の言葉を語ることさえしばしばだった。
そのメリボイアが、かまわないから教会で式を挙げろと言うのである。
ソフィーティアはある種の安堵を覚えるのと同時に、不審にも感じた。
「だけど」とソフィーティアは言った。「この土地の神々は、それで怒りをお示しにならないのかしら。わたしとコルネーテウスとの恋を、背中から一押ししてくれたのも、エロースかアプロディーテーか、ともかくもこの土地の神々に違いないことを、わたし自身はっきりと感じとっているのに」
「そりゃそうさ」巫女は言った。「このレムノスの島に生まれたものは、どんな時代になろうと、天界の神々の影響は免れない」
「それでも教会で式を挙げていいと……？」
「だから、そんなことはどうでもいいと言うのさ。教会の教えなんてふざけた教えじゃないか。ただひとりの神がこの世をすべて創っただなんて、どうしてそんなばかげたことが信じられるんだい。太陽には太陽の、大地には大地の、海には海の神がいるからこそ、世界がまわっていくんじゃないか。教会の連中はそんなことも感じとれないまぬけなやつらなのさ。どうして処女が赤ん坊を産んだり、磔になった人間が生き返ったりするんだよ。つくり話でひとをたぶらかそうという魂胆が見え見えじゃないか。おまけに教会の司祭たちは、針の先で何人天使が踊れるかなんて、くだらない議論に明け暮れているらしい。そんな連中はハナから相手にしなくていいんだよ。ただ——」
「ただ……？」
「教会は権力を持っている。だから、ちょこっと挨拶しておいた方がいい。金持ちにおべっかをつか

うみたいにね。教会で式を挙げるというのは、そういうことさ。あとでこっそり舌を出しておきゃあいい」

メリボイアは皺だらけの顔をなお皺くしゃにして、悪戯(いたずら)っぽく片目をつぶって見せ、

「しあわせにおなり」

とつけくわえた。

3

水浴は朝の習慣だった。

アポローンが日輪の馬車に一鞭くれて、天空へと駆け昇りはじめたころ、ソフィーティアは岩と木々に囲まれたいつもの泉に出かけ、岩陰で衣服を脱いだ。

爪先を水に浸すと、冷たく澄んだ水の表面に生じた波が何重もの輪となって広がっていき、その輪のひとつひとつが斜めに射す朝日を受けて、きらきらと輝きを放った。

全身が水に沈み、水面の波立ちが収まると、いったんは飛び去った小鳥たちが周囲の岩の上にもどってきて、囀(さえず)りあったり、水際に降りて水を飲んだりしはじめた。

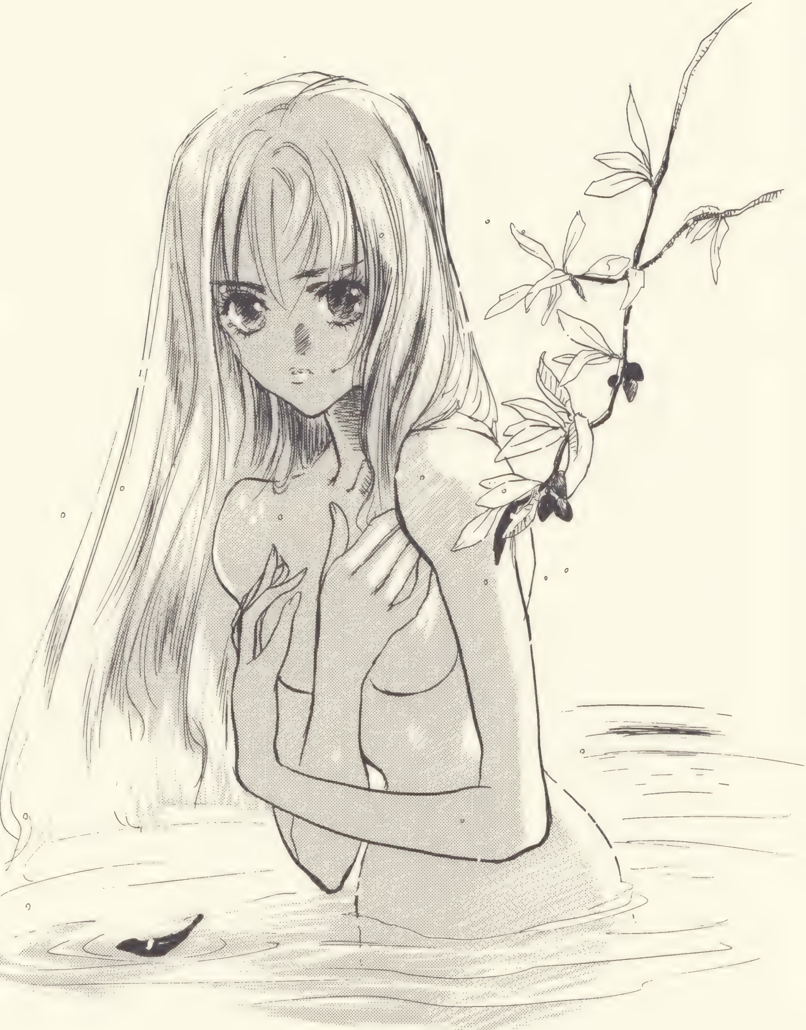
小鳥たちを驚かさないように静かに泳ぎながら、ソフィーティアは凛(りん)とした水の冷たさを楽しんだ。

水面に現われた十八歳の乙娘の肩は、熟す寸前の桃の実のように優美なまるみを帯び、水鳥の羽のようによく水をはじいた。

結婚式を翌日に控えて、乙娘の気持ちはすこし高ぶり、冷たい水が肌を洗うとかえって体が火照ってくるようだった。

その火照りを冷まそうとするかのように、彼女は地下からの水の湧き出し口の方へ近づき、いっそう水温の低い水のなかへ、髪までも沈めて息を殺した。

金色の髪を水に揺らしながら、長いこと水底に潜っていて、それからゆっくりと顔をあげたとき、異変がはじまった。
　小鳥たちが、かん高い警戒の声で鳴き交わしながら、いっせいに慌ただしく飛び去っていったあと、泉が異様な静寂に包まれた。
　静寂を破ったのは、島全体を揺さぶるような地鳴りだった。
　泉の水が細かくさざ波を立て、水滴を飛び散らせたと見る間に、大きく揺れはじめた。
　ソフィーティアは水の動きに体を弄（もてあそ）ばれ、立ちあがって手近の岩にしがみついて体を支えざるをえなった。
　水の揺れはやがて収まった。
　収まるのと同時に、頭上遥かな天空から光が降りてきた。
　泉の水も、岩や木々も、乙娘の髪や額や肩や胸も、それ自体光を放っているかのように眩（まぶ）しく輝いた。
　まるですべてが虹のなかに呑みこまれたかのようだった。
　乙娘の肩は小刻みに震えていた。
　人知を越えたものへの畏（おそ）れだった。
　光の一部が空中で凝り集まって、目に見えるひとつの形象を現わした。
　逞しい男神の姿が空中に浮いていた。
　ソフィーティアは両手でみずからの肩を抱きながら、畏怖の目でそれを見あげた。
　神の声が響いた。
「ソフィーティア、おまえが選ばれた」
　ソフィーティアはただ目を見開いて、空中の男神を見るばかりだった。
「恐れることはない」声はつづけた。「わたしはヘパイストス。おまえに頼みがあって天界から降りてきたのだ」
「わたしに……？」ソフィーティアはかすれた声



でようやく訊き返した。「この平凡なパン屋の娘に……？」
「そうだ。剣を探しだしてほしいのだ」
「剣を……？」
「その剣は、人間の手によって造りだされたものだが、にもかかわらず、神々の武器の領域に達してしまった。鍛冶を司るものとして、わたしはこれを看過するわけにはいかない」
「そんな剣を、いったいだれが造ったのです。だれがそんな畏れを知らぬことをしたのです」
「この島に昔住んでいた鍛冶師だ。至高の武器を望んだ彼の情念が、剣をして人間の領域を越えるものに成らしめたのだ。彼がやみくもに試行錯誤を繰り返し、天賦の才能に加えて技を磨き、多くの剣を鍛造しては破棄する間、わたしはやがて恐るべき剣が鍛えあげられるであろうことを予感して、監視しつづけていた。が、わたしがわずかに目を離した隙に、剣は完成し、しかも何者かの手によって鍛冶師のもとから奪い取られ、世界のいずこかへと姿を消してしまった」
「どこにあるか、わからないのですか」
「いままではわからずにいた。しかし、最近になって、その剣がまた人間界に姿を現わしたようなのだ。オリュンポスの神々の力の及ばない土地でのことゆえ、詳しいことはわからないのだが、それらしい動きが見えている。剣は長い年月の間に多くの人間の手から手へと渡り、それを使ったものの執念、それに命を奪われたものの怨念によって、いまやこの世に破壊と殺戮をもたらす邪剣と化している。しかも、その剣の持つ無敵な魔力の噂に惑わされて、多くの人間が剣を手に入れようと動きまわっている。そのような人間たちの妄執は、やがてかならずこの世に血で血を洗う戦乱や災厄をもたらすだろう。そうなるまえに、剣を探しだしてほしいのだ」
「探しだして、どうするのです」
「破壊するのだ。跡形もなく消滅させるのだ」

「それを、わたしにせよとおっしゃるのですか」
「剣はいま、オリュンポスの神々の手の届かぬところにある。人間の力を借りざるをえないのだ。そのために、おまえが選ばれた」
「どうして、わたしなのです」
「おまえしかいないからだ」
「わたししか……？」
「この島の人間の耳は、いまみなローマの方を向いている。われわれの声は届かぬのだ。ひとり神々の声の届いていたメリボイアの耳は、老いて遠くなった。神々の声を聞き分けることのできるものは、ソフィーティア、おまえしかいなくなってしまったのだ。現にこのようにわたしが天界から降りきたっても、おまえ以外の島の人間たちは気づきもしないだろう。すこし風の具合が変わったと思うばかりだ」
「でも、わたしにそのような大役が果たせるのでしょうか」
「おまえは自分の思っている以上の力を持っている。平凡なパン屋の娘としての暮らしのなかで、その力に気づく機会がなかっただけだ。おまえにはアテーナーの加護もある。それに、わたしから最高の武具を与えよう。あとで神殿へ登ってみよ。勇気を持って、旅立つのだ。破壊と殺戮をもたらす剣ソウルエッジから、世界を救うのだ」
「でも……」
「コルネーテウスのことか。おまえの逡巡する気持ちはわかる。しかし、おまえは選ばれたのだ。これが運命なのだ。かならずおまえは剣を求めて旅立つだろう。わたしにはそれがわかっている」
言葉の終わりの方でヘパイストスの声は急速に遠のき、あたりに満ちていた光も弱まり、消えていった。
朝の光の満ちるいつもの姿にもどった泉に、濡れた髪を額にはりつかせて、蒼白な顔で震えている娘がひとり、茫然と立ち尽くしていた。
やがて小鳥たちがもどり、にぎやかに囀りはじ

めた。

4

数多の色彩のディオニュソス的祝祭といったなりをしたメリボイアが、惚けたように神殿跡に立ち、体中から垂れた布を風に翻しながら、彼方の空を眺めていた。

簡素な貫頭衣をまとって、息を切らせて丘を駆けあがってきたソフィーティアの髪は、まだ濡れていた。

「メリボイア、あなたも見たの」

ソフィーティアが訊いた。

「光をね」

老婆はなお天空の彼方を眺めやりながら答えた。皺の刻まれた顔に畏怖の表情があり、肩がかすかに震えていた。

「風が変わったと思って小屋を出てみたら、おまえがいつも水浴をする泉の方角に、天頂からまっすぐに射してくる光が見えた。巨大な光の剣が大地を貫いたようだったよ。泉にいたのかい」

「ええ」

「姿を見たのかい。おまえのまえに姿を現わしたのかい」

「夢を見ているように頼りなくて、夢を見ているようにありありとしていたわ。あれはほんとうに起こったことだったの？」

「だれが現われたんだい」

「ヘパイストス。神々しく、逞しく、威厳に満ちていたわ。思いだしただけでも足が震える」

「光が消える寸前、この神殿へも一筋、強烈な光が射した。あのあたりから――」

メリボイアは天の一角に向かって手を上げた。ゆるく曲がった人差し指の示す先に、白い海鳥が一羽舞い飛んでいた。

「こういうぐあいに――」
とメリボイアが指を動かすと、その動く先を海鳥が滑るように滑空し、高度を下げてきた。
「神殿に向かって――」
海鳥は神殿に向かってすばらしい速度で飛翔した。
「そうそう、そういうふうにね」メリボイアは海鳥に話しかけるように言った。「神殿へと光が射したんだ。あんたがほんとうにヘパイストスを見たのかどうか、神殿をひとめぐりしてみればわかるよ」
メリボイアは色とりどりの布をはためかせながら歩きはじめた。
海鳥は神殿の上をかすめ飛んで、海の方へと飛び去りながら、ふたたび高度を上げて、雲の彼方へ見えなくなった。
それは太い石柱の陰に、整然と並べて横たえられていた。
天空から降り注いだ光の残滓（ざんし）がなおまといついて、舞い飛ぶ蝶の撒き散らす鱗粉（りんぷん）のようにきらきらと光って見えた。
幅広の刃を銀色に光らせた剣、不思議な絵模様のついた八角形の盾、鉄の胴丸、肩や脛（すね）を守る防具――それらのものが、沈黙のうちにソフィーティアとメリボイアを待っていた。
「ほんとうだったんだわ」
ソフィーティアは驚愕と感動にかすれた声で言った。
「ヘパイストスは何と言ったんだい」
悲しげな目で、神がソフィーティアに与えた武具を見やりながら、メリボイアが訊いた。
「剣を探せ、と」
と、ソフィーティアは泉でのできごとを語った。
白い海鳥がまた、沖合の空から急降下してきて、神殿の上空をかすめ飛んだ。その飛行の軌跡に、まだ生々しい天空からの光の記憶を甦らせて、ソフィーティアは語りながら身震いした。

メリボイアはじっと耳を傾けていたが、話が終わると言った。
「その剣を造った鍛冶師のことなら、言い伝えが残っている」
「この島に?」
「ああ」
「どんな話なの」
「昔ひとりの若い鍛冶師がいた」
メリボイアは、物語を語る語り部としての調子を、わずかに声ににじませながら語りはじめた。

若い鍛冶師は、腕は確かだったが、職人気質で気難しく、気の向かない頼まれ仕事は引き受けなかった。そのせいで貧しく、もうそれなりの歳なのに、結婚もままならなかった。
ある日、鍛冶師は、ひとりの娘が森の泉で水浴しているのを見かけ、一目で恋に落ちた。愛を告白すると、娘も心を動かされた。鍛冶師が気難しいのは、彼の純粋さの現われだと、娘にはわかったのだ。しかし横槍が入った。
娘の父は町の有力者だったが、鍛冶師の噂を聞くと、そんな怠け者に娘はやれぬと、結婚を許さず、会うことを禁じた。それどころか、別の男を連れてきて、娘と婚約させてしまった。
収まらない鍛冶師は、その婚約者に決闘を申し込み、決闘に勝てば娘との結婚を許可するとの約束を父親にさせた。父親はそれを受けた。というのも、娘の婚約者は町一番の戦士、及ぶもののない剣の使い手で、鍛冶師に負ける気遣いはなかったから。
鍛冶師は無謀な決闘を申し込んだものだと町のだれもが思った。案の定、町の広場に見物人がいっぱい集まったなかで行なわれた決闘は、戦士が鍛冶師をいたぶるだけの結果になった。鍛冶師は片腕、片足を失い、片方の目を傷つけられて視力を失った。
傷が癒えると鍛冶師は仕事場に籠り、一心不乱に剣を打ちはじめた。無敵の剣を造って復讐をするつ

もりなのだと人々は囁きあった。すべての財産を投げ打って鉄を買い、彼は次から次へと剣を打った。が、容易には彼の望みのものはできないようだった。造られた剣は次から次へと破棄されていった。いつしか彼の心の内から、娘への想いは消え、復讐への執念も消えていた。この世に二つとない完璧な剣を造りだすことそのものが目的となった。

長い年月が流れた。

腰が曲がり、髪は真っ白、前歯のすべて抜け落ちた、よぼよぼの老人となり果てた鍛冶師の仕事場から、ある朝、すさまじい悲鳴が聞こえた。隣人たちが駆けつけてみると、胸や腹を切り裂かれ、血まみれになった鍛冶師の死体が転がっていた。仕事場には一本の剣も残されていなかった。

ただ、その朝、鍛冶師の仕事場から程近いところに住んでいた若者が、二本のりっぱな剣を抱えて村から出ていくのを、村人の何人かが見ていた。あれが老鍛冶師の造りあげた剣だったのではないか、その剣に込められた鍛冶師の怨念に若者は取り憑かれたのではないか、と人々は噂した。それきり、その若者の消息は知れなくなったということだ。

「それがソウルエッジという剣？」

ソフィーティアは訊いた。

メリボイアはうなずいた。

「ただ言い伝えにはいろいろあってな、鍛冶師が剣を造ったのは、妻を男に寝とられたせいだとする話もあるし、親の敵を討ちたかったせいだという話もある。話の結末も、鍛冶師自身が剣とともに姿を消したというものだったり、村人たちを何人も惨殺してからいなくなったというものだったりする。大昔のことで真相はわからぬ。しかし、物語というものはいつでもそうだが、見かけがどんなにばかげた法螺(ほら)話でも、かならず真実を含んでいるものだ」

「つまり、そういう剣が造りだされたことはたしかだと……？」

「それから、その剣に鍛冶師の暗い怨念が込められていることも」
「その剣を破壊するのが、わたしの使命……」
ソフィーティアは足元にならんでいる武具に目を落とした。
「メリボイア」目を落としたまま訊いた。「神々の声を聞いたとき、あなたはかならずそれに従ってきたの」
「まあ、そうだね」メリボイアはしゃがんで胴丸に手を触れた。「この言葉をひとびとに伝えよと言われれば、それがひとびとに歓喜を与える言葉だろうと恐怖をもたらす言葉だろうと、そのまま伝えてきた。真冬の海に潜って身を清めよとの声を聞けばそうしたし、山羊の血を飲めとの声を聞けばそうした」
言いながら、ヘパイストスから下賜された胴丸をソフィーティアの体に当てると、誂えたように寸法が合っているのがわかった。巫女の老いた手がかすかに震えていた。
「どうして震えているの」
「あんたが神の声を聞いちまったからさ。この胴丸はあんたにぴったりにできている。肩当てだって脛当てだってそうさ。あんたが着るしかない、あんた以外のだれも着られない防具なんだよ」
「つまり、これがあたしの運命……」
「防具を身につければ、もう後戻りはできない。剣を探す旅に出るしかない」
「コルネーテウスに何と説明すればいいの」
「まったく、ヘパイストスも、結婚式の前日にむごいことをする」
「結婚の話はなかったことになってしまうということなのね」
「花嫁がいなくなってしまったんじゃね。だけど、その胴丸を着るかどうかは、あんたの意志次第なんだよ。神々の声は運命だけど、その運命を選びとるかどうかはあんたの意志。神々の声に耳を塞ぐ道

だって残されてはいるんだ」
「わたしが試されているということなの」
「そう考えてもいい」
ソフィーティアはメリボイアから胴丸を受け取り、目の前に高く掲げた。
胴丸の向こうに海が青く光っている。
「メリボイア」ソフィーティアは訊いた。「わたしはどうすればいいの」
「気の毒だけど」メリボイアは言った。「その答えをあたしが言うわけにはいかないよ。あんた自身のことなんだ。あんたが神の声をどう受け取るかということなんだよ」

5

日の落ちる前から、パン屋の主人アタロス・アレクサンドルは、家の前に椅子を持ちだして、ワインを飲みはじめた。
翌日のパン焼きのための仕込みは、途中で投げだしてしまっていた。
その投げだされた仕事を、妻のニーケがてんてこ舞いで片付けているのもおかまいなし、アタロスは杯を重ねた。
夕食になるころには、鼻も頬も真っ赤になって、すっかりできあがっていた。
根が陽気なパン屋の主人は、酔うとひとりで飲むのがつまらなくなって、
「おい、坊主、近所の連中を呼んでこい」
まだ幼い息子のルキスに言って、近所の知り合いのだれそれを呼びにやらせた。
ルキスが夕闇のなかへ走っていくと、こんどは家のなかに入って、
「テーブルを外に出せ。きょうは宴会だ」
ニーケに言った。
「そんなこと、急に言われたって、大したお料理は

ありませんよ」

妻はぶつぶつ言いながら、それでもそこは長年連れ添った夫婦、夫の気まぐれにも慣れたもので、家の外にランプをともし、酔ってふらつく夫に手伝わせてテーブルを外に出し、皿をならべた。

にわかづくりの宴席ができあがったころ、三々五々、近所の顔見知りが集まってきた。

「さあ、盛大にやってくれ。明日は娘のソフィーティアの結婚式、きょうはその前祝い。父親ひとりでしんみり飲むのもつまらないから、みなさんと陽気にぱっとやろうってわけさ」

アタロスはそう演説をぶって、ワインを注いでまわり、肉を切り分けはじめた。

ともかくもめでたい席、そんなことなら相伴（しょうばん）に与（あずか）るのにやぶさかではないと、みな楽しく飲みはじめた。

水平線に隠れはじめた大きな夕陽を眺めながら始まった宴が、あたりが闇に包まれるころには、歌も出れば踊りも出るといった調子に乱れはじめた。

「コルネーテウスはいい男だな。陰で泣いてる娘がどれだけいることやら」

「子どもはたくさんつくった方がいいぞ」

酒や料理を運んでいくたびに、宴席の客たちに冷やかされていたソフィーティアは、やがて客たちの腹が満たされ、ワインの進み具合も落ちついたのを見はからって、厨房仕事の身支度を解いた。

昼のうちに用意してあった旅の荷物を持ち、そっと家を出ようとすると、妹のカサンドラに見つかった。

「どこへ行くの、お姉ちゃん」

「しっ」

反射的にきつい顔を見せてしまったのを、すぐに微笑でごまかして、

「ちょっと風にあたってくるわ。みんなに冷やかされて、なんだか疲れちゃった」

「あしたのことで興奮してるのね。わかるわ。わた

しもわくわくしてるの」
妹はおとなぶった得心顔を見せ、両親には内緒にしておいてあげるというふうにうなずいて、ソフィーティアを離してくれた。
闇のなかを神殿の丘の方へ歩きはじめると、いつまでも宴席の陽気な歌声があとを追ってきた。
それを振りきるように足早に歩き、ソフィーティアは神殿に登った。

「来たんだね」
列柱の陰から、ランプを掲げたメリボイアが姿を現わした。
ソフィーティアは足元の武具を見つめながら、つぶやくように言った。
「両親に何も言えなかった」
「しかたないさ。神の声を聞くものは、いつだって孤独なもの」
ソフィーティアは神殿の床に膝をつき、脛当てを取ると、右の足、左の足と順次当てがって、皮紐で固定した。
胴丸を取って立ちあがると、メリボイアはランプを置き、ソフィーティアの背後へまわって、介添えをした。
「いいんだね」
皮紐を締めあげる前に、メリボイアが訊いた。
ソフィーティアははっきりとうなずいた。
「ヘパイストスの顕現は、わたしには歓びだった。誇りだった。運命に従うわ」
「楽な道じゃないよ」
メリボイアが力をこめて止め紐を締めると、ソフィーティアはうっと声を洩らした。
思わず閉じた目を開くと、切れ長の目に鋭い光が宿っていた。
肘と肩に防具を着け、左手に八角形の盾、右手に剣を持つと、ランプの光に照らしだされて、石の列柱の立ちならぶ神殿に、何者もその意志を妨げるこ

とのできない、オリュンポスの神々の加護のもとにある、慓悍な戦士の姿があった。

「ほう……」とメリボイアが感嘆の声を洩らした。

「パン屋の娘にも、結婚を控えた花嫁にも見えない」

メリボイアのランプの明かりに導かれて、ソフィーティアは浜へ下りた。

途中、まだ続いている家での宴の声が聞こえ、明かりのもとで踊る客たちの影が遠目に見えた。

父と思しい影に、ソフィーティアは心のなかで謝り、別れを告げた。

コルネーテウスの造りあげた小舟が、砂浜に置かれていた。

ソフィーティアはそれを波打ち際まで押しだした。

「ほんとうに旅立つんだね」メリボイアが言った。

「覚えてお置き。人間と世界の関わりは一筋縄ではいかない。いろいろの綾がある。それをしっかり感じとることだよ。読みとることだよ。この旅は神々に導かれての旅だ。偶然はただの偶然では決してないはずだよ。そこにあるものはただそこにあるだけのものではないはずだよ。そこをよく読むんだ」

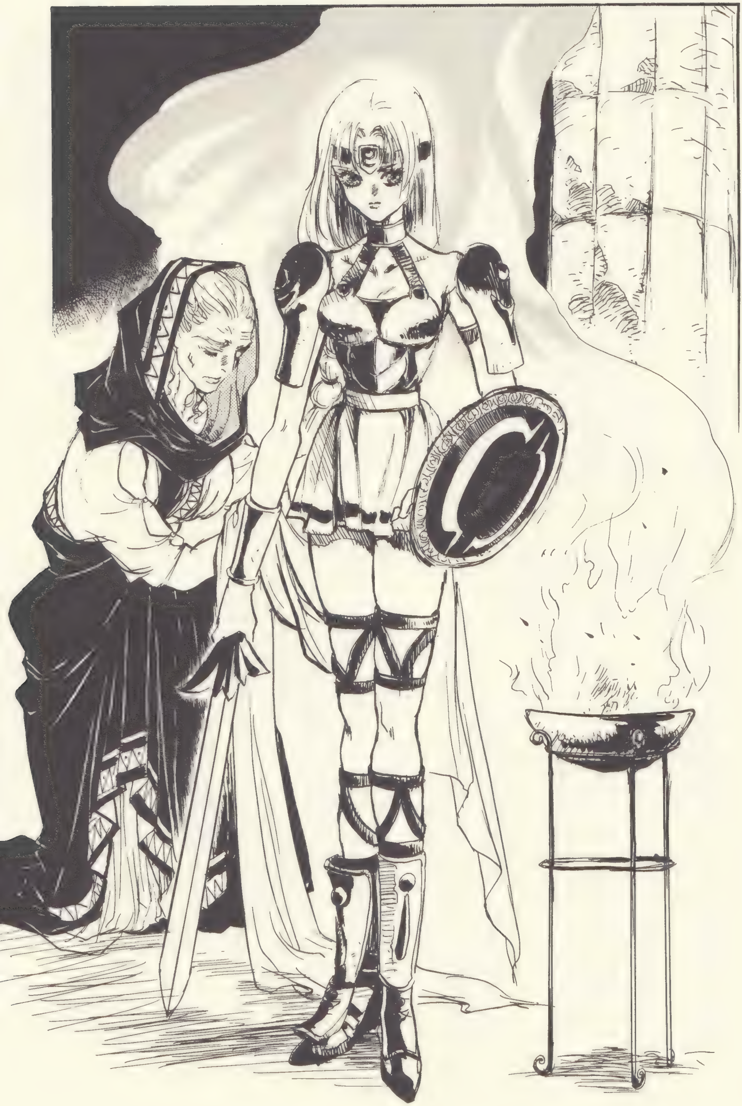
ソフィーティアは小舟に飛び乗った。

「気をつけてお行き。そうして、かならず帰っておいで、この島へ」

メリボイアにはもうそれ以上のことは言えなかった。

ソフィーティアは小舟を暗い海へと漕ぎだした。

小舟が闇に呑まれて見えなくなってから、さらに何刻もの間、老いた巫女は飾り布を風になびかせながら浜辺に立ち尽くし、黒々とした波が寄せては引くのを眺めつづけていた。



第二章

1

ミズナラの森のなかから、十数頭の豚がいっせいに走りでてきた。
通りかかった二頭の馬が、突然のことに驚いて竿立ちになった。
神経質ないななきをあげる馬を、馬上の人物があわててなだめた。
鼻を鳴らしながら走っていく豚の行列のしんがりから、豚追いのための長い棒切れを肩に担（かつ）いだ、薄汚れた服をまとった農夫が、のんびりと姿を現わした。
「これこれ、ひとを驚かせておいて、素知らぬ顔で行き過ぎる気か」
鞍の上の人物が、なお首を振る馬に手を焼きながら、声をかけた。彼は鎖かたびらをまとい、紋章の入った盾を背負い、腰に剣を佩（は）いていた。
「いやいや、咎（とが）めだてすることはありません。豚を追うのは彼の仕事。その仕事の場所に、われわれの方がかってに足を踏み入れてしまったのですから」
もう一頭の馬に乗った人物が言った。こちらは頭布のついたゆったりした灰色の僧服を身につけていた。
農夫は馬上の二人を見あげて、どうやら悶着にはならないらしいと知ると、黙ったまま豚の群れのあとを追いはじめた。
豚の群れは、ミズナラの森のなかでドングリをたらふく食べてきたところで、あとは寝ぐらへ帰って寝るばかりと、ぬかるんだ原っぱを泥だらけになりながら横切っていった。
その行く手に、木の骨組みのあいだを泥壁で塗り

固め、屋根を草で葺いた小さな家の建ちならぶ、貧しげな村が見えた。
夕餉（ゆうげ）の煮炊きの煙がそこかしこから上がり、草葺きの屋根の家々は夕闇に包まれて、青くかすみはじめていた。
「司祭様」剣を帯びた騎士が言った。「あの村のはずれに見える木造の尖（とが）った屋根は、小さいながら教会のようです。あそこで今夜の宿を求めてはいかがですか」
「いや」司祭は頭布の奥から言った。「もうすこし進みましょう」
司祭の声はやさしかったが、響きはゆたかで、決然とした強固な意志が含まれており、騎士は言い返すことをせず、黙したまま司祭の言葉に従い、馬の腹を蹴った。
しだいに黒々と夕闇に呑まれていくミズナラの森の縁に沿って馬を進めていくと、風に揺れる枝々の分厚く重なりあう葉に半分埋もれて、石造りの橋のような建造物がぬっと突きだしているのに行き会った。
橋は形を揃えた小さな石を丹念に積みあげて造られたもので、アーチ型の美しい構造を持ち、しかし途中で断ち切られたように破壊されて、無残な断面を晒（さら）していた。
「水道の跡ですね」
と、司祭が言った。
騎士が黙っていると、司祭は続けた。
「いにしえのローマの文明が、この地に及んでいた時代の名残です。時の流れのなかで打ち棄てられ、あんな姿となってしまったのです。もうすぐ森に呑まれて消えてしまうのでしょう。教会もあの水道のような状態なのです」
「教会が？　あのような状態？」
「そう、廃墟と化しているのです。かつては清い水が滔々（とうとう）と流れ、流れゆく先々で人々の渇きを癒し

ていました。しかし、いまは水は涸れ、人々に届くことはありません。信仰の廃墟となり果てているのです」

「おっしゃることはわかるような気がします。わたしも、教会の教えを護るのが騎士たるものの務めと聞いて育ってきました。しかしその護るべき教えがどんなものなのか、だれも教えてくれない」

「かわいそうに。それは教会が堕落しているからです。教会は権力者にすりより、免罪符を売って金を儲け、見かけばかりりっぱな礼拝堂を建てたり、高僧たちが贅沢三昧をしたりするのに使っている。そんなことをせよと、イエス様が言ったことはないのです」

「それが、パトリシウス様、あなたが教会を出奔した理由というわけですね」

「わたしはローマから派遣されてこの土地の教区へやってきました。ローマから見れば、ハインメル殿、あなたのようなこの土地の人間にそんなことを言うのは気が退(ひ)けるが、地の果てに行くような気がしました。得体の知れないものたちの住む森と湿地の国、寒冷な気候のせいで人々の心がすさんだ陰湿な国、ローマではそう思われているんですよ。しかし、そのような土地でこそ、信仰は求められているはず、そこへ行くのが聖職者としてのわたしの義務と思ってやって来たのです。ところがどうでしょう、来てみれば、荒廃しているのは人々の心ではなく教会の方だった」

「そんなにひどいのですか」

「まったくのところ、わたしはがっかりさせられました。そこで、ほんとうの信仰を探して、聖地巡礼の旅へ出ることを思いたったのです。エルサレムはいま、イスラム教徒の支配下にあると聞いていますが、それでも聖地を訪れてみる以外に、わたしにできることはないように思われるのです。どうしても、まず聖地を、この目で見てみたい。それがわたしの新しい出発点になると思うのです」

「水道を造りなおし、人々の心に信仰という名の澄んだ水を通わせるために……？」

「まさにその通り。さいわい、ハインメル殿、あなたのような奇特な同行者と出会うことができ、この旅はうまくいきそうです。わたしはいま、わくわくしているところなのです」

「いや、わたしはただ、パトリシウス様、あなたの人柄に魅かれたまでのこと」

「それが有難いことなのです。神の思し召しかとも思っているんですよ」

「そんな大仰な。わたしの方こそ、あなたを守って旅をすることで、十字軍の遠征に参加した騎士たちのような高揚を多少なりとも感じることができて、感謝しているのです。騎士にとって、こんな名誉なことはない」

「ありがとう、そんなふうに言ってもらえるのは、ほんとうに有難いことです」

司祭は何度も深く点頭した。

「司祭様！　司祭様！」

森に沿ってさらに馬を進めていたパトリシウス司祭と騎士ハインメルは、背後から呼びかけるものの声を聞いて手綱を引いた。

振り返ると、その弱々しいかすれた声の持ち主が、足の具合が悪いのか、一歩ごとに危なっかしく傾くような歩き方で近づいてくるのが見えた。

本人は走っているつもりなのだが、長い距離を追いかけてきたために足にはもう地を蹴る力が残っておらず、ただ無理やりに足を引きずって前に出しつづけているだけだった。

パトリシウスは馬を下り、その老いた農夫が近づくのを待った。

それ一枚で一年中を過ごしているにちがいない彼の継ぎ接ぎだらけの粗末な貫頭衣は、垢にまみれ、泥がこびりつき、泥田と選ぶところのない色になっていて、異様な臭気をあたりに撒き散らしていた。鞍の高さまでその臭いは立ち昇ってきて、馬上のハ

インメルが顔をしかめたほどだった。
「パトリシウス様でしょうか」
荒くなった息がすこし収まると、農夫が訊いた。
パトリシウスがうなずくと、農夫は痩(や)せた顔にうれしそうな微笑を浮かべたが、前歯のほとんどなくなった口は黒い洞窟のように見えた。
「よかった。高名な司祭様が通りかかると聞いて、足の痛いのもおかまいなしに、夢中で追っかけてきたんです」前歯のないせいで、ときどき空気の抜けてしまう発音で、農夫は言った。「わたしの病気を治してほしいのです。偉い聖者様ならこの苦しみから救ってもらえると信じて走ってきたのです」
パトリシウスは一瞬困惑の表情を見せ、しかしすぐに微笑して、農夫の肩に触れながら、どんな病気なのかと訊いた。
高い熱が出て、悪寒が走り、体中の肉という肉、骨という骨が引き裂かれるような激痛を発する、そのような症状が繰り返し襲ってくるのだ、と農夫は訴えた。
「いまは熱も痛みも収まっているから、こうしてしゃべっていられるけれど、発作の起こったときは、三日でも四日でも、声も出せずにうずくまっているばかり。発作のたびに体のどこかがおかしくなって、いまでは手も足も思うように動かない。司祭様、これでわたしはいくつに見えますか。実はまだ二十五歳なのです」
パトリシウスは息を呑み、農夫の顔をまじまじと覗きこんだ。
髪がほとんど抜け、膚(はだ)がかさかさに荒れ、前歯も失われているために、六十を越した老人と見えたが、言われてみれば、たしかに目には若い生命の光があった。
「神よ、あわれみたまえ(ミセレーレ・ノービース)」
思わずつぶやき、それから、深い悲しみにとらわれた表情になって言った。
「残念ながらわたしには、伝説に語られる聖者の

ように、奇跡によって病を治すほどの力はありません。わたしにできるのは、ただ、あなたのために祈ることだけです」

農夫は期待を裏切られて、顔を曇らせた。

パトリシウスは聖書を開いて、その一節を読みはじめた。それは、イエスの衣に触れた少女の病が癒えるという話の部分だった。

長い間、病気に苦しんでいた少女が、群衆に紛れてイエスの衣に触れると、たちまち苦しみから解放された。そのとき、イエスが振り返って、自分の衣に触れたのはだれかと問うたので、少女はいけないことをしたのだと思い、恐れ戦(おのの)きながら自分が触れたことを申しでた。するとイエスは言った。

「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい」

このイエスの言葉をパトリシウスが読みあげるのを聞くと、農夫ははっとしたように表情を変えた。

「ああ、お許しください、司祭様」農夫は言った。「いま、わたしは、一瞬だけれど、あなたのことを役に立たないインチキ司祭だと思いました。でも、それはわたしの思い違い。なにかというと神の名を持ちだして、貧乏人から金を巻きあげてばかりいるそこらの生臭坊主と違って、あなたは根っから正直な人だから、病気を治すことなんかできないとおっしゃったのですね。それがわかりました」

「病気を治すことができないのは、わたし自身の信仰が足りないせいでもあるのです。情けないことです。ただ、病は癒えなくても、天にまします神のことを思えば、多少なりとも心の安らぎを得られるのではないかと思って、聖書のいまの一節を読んでみたのです」

「じゅうぶんですよ。いまのわたしにはそれでじゅうぶん。病気のことはしょうがない、なんとか自分の体を騙(だま)し騙し生きていくことにしますよ。そうやって生きていく勇気が、お蔭様で湧いてきました」

農夫は懐から紐で口を縛った小さな布袋を取りだして、司祭に差しだした。
「これは心ばかりのお礼です」
「とんでもない」司祭は手を振った。「そんなお金を受け取るわけにはいきません。わたしはあなたになにもしてあげられなかったのですから」
「いや、司祭様のようなりっぱな方に、体に触れていただいただけでうれしいんですよ。どうぞ受け取ってください。わたしの暮らしには、どうせ大したお金は要りやしない。なにかのときのためにと、森番の目をかすめて蜂蜜をとって稼いだお金だから、こちらには当座なくてもいいお金なんです。聞くところによれば、あなたは聖地巡礼の旅に出るところとか、旅のお金もいるでしょう。あなたに使ってもらったら、蜜を集めた働き蜂もよろこびますよ」
「旅のお金はじゅうぶんではないけれどちゃんと持っています。それより、あなたこそ、病気が悪くなれば薬代が要るでしょう。滋養のあるものも食べた方がいい。お金はとっておきなさい」
そう言って、パトリシウス司祭は馬に乗った。
二頭の馬がならんで歩きはじめると、農夫がそれを呼びとめた。
農夫は腰紐に吊るしていた皮袋をはずして、馬上のパトリシウスに差しだした。
「お金を受け取っていただけないのなら、これを持っていってください。蜂蜜酒です。旅の疲れを癒すのに、効き目がありますよ」
「そんなに言うなら、いただいておきましょう。祝福（ドミーヌス・テークム）を！」
パトリシウスは鞍の上から手を伸ばして、農夫の差しだす皮袋を受け取った。
いつまでも見送りつづける農夫の姿が夕闇に紛れて見えなくなってから、ハインメルが言った。
「やはり今夜は、先刻の村までもどって泊めても

らった方がいいのじゃありませんか。ここから先、道は森のなかへと入っていく。夜、森を歩くのは危険です。最近、このあたりの森には盗賊も出ると聞いています」
「いや」司祭の意志は固かった。「すこしでも進みましょう。神のご加護があれば、盗賊に襲われることもないでしょう」

2

鬱蒼（うっそう）たるブナの森が城の外壁の間近まで迫り、夜の風にざわざわと生い茂った葉を揺らせていた。
　石積みの外壁も、外壁の角々に立つ塔も、いたるところで崩れ落ち、城は住むもののない廃城と見えた。
　積み石の崩壊した跡に泥が溜まって雑草が芽生えてもそれを摘み取るものはなく、草は茂り放題に茂り、蔓（つる）植物が石壁を這い上り、積み石の隙間に根を張って壁の崩壊をさらに押し進めていた。
　が、城の内陣、干上がった内堀に囲まれて建つ天守の、元は城主が客人を招いての晩餐（ばんさん）に使ったであろう大広間と思しいあたり、外壁と同様崩れて雑草の生えた窓からは、かすかに松明（たいまつ）の揺れる明かりが洩れ、ときに人影がその明かりの前を横切るのが見えた。
　ふいにミミズクが鳴いた。
　森の樹冠のなかから、ばさばさっと羽音が聞こえた。
　一呼吸ののち、重々しい蹄（ひづめ）の音とともに、一頭の馬が森から走りでてきた。
　皮の胴着を着た乗り手は、馬の腹を蹴って勢いをつけ、城の建つ丘の斜面を駆けあがると、外壁の破れ目を飛び越して、城の内陣へと躍りこんだ。
　内陣をいくつかに分けている石壁の、その破れ目また破れ目と飛び越し、最後に、下りたままになっ

ている内堀の跳ね橋を渡って、天守のなかへと姿を消した。

大広間には胡椒（こしょう）の匂いが満ちていた。

石壁の数か所に掛けられた松明の明かりが、その匂いの源を照らしていた。

床に置かれた鉄の大鍋だった。

大鍋のなかにはどろどろのスープが煮えていて、鹿のぶつ切り肉とタマネギやニンニクの塊が浮き沈みしていた。

「辛すぎやしねえか、このスープは」

広間の一隅に敷かれたアラベスク模様の豪華な絨毯（じゅうたん）のうえに胡座（あぐら）をかいた、顔の大きい太った男が、スープを啜（すす）ったとたんにむせかえりながら言った。

「文句を言うな。値段から言えば黄金をぶちこんだようなスープなんだからな。こんなスープはここでしか味わえない」

スープの男とは対照的に痩せて鋭い目つきをした男が、絨毯に寝そべってワインを満たした銀の杯を傾けながら言った。

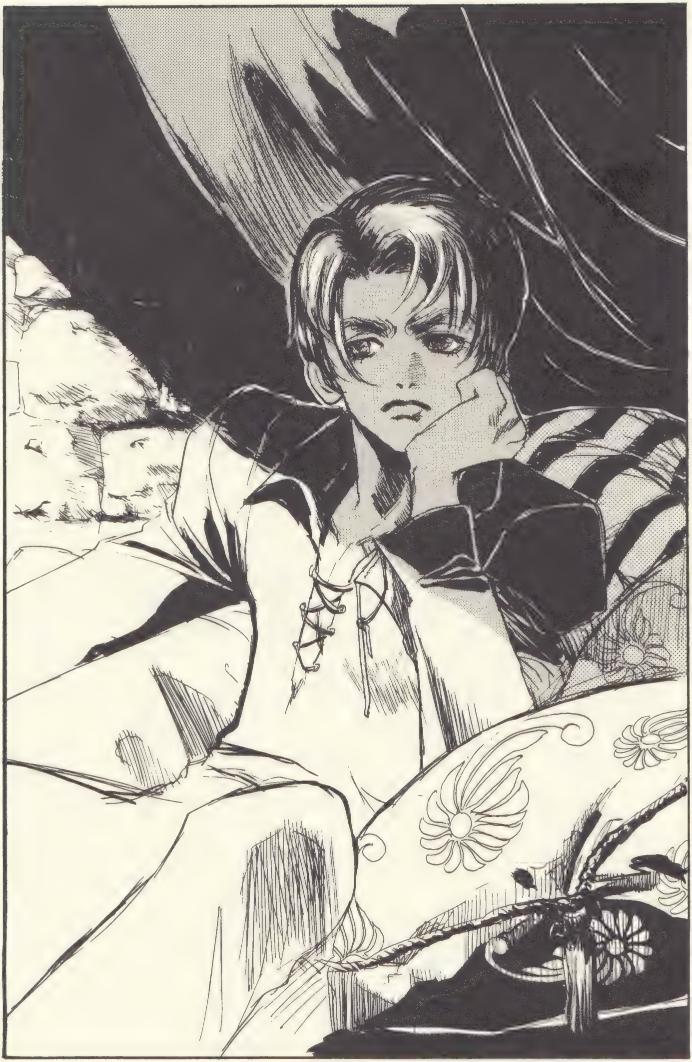
同じ絨毯のうえにいた三人目の男、まだ少年と呼んで差しつかえない、青い目の若い男は、刺繍（ししゅう）のあるクッションに身をもたせかけて、黙って二人のやりとりを聞いていた。

アーチ型の天井と板張りの床を持つ大広間には、ベンチ付きの長い木製のテーブルが置かれていて、そのテーブルの方にも数人の男が集まって腰かけ、ワインを飲んだり、脂ぎった腸詰め肉をほおばったりしていた。

テーブルの下で、投げ与えられた肉を抱えこんで齧（かじ）っていた狼によく似た大型の犬が、歯を剥いて低く唸り声を洩らした。

先刻の馬の乗り手が、広間に入ってきた。犬は唸り止み、また肉を齧りはじめた。

馬の乗り手は、絨毯の三人の男の方へ近づきながら言った。



「獲物が来ましたぜ」
「金目のものを持っていそうか」
太った男が胡椒の辛さをワインで濯ぎながら訊いた。
「遠征帰りの騎士団です。鎧兜も剣も馬も、なかなかりっぱそうだ。今夜は森のなかで野営のようです」
「人数は？」
「二十人ばかり」
「悪くねえな。戦いと長旅の疲れでぐっすり寝こんでもらえれば、仕事がやりやすい」
太った男は、言いながら、痩せた男の方を見やった。
「騎士は見栄っぱりだから、たいていいい品を身につけている。そいつは久々にいい獲物かもしれねえな」
痩せた男はうなずいた。
太った男と痩せた男は、そろって青い目の若い男を振り返り、意向を伺うような表情を見せた。
若い男がうなずいた。
太った男が、テーブルの男たちにむかって大声を発した。
「野郎ども、仕事だ。支度をしろ。みなを集めろ」
水のない内堀の跳ね橋を渡り、外壁の破れ目を飛びこして、それぞれに松明を掲げた数十頭の馬の群れが、城から夜の森のなかへと走りでた。
先頭に、青い目の若い男の姿があった。長大な剣を背に斜めに負っている。
太った男が馬を寄せてきた。
「ジーク、たしかおまえの親父さんも、遠征に出たんじゃなかったか」
ジークと呼ばれた若い男は、じろりと太った男を睨んだ。少年のようにあどけない顔なのに、その青い目には途方もなく深い井戸の底に太古から淀んで動かない水のような暗さが宿っていた。
「おれには父はいない」

言ってジークは、それが好物のはしばみの実を口に放りこみ、音をたてて噛んだ。
「あっは、恰好をつけるなよ。このフォルケルにそんな気取り方をしてみたってはじまらないぜ」
「いないんだよ、父親なんて。おれの生まれる前からいない」
「そんなわけはなかろう」
「いないと言ったらいないんだよ。いないからこそ、あの女はあんな暮らしをするようになった」
「あの女？」
「マーガレットさ」
「おふくろさんか。つまり、親父さんに捨てられたというわけだ。親父さん、なんといったかな、名は」
「フレデリック・シュタウフェン」
「騎士だったんだろう」
「ごろつきさ。マーガレットをたぶらかして、おれを孕(はら)ませて、それっきりだ。騎士は最愛の想い姫に命を捧げるものだなんて、ただのたわごとだ」
「まあな。きょう日そんな騎士にはお目にかかったことがない」
「おかげであの女は、そこらの男にすがりついては捨てられて身を持ち崩し、いまでは街中の笑いものだ」
「おまけに息子のジークフリートは、盗賊稼ぎの毎日ときた」
「いいのさ、世の中そんなもんだ。おれはおれでかってに生きていくことにしたんだ。あの女も息子の心配をする必要がなくなって、ほっとしていることだろうよ」
「逞しいこった」
「首領が逞しくなきゃ、おまえらが困るだろうよ」
「そりゃそうだ」
「騎士が騎士道を守らない世の中で、どうしておれたちが人の道を守らなきゃならない。かならず帰ると約束して遠征に出たはずの騎士様は、二度と帰ってこなかった。金のあるやつから金をかっぱ

らっちゃいけないと、だれに言える」

「言えやしないさ、たとえローマ教皇にだってな。狼が兎を食うのは生まれついてのこと。だれにも咎められはしない」

「ははっ、うまいことを言う」ジークは短く冷めた笑い方をし、またはしばみの実を噛んだ。「ところで、フォルケル、おまえの父親はどんな父親だ」

「父親？ そんなしゃれたもんは、おれにはねえよ」

「こいつ、気取るなと言ったのはどこのどいつだ」

深い森の奥にできた空き地に至って、ジークは一団を止め、斥候を選んでもういちど野営中の騎士団のようすを見にやらせた。

斥候が出ていくと、盗賊団の面々を集めて、ジークは言った。

「いいか、敵は皆殺しにしろ。ひとりたりとも生かしておくな。だれにも顔を知られたくないし、根城を知る手がかりを与えたくない」

「それから」とフォルケルが付け加えた。「金目のものはすべて城へ持って帰って山分けだ。かってにてめえの懐へ入れようとするな」

3

闇の底にオレンジ色の焚き火の炎が揺れ、木のはぜる音とともに燻製肉をあぶる匂いがあたりに漂いはじめた。

炎のまわりに集う影は、みな甲冑(かっちゅう)をまとったいかつい形をしていて、動くたびに鉄の触れ合う音がした。

騎士団の野営地には、どこか和(なご)んだ空気が流れていた。

燻製肉もパンもこれまでの旅の夜々とは異なって盛大に、騎士やその従者たちに配られた。

皮袋に入ったとっておきの蜂蜜酒も、そのありっ

たけが供されて、みなでそれをまわし飲みにした。もはや食べものや飲みものの残量を気にして、ちびちびと小出しに分配する必要はなくなったのだった。

腹が満たされ、酒の酔いも多少まわると、騎士団長が立ちあがって剣帯をはずし、鉄の胴着を脱いだ。さらに胴着の下に着た鎖かたびらも脱ぐと、ふうと溜息をついた。

「おいおい、フレデリック、寝るときも鎧を脱ぐことを禁じたのは、あんた自身じゃなかったのか」

周囲の黒い影のひとつが声をかけた。

「いいことにしようじゃないか」騎士団長フレデリックは凝った体をほぐすように動かしながら答えた。

「明日は故郷だ。ここまで来て気を引き締めていてもつまらないだろう。きょうはみな、鎧を脱いで、ゆっくり休めばいいさ」

騎士たちのあいだから歓声があがり、いかついいかつい影が次々に立ちあがって胴着や籠手(こて)をはずしはじめた。

フレデリックは下シャツ一枚の姿になり、兜を枕に柔らかい下生えの草のうえに身を横たえた。懐かしい土地の草は懐かしい匂いがした。

寝ころがったまま、鎧とともに放りだした剣帯を探り、手元へ引き寄せた。

剣帯に小物入れが付いていていた。鏃(やじり)や拍車、鎧を修繕するための予備の蝶番や針金、蠟燭(ろうそく)や火打ち石、乗馬用の手袋などを入れてある小物入れとは別の、もっと小さな、ただひとつの物だけを収めるために付けられた、皮の小物入れだった。

フレデリックは細い止め紐を解き、小物入れの蓋を開け、中身を引っぱりだした。

小さくたたまれた赤い布だった。

広げると、角に白い糸で縫い取りがあった。

縫い取りは飾り文字のMの形をしていた。
その女物の絹のハンカチーフを眺めていると、親しい騎士のひとりカールが寄ってきて、フレデリックの肩をたたいた。
「またマーガレットのハンカチーフか」
「ああ」フレデリックは照れることなく、うなずいた。「長いこと、留守にした。息災であればいいが」
「マーガレットと、それから何といったか、息子は……？」
「ジークフリート。無事に成長していれば、十六歳になる」
「きっと元気でいるさ。しかし、そうやって数えてみれば、はや十年が過ぎているのだな」
「長い遠征だった」
「なにやら、われわれの部隊だけが、あちこち転戦させられていたような印象があるな。とんでもない辺境の地まで行かされた」
「神聖ローマ皇帝の直接の命令とあればいたしかたない」
「さあ、そこがわたしには怪しく思われる。ほかの部隊は少なくとも何度かは故郷に帰る機会を与えられている。われわれだけがなかった。フレデリック、わたしはあんたがだれかに怨まれているか妬まれているような気がしてしようがない」
「まさか。そんな覚えはわたしにはないぞ」
「まあな、あんたのような誠実そのものの人物を怨んだり妬んだりする人間など、いそうもないがね」
「いや、それほどのことはないが」
「あるさ。この部隊のものたちはみなそう言っている。転戦先の土地にどんなに美しい娘がいたって、あんたはひとかけらの興味も示さない。ほかの連中は、敵の状況よりもなによりも、その土地に美しい娘がいるかどうか、まっさきに知りたがるというのに」
「そんなことはない。わたしだって、戦場で恋に落ちたことぐらいはある」

「うそをつけ。いつどこでだ。言えるものなら、その娘の名を言ってみろ」

「言えるさ」フレデリックは小さく笑った。「彼女の名はマーガレット」

「あっははは」カールは高らかに笑った。「やはりな。あんたが想うのはマーガレットのことばかり」

「悪いか。騎士たるもの、想い姫には絶対の愛と忠誠を捧げるもの。古いかもしれないが、わたしはそのような騎士でありたいのだ」

「悪くはないさ。しかし、かみさん一穴主義というのも、辛くはないかと思ってな。まして、十年も離れ離れのかみさんだ」

「辛くはないさ。わたしにはそれが心のままに従った自然なことだから」

「なるほどな。そういう男もいるのだな。見知らぬ土地の美しい乙娘の柔肌より、愛妻のイニシャルの入った絹のハンカチーフの方が、異郷の夜の安らぎになるというわけだ」

「マーガレットの想いのこもったハンカチーフだからな」

「わかった。もう冷やかすのはやめよう。マーガレットと息子のジークフリートに無事再会を果たせることを祈っているよ」

カールがそう言ったとき、森の木に繋いであった馬たちの落ちつかなげな声が聞こえてきた。

馬が身動きするせいで、木々の葉が揺れてざわざわと音をたてた。

フレデリックは表情を強ばらせてカールと視線を合わせた。

次の瞬間、剣帯をひっつかみ、バネ仕掛けのように跳ね起きた。

しゃりんと音をさせて長剣を抜き、剣帯を投げ捨て、馬たちを繋いだ方を透かし見た。

カールもみずからの鎧を脱ぎ置いてある場所の方へ駆けていった。

「どうかお静かに。驚かせて申し訳ないが、怪しいものではありません。剣をお収めください」
　そう言いながら森のなかから姿を現わしたのは、頭布つきの僧服の男だった。
　騎士姿の男を伴っていたが、彼は剣を鞘に収めたままで、両手を広げてそこに武器を持たないことを示していた。
　ほとんどのものが裸足に下シャツ姿、なかには下穿き一枚のものもいて、その恰好で剣を構えている騎士団の面々に囲まれながら、僧服の男は頭布を背に落として顔を現わし、やさしい微笑で騎士たちを見まわした。
「わたしはパトリシウスと申す司祭、聖地巡礼の旅の途中です。こちらは巡礼旅の護衛を申し出てくれた奇特な騎士ハインメル殿」
　騎士団の面々はほっと表情を緩めてフレデリックを見やり、フレデリックがうなずいたのでいっせいに剣を下ろした。
「すこしでも旅程を稼ごうと、日が落ちてから森に入ったのですが」パトリシウスは続けた。「夜の森を進むのは予想以上の困難さ、恐ろしさ、道に迷って通り抜けることができず、心細いままましかたなく野宿かと思っているところへ、こちらの焚き火の火が見えたのです。見れば頼もしい騎士団の野営地、どうかわたしたちを仲間に入れて、野営地の端の方にでも休ませてはもらえませんか」
「いいですとも、司祭様」フレデリックは言った。「聖地巡礼とはりっぱなお志。そのような方をお守り申しあげるのは、騎士の名誉です。端の方などとおっしゃらず、どうぞ焚き火の近くへ」
　フレデリックはパトリシウスとハインメルに蜂蜜酒を勧め、燻製肉をふるまった。
　珍しい客人に、騎士団の面々が焚き火のまわりに集まり、酒を飲みながら話をねだった。
　パトリシウスは、巡礼の旅の苦労や修道院での暮

らしぶりなど、騎士たちのおもしろがりそうな話をじょうずに語った。

騎士たちも遠征の苦労話や手柄話を競って語った。

やがて、一人また二人と騎士たちは焚き火の前を離れ、思い思いの場所で木の根を枕に眠りについた。

長旅の疲れと酒の酔い、帰郷の近い安心感で眠りが深いのだろう、闇のなかのあちこちから大きないびきがしはじめた。

フレデリックがいなくなり、ハインメルが眠ってしまってから、司祭は弱くなった焚き火の明かりを頼りに、しばらく聖書を読んでいたが、やがて聖書が閉じられ、司祭の頭が頭布のなかに隠れると、あたりは静寂に包まれ、ときどき焚き火のはぜる音が聞こえるばかりになった。

4

風もないのに、ブナの梢（こずえ）の葉むらが、わさわさ……、わさわさ……と、音をたてた。

ブナの木の根元で、幹に繋がれた馬たちが、不安げな声を洩らしながら、しきりに蹄で地を掻き、首を振っていた。

馬たちの苛立った動きはしだいに激しくなり、ブナの葉むらもざわめくように揺れはじめたが、森のそこここに散らばって眠りこんでいる騎士たちのだれも、目を覚ますようすはなかった。

フレデリックも、夢のなかで馬たちの気配を感じるのか、寝苦しげに寝返りを打っただけだった。

木々の間の闇を透かし見るものがあれば、森のあちらこちらに、白銀色の筋のようなものが、ときおり一瞬光るのが見えただろう。

無言のうちに獲物の間近まで迫ってきている盗賊団の、抜き身の剣の刃が光るのだった。
やがて盗賊団は、水が染み入るように静かに、野営地に入ってきた。
盗賊団のひとりが、木の根元に横たわっている騎士のそばに忍び足で近づき、熟睡した寝顔を覗きこんだ。
彼は抜き身の剣を逆手に構えて、他の盗賊たちのようすを窺(うかが)った。
二人目の盗賊が、別の騎士の傍らに立ち、同様にそっと剣を構えた。
さらに、三人目と四人目と五人目の盗賊が、三人目と四人目と五人目の騎士に忍び寄り、それぞれ胸の真上に剣を構えた。
そのとき——
「なにものだ！　盗っ人か！」
気配に目覚めた騎士の大声が響いた。
瞬間、五人の騎士が剣に胸を刺し貫かれ、大地に縫い止められていた。
盗賊団の襲撃に気づいた最初の一瞬で、騎士団は五人の味方を失ったのだった。
わっと叫んで飛び起きたパトリシウスは、立ちあがったとたんに僧服の裾を踏んで、もんどり打ってひっくり返った。
もがいてどうにか起きあがったときには、あたりは剣の刃のぶつかりあう激しい音の響き渡る戦場と化していた。
焚き火はすでに消えて、明かりといえば盗賊のなかの何人かが掲げる松明だけだったから、どの人物も真っ黒い影となっていた。
影と影が交錯し、ときに一瞬、炎に赤々と顔を照らされては、また闇に呑まれた。
皮の胴着や鎖かたびらを身につけているのが盗賊で、そうでないのが騎士たちと、影の形からだけでもある程度見分けがついた。

どうにか剣を取って立ち向かってはいるものの、騎士たちが圧倒され、次々と盗賊たちの剣の餌食になっていた。
影のひとつを、どうやらハインメルと見分けることができた。
騎士たちのなかで、ハインメルだけが胴着を着けていた。
油断のない、頼もしい同行者と、パトリシウスは思った。
そのハインメルが、盗賊の剣を盾に受けつつ後退し、もう一人の別の盗賊に後ろから足払いをかけられて、尻餅をついた。
尻餅をついたまま、盾で剣を交わしつづけるハインメルの背後で、足払いを食らわせた盗賊が剣を振りあげ、ハインメルの項(うなじ)めがけて振り下ろそうとした。
叫びを発しながら、パトリシウスは走りだした。
僧服を翻して、ハインメルの背後の盗賊に体当たりをくらわせた。
盗賊は弾き飛ばされて、地に倒れた。
パトリシウスはたたらを踏んで立ち止まると、次にはハインメルを襲っている盗賊の背後から抱きついて、首を締めあげた。
盗賊がもがく隙に、ハインメルが立ちあがり、剣の一撃をお見舞いした。
倒れた盗賊の手から剣をもぎとって、パトリシウスはほかの騎士たちの加勢に走ろうとした。
「司祭様、司祭様！」ハインメルがパトリシウスの僧服の袖をつかんで引き止めた。「あまり調子に乗るのはおよしなさい」
パトリシウスは振り返った。
「わたしは調子に乗っていますか」
「はい。いまはたまたま、体当たりの当たりどころがよかっただけ」
「たまたま？　ですか」
「はい」

「わたしは我ながらけっこうやれるものだと感心していたのですが」
「そう何度もうまくいくものではありませんよ。司祭様の体は騎士のように鍛えられているわけではないし、剣を振り回すのは司祭様の仕事ではない」
「そうですか。しかし、騎士たちが盗賊団にどんどんやられていますよ」
「しかたない。騎士団はすこし油断をしました。いくら故郷が近いからと言って、見張りも立てずに寝てしまったのは失敗でした」
「ほんとうに、そういうときこそ、心をいましめなければいけないのですね。わたし自身の教訓としましょう」
「生き延びられればね。とりあえず、司祭様、ここはお逃げください。わたしがお伴します。こちらへ」
ハインメルはパトリシウスの肩を抱くようにして、闇のなかを走りはじめた。

フレデリックが寝ころがったまま頭のうえを手探りして、どうやら剣帯を探りあてたときには、大きな影がすでに足元まで迫っていた。
影は諸手で剣を頭上に振りかぶり、大地を叩き割ろうかというほどの勢いで振り下ろしてきた。
剣を抜くのが間に合わず、フレデリックは仰向けに寝た顔の前に、剣帯に付いた鞘ごとの剣を縦に支えただけだった。
盗賊の剣はがきんっと音をたてて、鞘に当たった。
その刃は、フレデリックの喉めがけて振り下ろされたものだった。
刃は喉の上、握り拳ひとつ分のところで止まっていた。
鞘が刃を防いだと知ると、敵は剣に体重を乗せて、そのまま押し切ろうと試みた。
フレデリックは必死でその圧力に耐え、押しもどそうとした。
鞘と刃が嚙みあったまま、ふたりの男の力が拮抗

して、ぶるぶると震えた。
ついに敵はあきらめて、ふたたび剣を振りあげた。あらためて大上段からの一撃を繰りだそうというのだった。
その一瞬の隙に、フレデリックは鞘に入ったままの剣を抱いて、地面を転がった。
敵の一撃をかわし、かわしただけでは足りず、そのまま勢いをつけて五回転、六回転、ごろごろと転がり続けた。
そうしながら、剣の柄をつかんだ。
回転を止めると、剣を引き抜きざま、下から斬りあげつつ、起きあがった。
フレデリックの剣は迫ってきた敵の剣を跳ねあげて、闇に火花を散らした。
ようやくフレデリックは反撃に移ることができた。
敵は大きな黒い影としか見えなかった。
ただ、その影の背後、森の木々の向こうに、盗賊たちの掲げる幾本かの松明が揺れていて、影の輪郭と剣の動きは見極めることができた。
剣の刃が鈍く赤く光るのを頼りに、受けては斬りこんだ。
敵は上背があり、膂力（りょりょく）も人並はずれてあり、斬りこんでくる剣が重く、威力があった。
が、技と速度は、フレデリックの方が一枚上手だった。
自分が胴着も鎖かたびらもまとわず、下シャツ一枚でいるのが情けなく、頼りない気がしたが、いまはそんなことを気にしていられなかった。
フレデリックは斬りこみつづけ、しだいに敵を追いつめ、後退させた。
じりじりと後退していた影が、急に視界から消えた。
同時に、ずしんと重い音がした。
敵が木の根に蹴つまずいて、仰向けに倒れたのだった。
フレデリックは踏みこんで、剣を一振りした。

その一振りを受けようとした敵の剣には、力がなかった。
敵の剣は闇の彼方へと弾き飛ばされた。
いまや敵の命は、フレデリックの掌中にあった。
フレデリックは剣を振りかぶった。
そのとき、突然、フレデリックは、背中に熱いものが爆発するのを感じた。
目の前が真っ赤になった。
何が起こったのか、わからなかった。
一瞬遅れて痛みがやってきた。
灼熱の太陽を背中に射込まれたような激しい痛みだった。
やられた……と、それだけを思った。
全身が硬直し、息を吸おうと思っても吸えなかった。
意識が遠退きはじめた。
すべてがぼんやりし、森が溶け崩れた。
最期の瞬間、フレデリックが見たのは、みずからの胸から突き出している剣の鋭い切っ先だった。
フォルケルは覚悟をしていた。
自分の首が胴体から離れて宙に飛ぶものと思った。
が、そうはならなかった。
フォルケルに斬りつけようとしていた騎士の体の動きが、急に止まった。
地に倒れ、剣も失い、抵抗のすべをなくしていたフォルケルの命は救われた。とどめを刺されることはなかった。
騎士の体に衝撃が走り、手足が硬直し、剣を取り落とした。
暗くて表情までは見えなかったが、顎(あご)がぴくぴくと震えるように上下し、必死で呼吸をしようとしているように見えた。
それから、闇にも赤く、騎士の胸から血のしぶくのが見えた。
騎士の体は、前のめりにゆっくりと倒れはじめた。



フォルケルはすわったままあとじさって、その体の下敷きになるのを避けた。
枯れ木の倒れるように騎士が倒れ伏すと、その向こうに人影が見えた。剣を構えていた。
その影の輪郭、立ち姿、手にした剣の長大さだけで、顔は見えずともフォルケルにはそれがだれかわかった。
「フォルケル、無事か」
影が言った。
ジークフリートだった。
盗賊団の首領は、剣を一振り二振りして、騎士の血を払った。
「助かったよ、ジーク」
フォルケルは言って立ちあがると、弾き飛ばされた剣を拾って、まだ続いている戦いの方へと走っていった。
ジークはフォルケルのあとを追おうとして立ちどまった。
足が何かを引っかけたからだった。
足首にからまりついたものを拾いあげてみると、剣帯だった。長剣の鞘と短剣、それに皮製の小物入れがいくつか、ぶら下がっていた。
腰に付ければ、ちょうど臍の脇のあたりに来る位置に、簡単な模様の刻印が焼きつけてあった。ジークはじっとそれを見つめた。
それから、いちばん小さな小物入れに目を止め、指先でそれに触れた。が、開くことはしなかった。
剣帯を手にしたまま、あたりを歩きまわりはじめた。そうして、先刻刺し殺した騎士が寝ていたと思しい場所を見つけた。そこに、鎧、兜、籠手などの騎士の装具一式と、盾が置かれていた。
伏せられていた盾を起こし、それを掲げて仲間の松明の揺れる方に向け、表に描かれた紋章を見た。
鷲をモチーフにした紋章だった。ジークの頬がかすかに震えた。

盾を置き、俯(うつぶ)せに倒れている騎士の死体を見やった。

そのまま、じっと見つめつづけた。

騎士は動かなかった。

下シャツを着た逞しい背中に、呼吸の上下動はなく、裸足の足の裏がばかにくっきりと見えていた。ジークの仲間たちの振るう剣の音、発する声が、遠く聞こえた。風か、夜行性の小動物か、ブナの梢の葉の揺れる音がかすかにした。

ジークは、手にした剣帯の大きめの小物入れを探って、蜜蠟でつくった蠟燭と、火打ち石を見つけた。しゃがんで蠟燭に火をともした。

蠟燭の明かりで、右の手の甲に、騎士を刺し殺したときに浴びた返り血の付着しているのが浮かびあがった。一枚の木の葉が、血とともに張りついていた。引きはがすと、血のつかない肌が、葉の形に現われた。

血に汚れた葉を捨て、蠟燭を手にして立ちあがった。騎士の死体の方へ近づいた。下シャツの背が裂け、血まみれの傷口が覗いているのが、蠟燭に照らしだされた。

死体の傍らに蠟燭を置いた。

その明かりで、剣帯の刻印をもういちど見た。それから、いちばん小さな小物入れの止め紐を解き、蓋を開いた。指を差し入れ、引きだすと、赤い布が引きだされてきた。

広げてみた。

縫いとりがあった。

Mの飾り文字。

ふたたび丁寧にシルクのハンカチーフをたたみなおすと、小物入れにしまった。

騎士は死してなお剣を握っていたが、ジークはその指を開き、剣を手にとった。剣帯の鞘に収めると、ぴたりと収まった。

ジークは死体の傍らに立ち、じっとその背中を見下ろした。石と化して、何万年でもそこに立ち尽く

しているのでないかと思われた。
　どれほどそうしていただろうか、やがてジークは地面に膝をつき、両手を伸ばして死体のこめかみをはさみ、意を決したように顔を蠟燭の明かりの方に向けた。
　揺れる炎に照らしだされて濃く陰影のついた、彫りの深い顔を、ジークは凝視した。
　死体は目を見開いていた。瞳が青かった。
　ジークは天を仰いだ。
　口を開いて息苦しいとでもいうように顎を上下させるうちに、喉の奥からかすかに声が洩れはじめ、声はしだいに大きくなり、ついに絶叫に変わった。

5

ジークは森を走っていた。すべては闇に包まれ、空気はべっとりと湿り気を帯びていた。
　その湿った闇のなかへ、頭上を覆った何万枚何億枚の木の葉のなかから、猛禽類の食い散らかした地鼠や栗鼠(りす)の腐った肉の匂いが漂い下りてきていた。
　緩慢な速度で溢れだし滴り落ちる樹液を求めて、キチン質の六本の肢の擦れあうかすかな音をさせながら這いまわる夜行性の甲虫の、その行きあたりばったりの動きが木の幹の表面に描きだす軌跡と、老人の顔に刻まれた皺のような樹皮の模様が、重なりあい混じりあって、大きな口を開いて叫びをあげる少年のようであったり長い髪を振り乱して性的恍惚に酔い痴(し)れる女のようであったりする謎めいた絵模様を、闇の奥から不意に浮かびあがらせたりした。
　森はどこまでも続いていた。ジークは森を走りつづけた。

木々の枝をかいくぐり、パトリシウスを導いて走りながら、
「馬を連れてくる」
ハインメルが言った。
すでに息のあがっていた司祭は、ほっとしたように立ち止まった。
騎士は馬を求めて、闇のなかへと走り去った。
どうやら息の整ったパトリシウスが顔を上げると、黒々とした葉むらのむこうに、ちらちらする明かりが目に入った。
葉が揺れて、その陰に見え隠れするのだろう、明かりは十字型に光芒を放ったり、闇に呑まれて消えたりを繰り返していた。
司祭はそちらへ近づいていった。
明かりは地面に立てられた蠟燭の炎であることがわかった。
それに照らされて、男の体が俯せに倒れていた。明かりは男の顔を間近から照らしていた。フレデリックだった。
「ああ、神よ！」（ユワー・メー・ヘルクレース）
パトリシウスは走り寄って、フレデリックの背中を揺すった。シャツが血にまみれていた。
一夜の守護を保証してくれた騎士団長であった。つい先刻まで愉快に語りあっていた相手であった。
司祭は騎士団長の鼻に手をかざし、首筋に指を当てた。息も脈もなかった。その事実を否定したい気持ちで、司祭は首を振った。
人の死を受け入れるのは、だれにとっても難しいことだった。司祭にしても例外ではなかった。信じたくない気持ちだった。目の前の事実が間違いであってくれれば、と願った。
「フレデリック殿、フレデリック殿！」
詮ないことと知りながら、司祭は騎士団長の名を呼んだ。
死体は死体のままだった。現実を変える力は司祭にはなかった。

騎士団の抵抗が弱まり、おおむねかたがついたと見て、フォルケルは剣を収めた。
見まわせば、闇の底に、累々と騎士たちの死体が横たわっていた。
なお数人の騎士が抵抗したり逃げまわったりしていたが、それは手下に任せておいてよさそうだった。
フォルケルはその戦場をあとにして、先刻やりあった手ごわい騎士の死体のある方へ歩いていった。
その騎士の死体のところで、ジークと別れたままになっていた。襲撃が完了すれば、首領に締めくくりをしてもらわねばならなかった。
葉むらの向こうに、蠟燭の明かりが揺れるのが見えた。
明かりに照らされて、僧服姿の男が死体の懐を探っていた。
「なに？」
目を剝いて、フォルケルは走りはじめた。
走りながら、剣を抜き放った。
「何をしてやがる。こそどろめ。おれたちの獲物をかすめとろうってのか」
怒声を発しつつ、斬りかかった。
「わっ」
パトリシウスは尻餅をついた。
僧服の長い裾がからまるのを、足をばたつかせて跳ね退けながら、必死に立ちあがった。前のめりになりながら、転げるように逃げた。
フォルケルは剣をかざして追いまわした。
木立の奥から、にわかに蹄の音が聞こえてきた。と思う間もなく、茂みを突き破るようにして、馬が飛びだしてきた。
二頭いた。めりめりばさばさと枝葉の折れる音をたてて、相次いで飛びだしてきた。前の馬に騎士が乗り、後ろの馬を手綱で引いていた。
馬の蹄がフォルケルを襲った。あわてて身をかわした。
「司祭様！」

馬上の騎士が叫んだ。
僧服の男が馬の方へ駆け寄った。騎士が馬上から手を伸ばして、鞍の後ろへ抱えあげた。
「待て！」
フォルケルはあとを追ったが、二頭の馬はたちまち森の暗闇の奥へと姿を消した。
歯噛みしつつあきらめたフォルケルが、死体のところへもどると、ジークがいた。

死体の周囲に、騎士団をかたづけ終えた盗賊たちが集まってきつつあった。
ジークは死体の傍らにじっと立って、死体を見下ろしていた。
仲間も従卒もすべてを失い、みずからも命を失った騎士団長の死体だった。
成功裡に一働き終えた満足感を首領の顔に読みとろうと、フォルケルはその表情を覗った。
そのとき、死体の顔のそばに立てられていた蠟燭が燃えつきた。
死体が黒い塊に変わり、盗賊団の首領の顔も闇に包まれた。
松明を掲げたものが進みでた。
ジークの顔がふたたび明かりのなかに浮かびあがった。
手下たちは、襲撃の終結を宣言する言葉が発せられるのを待って、ジークに注目した。
フォルケルはジークの顔をいつもと違うものに感じた。
表情というものがない。石を彫りこんで造った彫像のようだった。顔色も、松明の赤い光に照らされているにもかかわらず、月光のもとの氷のように青く見えた。
「だれだ」
と、ジークが言った。
「…………？」
フォルケルはただジークの顔を見つめた。

「まさか……」フォルケルは茫然としながら言った。
「これがおまえのおやじさんだと言うのか」
「そうだ。これは父上の死体だ」
「なんてことだ」
「殺したのはだれだ」
「何を言っている、ジーク。覚えていないのか、さっきおれを助けてくれたときのことを」
フォルケルは困惑しながら、ジークの目を覗きこんだ。青い目の奥に何も読みとることはできなかった。
その洞窟のような目でフォルケルを見返しながら、ジークが言った。
「知っているのなら、教えてくれ。フレデリックを殺したのがだれなのか。おれはどうしてもそれを知りたいのだ」
フォルケルは唾を呑んだ。その答えを口にのぼせることはできなかった。

「父上を殺したのはだれだ」
ジークがまた低い声で言った。視線はフレデリックの死体を見下ろしたままだった。
「なんだって？」
フォルケルが訊き返したとき、ジークが動いた。
フレデリックの鎧が放りだされている場所まで行き、盾を拾いあげた。フォルケルに盾の紋章を示した。
「鷲の紋章。騎士フレデリック・シュタウフェンの紋章だ」
ジークは言った。
死体のところへもどり、剣帯を取りあげた。鞘に収まった剣を示し、剣帯の刻印を示した。
それから、剣帯に付けられた小物入れの蓋を開き、赤いハンカチーフを引っぱりだし、広げて見せた。
「マーガレットのMだ」
ジークは言った。

6

城のなかでは、朝から酒盛りがはじまっていた。泥酔した盗賊たちが、テーブルを叩いて高歌放吟し、猥褻（わいせつ）な冗談を言いあってふざけ倒し、殴り合いの喧嘩をしてそこらのものを壊して歩いていた。

昨夜、騎士団を襲った収穫が大きかったので、浮かれているのだった。

鎧や兜や籠手、槍や剣や盾、二十頭以上の馬、鞍や鐙など、売り飛ばせば間違いなく一財産だった。それぞれの騎士が携帯していた路銀も、掻き集めれば相当の額になった。

その騒ぎが、城の背後の丘にいるジークのところまで、風に乗って伝わってきた。

ジークのいる丘の緩やかな斜面には、朽ちかけた木製の十字架がたくさん立ち並んでいた。

かつて城で暮らしたものたち、騎士や兵卒、執事や書記係、料理人や毒味役、厩番や掃除人、軽業師や音楽家、司祭やその弟子、何代にも渡るそういった人々がそこに眠っていた。

いまや墓守りもなく、十字架は腐り崩れ、墓地は風化して、丘の一部にもどろうとしていた。

その片隅に、新しい墓穴が掘られていた。底にフレデリックの死体が横たえられていた。

墓穴の傍らに立ったジークとフォルケルが黙禱を捧げ、胸で十字を切った。

フォルケルはシャベルを取り、いましがた掘り返して積みあげた土の山を崩して、死体を埋めはじめた。

途中からジークが手伝った。

フレデリックの死体が土に隠れていく。あたりは静かで、土のかけられるさらさらいう音が耳につく。ときおり城の騒ぎが遠く聞こえる。

「僧服の男がいただろう」

ジークが言った。
「夕べの話か」
「おまえに追われて逃げまわっていた」
「見ていたのか」
「あれは教会の司祭かなにかか」
「そのようだ。そう呼ばれているのを聞いた」
「なぜそんな人間があんなところにいた。遠征騎士団に加わっていたとでもいうのか」
「言われてみれば妙だな。あの司祭と司祭を連れて逃げた騎士は、騎士団と行動をともにしていたわけではないのかもしれない」
「怪しくはないか。父上の死体のところで何をしていたんだ」
「懐を探っているように見えた。おれはどさくさまぎれのこそどろ野郎だと思った」
「やはりな。それではっきりしたな」
「何がだ」
「父上を殺したのはあいつだ」
「なに……？」
「どさくさまぎれと言ったな。まさにそうだったのさ。あの司祭と騎士は、遠征騎士団とは別口の人間だった。おれたちの襲撃の現場に通りかかって、まさにどさくさまぎれに父を襲ったのだ。あの場面でなら、泥棒を働いたって、すべては盗賊団、つまりおれたちの仕業ということになる。罪に問われる心配はない。おまけに、父は襲撃で混乱していた。殺すのはたやすいことだった」
「ジーク……」
フォルケルは土をもどす作業の手を止めた。
ジークも手を止めて、フォルケルを見た。
「父の死は辛いか」
フォルケルが訊いた。
ジークはうなずいて、ふたたび手を動かしはじめた。
フォルケルも作業を続けた。
「フレデリック殺しの犯人は、ほんとうにあの司祭

だと思うのか」
「まちがいない」ジークは言った。「父の死体の傷を見ただろう。背中からやられている。あんな汚い殺し方をするのは、こそどろ野郎に決まっている」
フレデリックの死体はすでに土に覆われて見えなくなっていた。
穴の上に盛りあげた土のうえに、簡素な木製の十字架が立てられた。
ジークとフォルケルは、長い黙禱を捧げた。
手を組んだまま、ジークが十字架に向かって言った。
「父上、無念でしょう。かならずおれが仇を討ちます。あの司祭の首をここに持ってきます」
「本気か」
フォルケルが訊いた。
「本気だ」ジークは言った。「草の根を分けても、あの司祭を捜しだし、この手で殺してやる」
ジークはシャベルを拾うと、城にむかって歩きはじめた。
フォルケルもあとに従った。
「ジーク、疲れてはいないか」歩きながらフォルケルが言った。「夕べからほとんど寝ていないだろう。すこし休んだ方がいい」
「休んでなどいられない。父の仇を捜すのだ。おまえも手伝ってくれるだろう」
「ああ、いいさ」フォルケルは言った。「ただ、ともかく一眠りしてからだ。ゆっくり眠って、それから、どうするかもう一度相談をしよう。その方が、頭もすっきりして、ものがよく見えるようになるだろうからな。自分では気づいていないかもしれないが、おまえはかなり疲れているよ」
二人が向かいつつある城からは、なお盗賊たちのお祭騒ぎが聞こえてきていた。
かばうようにジークの背を押しながら、フォルケルはその騒ぎの方へ歩きつづけた。

第三章

1

その若い漁師は浜に出ると、眉をひそめて遠くの空を見やった。
まだ日の出前の時刻で、海辺の村は眠りのなかにあった。
漁師の見ているのは、浜づたいに行ける隣村の方だった。
その方角の、薄明るくなりかかっている空を、海鳥がいっぱいに群れ飛んでいた。
騒がしく鳴きかわす声も聞こえていた。その声に、漁師は眠りを妨げられて、起きだしてきたのだった。

異様なほどの海鳥の多さであり、異様なほどの騒ぎ方だった。隣村の方にばかり群れ飛んでいるのも妙だった。
漁師は隣村の方へ歩きはじめた。
浜をたどって隣村に着いた漁師は、息を呑んで立ちすくんだ。声もあげられないうちに、膝ががくがくと震えはじめた。
彼の目が最初に吸いつけられたのは、人間の腕だった。腕だけが村の入口に転がっていた。肩口から切断されて、ピンク色の肉のなかから白い骨が覗いていた。
目を上げると、草葺きの家が点在する村のいたるところに、血まみれの死体が転がっていた。
すべてその村の住人の死体だった。彼の知った顔も、幾人もあった。みな苦悶の表情を浮かべてこと切れていた。
「う、う、うわわわわ」
若い漁師はようやく声をあげ、よろけるように村

へ駆けもどった。
いくらも経たないうちに、惨殺の村の話は近在の村々に伝わった。
村人たちが惨殺の村に集まってきた。
あたりはみな漁師村である。漁師たちは村の入口に群れて、袖引きあって相談していたが、やがて手に手に銛（もり）や櫂（かい）などの得物を持って、おそるおそる村のなかへ入っていった。
酸鼻を極める光景だった。
老人も子どもも男も女も区別なく、皆殺しになっていた。
痩せた皺だらけの顔の老人が、背中を粗末なシャツごと袈裟がけに斬られて、白目を剝いたまま息絶えていた。
金色の髪を長く伸ばした若い娘が、腹をさばかれ、内臓をあたりに撒き散らしながら死んでいた。
よちよち歩きの年齢の子どもが、無残にも頭蓋を割られて転がっていた。
村の背後の森の方に向かって、死体は点々と横たわっていて、何が起こったのかはわからないが、その事件に驚いて逃げだした村人たちが、追われて殺されたものと見えた。
死体の傷はみな、鋭く大きな刃物で、斬り裂かれるか、貫かれるかしたものだった。
及び腰に村のなかを一巡りした近在の漁師たちの一団は、ふたたび村の入口に寄り集まって、いったい何が起こったのか、どう対処すればよいのかと話しはじめた。
「実は――」
と言いだすものがあった。
「今朝方、気味の悪いものを見た」
そのものは、暗いうちに起きだして、浜に出たのだという。
入り江に黒い大きな影が浮かんでいた。
船だった。
舷側は腐って穴があき、朽ちて折れかかったマス

トからぼろぼろの帆が垂れていた。
とても航海できそうに見えなかったが、船はその状態で平然と波の上を進み、入り江の外、北海へと出ていった。
まるで空中を漂っているかのような走りぶりだったという。
「寝ぼけて幻を見たのかと思ったが、あの船が何者かをこの浜に降ろして去っていったのではないか。思い返してみると、船が入り江にいたあいだ、空気が妙に冷えて、腐ったような臭いが風に混じっていた」
「幽霊船か」
ほかのものが応じた。
「すると、その船が降ろした何者かが、村人を皆殺しにしたのか」
「何者なのだ。この人間離れのした残虐さは」
漁師たちは口々に言いあった。
やがて、ひとりが、みなの顔を見まわしながら言った。
「ソウルエッジの伝説を知っているか」
その名を聞いて、みな一瞬黙りこんだ。
「知っているさ」
だれかが言い、それを皮切りに、口々に聞き知った伝説の断片を口にしはじめた。
「人の生き血を吸う剣だろう」
「手にしたものは、剣の怨念に支配され、殺人鬼と化すと聞いた」
「この国の深い森の奥で、一夜にして村人全員が血まみれの死体となっているのが見つかることが、昔からときたまある。それはその邪剣に憑かれた人間の仕業だという」
今朝のこの村の惨殺事件もあるいは――と、漁師たちの話はそこへ収束していくようだった。
話に夢中になっている漁師たちの背後に、いつのまにか近づいてきた異装の男があった。

男は悽惨な村のようすを見つめ、それから漁師たちの話に耳を澄ました。
「ああ、びっくりした。だれだ、あんた。旅の人か」
漁師のひとりが気づいて振り返った。
男は逞しい裸の上半身に袖なしの奇妙なシャツを着て、長く黒い髪を頭のてっぺんで無造作に束ね、腰に優雅な反りのある刀を落としこんでいた。
漁師たちの顔を見まわして、にっと笑った。ひとなつこい笑顔だった。
ただ、言葉は発しなかった。
「なんだ、言葉がしゃべれないのか」
漁師のひとりが訊いた。男は反応を示さなかった。
漁師たちが困惑していると、男は掌を広げて上に煽るような仕草をした。
話を続けろと言っているようにも見えたが、よくわからず、漁師たちはいよいよ困惑して、目を見交わすばかりだった。
すると、男が初めて声を出した。
「ソウルエッジ？」
男は言った。たしかにそのように聞こえた。
「そうだ。ソウルエッジの話をしていたのだ」
漁師のひとりが男の言わんとするところの見当をつけて、そう答えた。
男はうなずいた。ソウルエッジという言葉だけは、聞きとれるようだった。
どうやら、漁師たちの話のなかにその言葉を聞きつけて、近寄ってきて聞き耳を立てていたものらしい。
やにわに男は累々と死体の横たわる村の方へ駆けていった。漁師たちを振り返って両手を広げ、その惨殺事件全体を示して問うた。
「ソウルエッジ？」
漁師たち全員がうなずいた。
男はもどってきながら、腰の刀を抜いた。
わっと漁師たちが身を引いたが、男に害意のないのはすぐにわかった。

男は反りのついた大刀を両手で握って振りかざし、びゅっ、びゅっと空に斬りこんで見せ、続いてその刀で斬られた人間がもがき苦しむ様を、顔を歪めて演じて見せた。
それから、惨殺の村と大刀とを交互に指差して、訊いた。
「ソウルエッジ？」
また漁師たち全員がうなずいた。
男は満足の笑みを浮かべ、深くうなずいた。
村の惨殺事件がソウルエッジと関係のあることが知れれば、それで十分なようだった。
「ありがとう（ダンケシェーン）。さよなら（アウフビーダーゼン）」
それだけは聞き覚えたのか、漁師たちにもわかる言葉で、ただし怪しげな発音でそう言うと、男は横たわる死体の列をたどって、森のなかへと姿を消した。

森の奥へ奥へと大股で歩きながら、男はひとり大声で、自由に使える自国の言葉をしゃべっていた。
「ついに巡り会ったぜ、ソウルエッジ。どれだけ長い旅をしてきたことか。おまえだろう、セルバンテス、この道の果てにいるのは。とっつかまえてやるから、首を洗って待っていやがれ」
男は御剣平四郎であった。

2

弔鐘が町に響き渡っていた。
小さな教会のまわりは、会葬者や通りがかりの見物人でごったがえしていた。
ソフィーティアは、教会の前で思わず足を止めた。葬式は奇妙なものに見えた。
会葬者のほとんどが礼拝堂に入れずにいるのだ。
礼拝堂は小さなものだったが、そのせいではなかった。ちょっと覗きこんだだけですぐにわかった



が、なかが棺でいっぱいになっているのだ。
白木の簡素な棺のうちのいくつかは、表の通りまであふれだしてきていた。
その棺のうちのひとつを会葬者の幾人かが持ちあげて、それを先頭に葬列が道を進みはじめた。
教会の司祭が聖書を片手に表へ出てきた。道に立って、墓地へ進む葬列をしばらく見送っていた。
異国の地にあって、この司祭ならあるいは多少話を通じさせることができるかもしれないと思い、幼いころ教会で学んだことのあるいくつかのラテン語の単語を頭の奥から引っぱりだした。
「ホミネム・モルトゥウム・ムルトゥス」
司祭は驚いた表情で、目の前にいる美しいギリシャの娘の顔を見つめた。
「そうです。とてもたくさんの死者が出たのです」
司祭はいきなりギリシア語で答えた。
こんどはソフィーティアが目を見開いた。司祭はにっこり笑った。
「地中海の方の人だとは思ったが、ローマの人には見えない。わたしはローマに行ったことがありましてね」
「グレークス・スム。いましがた船で港に着いたところなんです」
「ええ、そうだと思いました。ギリシアの人だとね。どうですか、わたしのギリシア語は。学んだのはだいぶ昔のことで、錆びついていると思いますが」
ラテン語とギリシア語を折り混ぜて、ソフィーティアはこの奇妙な葬式のことを司祭に聞いた。
「近くの漁村で、それはひどい惨殺事件があったのです」
司祭は言った。村の人間が皆殺しになったという。
「棺の数の割りに会葬者の数が少ないでしょう。親兄弟も親戚も村にいたものはみな殺されてしまったせいなんです。棺の運び手が足りなくて、これではいつになったら埋葬がすむのか、見当もつきません」

「だれかに殺されたんですか。事故や災害じゃなくて？」
「殺されたんです。むごいことです」
「いったい、だれに」
「それはわかりません。死者はみな、剣によるものと思われるひどい傷を負っていました。何者かによって、斬り殺されたのです」
「剣……」
「村人のなかには、ソウルエッジの仕業だというものもいます」
「ソウルエッジ！」
思わず、ソフィーティアは声をあげた。
「おや、どうかしましたか」
「ひとの運命について、ちょっと考えることがあったのです。その村へはどう行けばいいのです」
「村へ行きたいのですか。海沿いに行けばすぐにわかりますよ。ちいさな漁村です」
話しているうちに、道の彼方で葬列が墓地へと曲がり、見えなくなっていた。
司祭はその方を眺めやって言った。
「さて、そろそろわたしは棺を追いかけねばなりません。仕事ですのでね。いや、こんなに忙しい日は近来稀なことです。あと何度聖書を読まねばならないことやら。これで失礼しますが、もし宿をお探しなら、教会へお泊まりになったらいいですよ。この町には宿屋はありませんからね。もっとも、今夜はたぶん棺がいくつも残っているでしょうけれども」
ソフィーティアは礼を述べ、たぶんそうさせてもらうと答えた。
「それから、すこしこの国の言葉を覚えたいのですけれど」
「いいですとも。しばらく教会にお泊まりなりなさい。教えてさしあげますよ」
司祭は言って、墓地の方へと急ぎ足で去っていった。

村は静まりかえっていた。
胸騒ぎを覚えながら、ソフィーティアは村のなかへと入っていった。
草葺きの屋根からこぼれた枯れ草が、潮風に吹かれて家々のあいだを舞っていた。
子猫が一匹、その枯れ草にじゃれて、跳ねるように走りまわっていた。
その無邪気なようすは、この村のもとの平和な暮らしを想像させたが、子猫がすこし走れば、たちまちそのちいさな足が、地面に黒く染みた血の跡に触れた。
村のそこここに残る血の跡のひとつのそばに、ソフィーティアはしゃがみこんだ。
胸騒ぎがひどくなった。
かすかな腐臭を嗅いだような気がした。
不気味な気配が空気のなかに残っていた。
探しているものに、近づきつつあることをソフィーティアは悟った。

長い旅だった。
カシントスを出てから、アテネ、ローマを経て、イベリア半島をまわり、北海に面したこのドイツの港へと、船を乗り継いできた。
どんな船に便乗させてもらえるか、どんな人と出会って助けを得られるか、すべては成り行き任せの旅だった。
それが、気がついてみれば、この村へとたどりついていた。
いくつもの偶然の積み重ねの結果だったが、ただの偶然とはソフィーティアは感じていなかった。
アテーナーの導きでないはずがなかった。
それでなければ、この惨殺事件の直後、その葬列に行きあうような日時に、どうしてちょうどここへ至ることができたろうか。
もしローマであの船をつかまえそこねれば、旅は幾日も延びて、葬列に出会うことはできなかった。
もしアテネであの親切な宿屋の主人と出会わなければ

ば、やはり旅は延びていただろう。

それらは神々の導き以外のなにものでもなかった。

である以上は、この村で起こった惨殺事件は、ソウルエッジによるものに間違いないはずだった。

何者かが、ソウルエッジを携え、ソウルエッジに操られたこの虐殺を行なったのだ。

血のあとをたどって、ソフィーティアは森の入口に立った。

その何者かが、邪剣をかざし、逃げまどう村人たちを斬り殺しつつ、この森の入口に至り、森の奥へと走りこんでいくさまが、ありありと目に浮かぶようだった。

生い茂った葉に覆われて森の奥は暗く、果ては見えなかった。樹間の道は、地の底へと続く洞窟のように見えた。

ソフィーティアは、子猫が飽きもせずに遊び続ける村を抜け、海辺へ出た。

波の静かな入り江に、北の海のやわらかな日の光が満ちていた。故郷の海の光とはずいぶん印象が違っていた。

ソフィーティアは目を細めてそのたゆたう光を眺め、神々に感謝を捧げ、魚を求めて群れ飛ぶ白い海鳥に向かって、黒々とした森の彼方に待ち受けるものとの対決を誓った。

それから、港町の教会へともどっていった。

3

そこは城壁に囲まれた大きな町だった。

教会のある広場から四方へ続く道には、石畳が敷かれ、石造りの家々が軒を並べていた。

その石畳の広い通りをたどって、ジークは町のはずれの方へ歩いていった。

狭い路地裏に入ると、空気が変わった。

家々が重なりあうように密集して、一年中路上に

日が差さないために、空気がよどんでじめじめしていた。窓の小さな家々の石壁や敷石のそこここには苔（こけ）がむしていた。道沿いの家の住人が平気で窓から汚物をばら撒くので、その臭気が敷石に染みついていた。

袋小路になった一本の路地の入口で、ジークは足を止めた。

路地の奥を覗きこんでいると、一軒の家の黒茶色に古びた木の扉が薄く開いて、灰色の僧服を着た男が出てきた。

男は頭布を深くかぶって顔を隠し、背を丸めるようにしてこそこそと、路地の出口の方へ歩いてきた。

口と鼻を隠した頭布のなかから、目だけ光らせてジークを一瞥（いちべつ）すると、そのまま急ぎ足で町のなかへと消えていった。

ジークはしばらくそのままそこにたたずみ、ころあいを見て、僧服の男が出てきた家へと近づいた。

扉を開くと、なかは暗かった。

濃密な香水の匂いがした。

獣の尿を思わせる男の体臭、熟しすぎた果実のような女の体臭、羊の脂の蠟燭を燃やす匂いなどと、香水の甘ったるい匂いが入り混じって、ジークの鼻腔を一挙に満たした。

猥雑でおぞましい匂いだった。けれども、懐かしい温かさもあった。

狭苦しい部屋のまんなかに置かれた、蠟燭のすすに汚れたテーブルに、中年の女がすわっていた。

「ジーク……？」女が眉をあげた。「あんたなの……？」

ジークは黙ったまま、女の向かいに腰を下ろした。

女は立っていき、台所に置かれた甕（かめ）の蓋をとって、柄杓（ひしゃく）を突っ込んだ。もどってくると、陶器の器をジークの前に置いた。

金茶色の髪を、女は結いも束ねもせず、かぶりものもかぶらず、自然のウェーブのままに背中へ長く

垂らしていた。その髪に乱れがあった。女はそれを気にして、手で何度も掻きあげた。
掻きあげるたびに、結び紐がほどけてしどけなく垂れたシャツの襟元から、白い胸のふくらみが覗いた。肌はうっすらと汗ばんでいた。
ジークは器に目を落とした。ぬるく、発泡していないビールを一口飲んだ。
顎を引いて、胸もとの紐を結びながら、女が言った。
「この町で、教会の戒律を破るのがいちばん得意なのは、教会の連中なんだよ。金も持っているしね」
女が落ちつかなげにジークの視線を避けて目を泳がすのを、ジークは悲しいものに見た。昔のように、腹が立ったり、苛立ったりすることはなかった。
ジークは皮の小物入れをテーブルに置いた。
厚い壁に穿(うが)たれた、四角い小さな窓は、光の泉のようだった。
そこから暗い部屋のなかに差しこむ光が、ぬるま湯のようにあわくやわらかく狭い空間に拡散していた。
「愛していたんだよ、まだ」
ジークが言った。
マーガレットは、それがもう何度目になるのか、赤いハンカチーフを広げて、小さな窓からの光のなかにかざした。
「そうじゃないかと、ときどきは思っていたよ」
マーガレットが言った。
「おれは思わなかった。だって、あなたは恨みごとしか言わなかったもの」
「恨んでいたんだよ」
「だから、おれも恨んだ。幼いころに、あなたから聞いた話がいっぱい頭に残っていたからね。まさか、父上がこのハンカチーフを身につけているとは思わなかった」
「ずっと持っていたんだね」
「たいせつに、いつでもすぐ取りだせる剣帯につ

けて」
「昔は、騎士が、愛情のしるしに、想い姫から賜（たまわ）ったハンカチーフを兜に入れておく習慣があったと聞いて、真似したんだよ。夜、蠟燭の明かりでMの縫い取りをしたのを、よく覚えている」
「まだ、ふたりが愛しあっていたころ？」
マーガレットはそれには答えず、ていねいに、いとおしむように、ハンカチーフをたたみなおした。
「ジャガイモでも茹（ゆ）でようか。おまえ、きょうはゆっくりしていけるんだろう？」
マーガレットが言った。

合戦は明日と思われていた。血で血を洗う激しい戦いになることが想像されていた。一帯の住人たちも、集結した兵士たちも、刻一刻と緊張の高まりゆくのを感じていた。
夜、まだ若い騎士だったフレデリックがマーガレットを訪れた。
「あのひとの長い指が、ほんのすこしだけれど震えていたのを覚えているわ」
マーガレットは遠い目になって言った。
フレデリックは叙任式を終えてまだ間がなく、騎士としてほとんど初陣といってよかった。高揚と不安の入り交じるなかで、槍を取らねばならなかった。
騎士団がその地に集結してから、戦いの期が熟すまで、一月ばかりの時間があった。野営地で暮らす多くの騎士たちのなかから、マーガレットがフレデリックのことをいつでも見分けられるようになるには、十分な時間だった。
マーガレットは、フレデリックの高揚と不安をすべて受けいれた。あなたはすでに一人前に槍を使いこなせるはずと、勇気づけた。
「月の明かりのなかを、野営地の近くまで送っていったわ。かならず生きて帰ってくるとあのひとは言ったっけ。そのときにはもう、指も震えていなかった」

合戦の喧噪(けんそう)は、終日、丘を越えて村まで聞こえてきた。指揮官の号令、銃声、馬の蹄の音、剣や槍を交える音、突撃の声、勝鬨(かちどき)……。

鉄砲も大砲も、まだ戦いの中心ではない時代だった。戦いにはルールがあり、むやみに多くの死者がでるわけではなかった。それでもマーガレットは、一日中、家を出たり入ったりして、水仕事も針仕事もまるで手につかなかった。

夕刻、騎士団の勝利で合戦の終わったことが伝えられた。騎士団はただちに追撃戦に移る模様だった。敵の逃げこんだ城を攻め、さらにはその城を支援する強大な領主とも相対さなければならないらしかった。

戦争全体の様相は、ただ噂で知るしかなかった。領主たちの合従連衡、教会の策謀、神聖ローマ皇帝やローマ教皇の態度、蜂起した農民たちの動向など、マーガレットにはややこしすぎて全貌が見えなかった。

フレデリックがどうしているか、知るすべはなかった。ただときどき、フレデリックの属する騎士団がどこそこで活躍したなどと聞くばかりだった。そのような風の便りも、しかししだいに遠くなっていった。

やがてマーガレットは、体内に新しい生命の宿っていることに気づいた。

「ずいぶん元気に腹を蹴る子だったよ」

母に言われて、ジークはかすかに照れた笑いを浮かべ、茹でたジャガイモをつついた。

月が満ちて、マーガレットはひとりで赤ん坊を産んだ。

「それがおれというわけだ」

ジークは言った。

「いや、まだ、あんたじゃない。名前がなかった」

名は父親につけてもらいたいと思っていた。ある日、井戸端で赤ん坊に乳を与えていると、髪も髭もぼうぼうに伸びた、戦い疲れた騎士が近づいてき

た。すぐにはフレデリックとわからないほどだった。

マーガレットは声も出せずにただ立ちあがって、赤ん坊の父親を見つめた。乳首を見失った赤ん坊が火のついたように泣きわめいた。

フレデリックはすでに風の便りで自分に子どものできたことを知っていた。

「ジークフリート・シュタウフェン」

赤ん坊は命名された。

ジークのもっとも古い記憶は、木漏れ日の落ちる森のなかで、父が木を削っておもちゃの剣を作ってくれている場面だった。父の顔や手に、光の斑が揺れ動いていた。

剣のおもちゃが与えられたのは、騎士の子として生まれたこの男の子は、いずれ騎士になるときが来るとの父の配慮だった。ジークは幼心にもそのことをはっきりと感じとっていた。

騎士たるものの守るべき徳目、忠誠や愛や弱者の保護について、父はよくジークに語って聞かせた。語る本人がそれらの徳目を信じ、みずからのものとしていたから、その言葉はジークの心に深く刻みこまれた。

もっとも、それらの教訓じみた話よりも、いっそうジークをおもしろがらせたのは、自分と同じ名を持つ英雄の冒険物語だった。父はその物語に、騎士に必要な英雄精神についての教訓を見出していたから、ジークにせがまれればよろこんで語って聞かせた。

英雄がドラゴンの血を浴びて不死身となる挿話が、ジークはことのほか好きだった。菩提樹の葉が舞い降りて背に張りつき、そこだけが血を浴びずに英雄の弱点となってしまうのを、いつもひどく残念に思った。英雄の体に葉の形に残った常人の肌を思い浮かべて、苛立たしくも不安でやりきれない気持ちになった。

やがて、ただおもちゃを振り回して遊ぶだけでな

く、木製の剣と盾で剣術のいろはを習うようになった。馬術や槍の扱いも教わった。

父はジークのために、木材を組んで、馬上槍術のための的を作った。柱のてっぺんで水平に自由に回転する木の腕の、一方に盾が張りつけられ、他方には藁束がぶら下げられていた。

馬で接近して盾を突き、その衝撃で回転してくる藁束に当たらないよう身をかわさなければならない仕掛けだった。

ジークは何度も藁束の一撃をくらって、馬から落ちた。落ちれば父に叱られたが、叱られるのも楽しい遊びのうちだった。

「まだ、五つか六つかだったろう。落ちるたびに、こっちははらはらしどうしだったんだよ」

マーガレットは思いだして、愉快そうに笑った。

あるとき、父はジークに、騎士叙任式の剣の儀式の真似ごとをして見せた。ジークを跪かせ、肩に剣を置き、忠誠の誓いを述べさせようとしたのだ。

が、途中で、父は急にその遊びを中断した。やってはいけないことだった、とあとで父はジークに謝った。たとえ遊びでも、いいかげんな真似ごとは許されない、神聖な儀式なのだと、父は説明した。

「おまえも、やがて実際の叙任式に臨めば、わかるだろう」

自分の軽はずみを悔いる父の真剣なようすから、騎士になるとはそれほどに重いことなのかと、ジークは身震いするような気持ちを覚えた。

それからほどなく、父はジークの奉公先を決めてきた。りっぱな騎士になるには、親元を離れて、一定期間、騎士見習いとして領主の城で過ごし、下働きをしながら、馬術や剣術の腕を磨かなければならないのだった。

半年後に土地の領主の城へ連れていくと告げられ、ジークの胸はときめいた。いよいよ本格的に騎士への道を歩みはじめるのだ。

が、それは現実のものにならなかった。フレデ

リックが出征したのである。

4

マーガレットは食事の皿を台所へかたづけ、腰を据えてビールを飲みはじめた。ジークもぬるいビールを飲みつづけた。

「そうだねえ、あれがすべてのはじまりだったね。あれから、すべては悪い方へ転がりはじめたんだ」

マーガレットは言った。

騎士と彼が仕える領主の関係は、主従関係というよりはむしろ契約関係だった。一年のうちの何か月かを、領主のために働いて過ごせば、それで責務は果たされているはずだった。そのときフレデリックが戦いに駆りだされたのは、その負っている責務を越えたことだった。理不尽な徴用のように見えた。

「とはいえ断ることはできぬ。断れば、ことが荒立つ。忠誠の誓いに反することにもなるかもしれない」

温厚なフレデリックはそう言って、出かけていった。戦乱の時代にはしかたのないことか、とマーガレットも思った。

「二度と会えないという予感があったのかもしれないねえ。強大な力で体を引き裂かれるような悲しみを感じながら、ハンカチーフに縫い取りをしたのを覚えているよ」

マーガレットは言った。

フレデリックの出征後、領地替えがあった。それまでの領主が急に辺境の地へと追いやられ、代わって新しい領主がやってきた。皇帝の意向なのか、貴族同士の確執かなにかのせいなのか、マーガレットには背後の事情はよくわからなかった。

ジークが領主のもとへ小姓として伺候する話は沙汰やみになった。フレデリックの身分も宙に浮いたようになってしまった。

フレデリックからは音沙汰がなかった。戦地を転々としているらしいが、それがいつまで続くのか、だれのために戦っているのか、つまびらかでなかった。

マーガレットの暮らしは、しばらくは以前通りだったが、やがてそれは、領地替えにともなう事務手続きが遅れていたせいにすぎないことがわかった。領主からの俸禄が打ち切られてしまったのである。

蓄えで暮らしを維持したが、いずれ行き詰まるのは目に見えていた。暮らしがきつくなるにつれ、マーガレットのなかにフレデリックを恨む気持ちが芽生えてきた。

「あのひとは律儀すぎるんじゃないかって、よく考えたもんさ。騎士の義務なんかいいかげんにおっぽりだして、帰ってくればいいのにと思った。それができない、あのひとの性格が憎かった」

疑いの気持ちも首をもたげた。遠征先で別の女でもできたのではないか。そのせいでちっとも帰ってこないのではないか。その手の話は、騎士の妻たちのあいだで、よく噂にのぼっていた。

マーガレット自身がフレデリックと結ばれたときと同じことが、遠征先の土地の娘と繰り返されているのではないか。そのさまが、目に浮かぶようだった。

ある日、領主が鷹狩りに来るとの話が持たらされた。土地のまとめ役がうろたえて、マーガレットにその接待係を頼みにきた。作法などを知るものがほかにないというのだ。

マーガレットは野に出て、領主のために昼食の準備をした。早朝から鷹を飛ばして、栗鼠や地鼠や小鳥などたくさんの獲物を得た領主は、機嫌よくマーガレットのもてなしを受けた。

機会を盗んで、マーガレットはみずからの窮状を領主に直訴した。領主は深い同情を示し、フレデリックのことを調べさせると約束した。

半月ほどして、領主の使いがやってきた。鷹狩りの折の礼をしたいので、城で開かれる宴に来てほしいとの招待だった。

母がいつになく着飾って、いそいそと出かけていったのを、ジークは覚えている。

城から帰った母は、落ちつかなげで、ジークのことを避けているように見えた。

その後、母はしばしば城へ呼ばれるようになった。ときには幾日も帰ってこないこともあった。

家の暮らしぶりは、俄然よいものになった。母は新しい衣裳や宝飾品を買い、新しい屋敷に引っ越し、使用人を雇うまでになった。

城からの使者はいつも同じ人間だったから、ジークも顔を覚えた。あるとき、使者はジークに言った。

「おまえの母親は幸運に恵まれたんだよ。ただ、幸運というのは、たいてい長続きしないものだがね」

ジークは、そうはしなかったけれども、なぜかその使者を殴り倒したい思いにかられた。

母が不在がちのせいで、ジークは土地の悪童たちと長い時間を過ごすようになった。

あたりで不良と目されているグループに混じって、畑を荒したり、禁じられた蜂蜜採りをしたり、野兎や鼬(いたち)の密猟をしたりするのが楽しかった。ときに、隣村の悪童連と派手な喧嘩をしたりもした。

「おまえの母親は領主の慰みものになっているらしいな」

仲間のひとりから言われたとき、その意味がすぐにはわからなかった。いちばん年下の方だったジークは、仲間のだれそれにその言葉の意味を聞いてまわった。意味をはっきりとわかるまでにはジークは成長していなかったが、母が父を裏切ったらしいことだけは理解できた。

最初にそのことを言った仲間を、ジークは殴りにいった。激情にかられて、とめどなくジークは相手を殴り、仲間が止めに入らなければ殺してしまうと

ころだった。

そのころからであった、年齢の低さにもかかわらず、ジークが仲間から一目置かれるようになったのは。

「あいつはやばい」

と噂が立った。

うっかりしたことを言うと、栗のように爆ぜる。手負いの猪のように危険だ。とりわけ両親のことは言わない方がいいと、仲間たちは言いあった。

収穫祝いで村のものたちが集まり、娘たちが樽へ入って葡萄を踏みつぶしているその樽のなかへ、村中から集めてきた汚物をぶちまけてみたり、城へ忍びこんで、皮を剝いだ豚を一頭まるごと宴の席へ投げこんでみたり、領地の巡回視察に出た領主の行列に、蜂の巣をぶつけて馬を暴走させてみたり、やることのたがいちいちはずれていた。

悪童連の年かさのもののなかには、森に住んで盗賊働きをなりわいとするような大人たちとつきあいのあるものがいた。そんなつながりを介して、ジークは森の盗賊たちを知り、

「見込みのあるガキだぜ」

などと言われて、いきがるようになっていった。

「ひどい母親だね」

もう何杯目になるのかもわからなくなったビールを呷って、マーガレットが言った。

「息子もひどいもんだ」

ジークもビールを呷った。

そんなふうに親子でゆっくり話すのは、はじめてのことといってよかった。

「あの領主には、結局、捨てられたってことだったの？」

それまでに訊いたことのなかった質問を、ジークはした。

「飽きられたんだね」マーガレットは言った。「男はすぐに女に飽きるもんさ」

「ひどい男だ」
「ひどいのは、最初からだったんだ。あの男の正体を見抜けなかったわたしがばかだったのさ」
「領主の正体？」
「あの男は、夫が長く不在で、女手ひとつで子どもを育てているわたしに、同情するふりをして言い寄ってきた。先行きの心細さを感じていたわたしは、ころりとだまされた。だけど、その実、夫の不在を長引かせたのは、あの男自身だったんだ」
「領主が父上を遠征先から帰らせないようにしたのか」
「あの男がわたしを見そめたのは、新しい領地にきてすぐのことだったらしい。すぐにわたしのことを調べさせた。そうして、策を弄してフレデリックを帰郷させないようにすると同時に、わたしに接近する機会を窺った。鷹狩りの接待にわたしが駆りだされたのも、あの男のさしがねだったんだ」
「それじゃあ、まったく最初から、あなたへの横恋慕で、そんなふうにしたということだったわけか」
「あとからそれがわかった。あの男の目の玉を刳り貫いてやりたい気持ちがしたよ。でも、どうしようもなかった。あの男がわたしに飽きた以上は、フレデリックが帰ってこられるようになるのではないかと、それだけが希望だった。しかし、そうはならなかった。おそらく、留守中のことがフレデリックに知れるのを、小心にもあの男は恐れたのだろう、フレデリックが帰ることはなかった。理不尽な転戦の日々を強いられた。わたしはひとりきりで生きていくしかなかった」
「おれは家に寄りつかなくなっていたしね」
「領主が阻んでいるのでは、フレデリックの帰還は何十年先になるか知れやしない。わたしは絶望し、あきらめ、覚悟を決めた。この世の中で、女がひとりで生きていくのは並たいていのことじゃない。でも、方法がないわけじゃない。こんどはわたしが男をたぶらかす番だった」

「領主の悪だくみの話は、はじめて聞いたな。はやく話してくれれば、父上を憎んだり、あなたを軽蔑しなくてよかったのに」
「あんたが話させてくれなかったんじゃないか。その話をしようとすると、あんたはいつだって、ぷいと家を飛びだしていった」
「やみくもに腹を立てていたからね。おれは父上があなたを裏切ったのだとばかり思っていた。あなたに苦労を強いて平気なひどい男と思っていた。騎士の徳目はどこへ行ってしまったのだと腹を立てていた。父上の話は聞きたくもなかった」
「わたしもある時期にはそう思っていたけどね」
「あなたが領主と通じてしまったことの言い訳も聞きたくなかった。大人は自分勝手で嘘ばかり言うと思っていた。だから、家に寄りつかなかった。仲間たちとばかなことをして暴れるのだけが楽しかった」
「いまの話で、すこしは気持ちが変わったかい」
マーガレットが訊いた。
ジークはテーブルのうえの皮の小物入れを手にとった。
「これがすべてを教えてくれたわけだ。父上はあなたを愛しつづけていた。幼いころにおれが感じていたとおりの父上だったんだ。なにも変わっていなかった。あなたも父上を裏切ったわけではなかった。どうしようもない成り行きでこうなっただけのことで、父上を思う気持ちに変わりはなかった」
「そう言ってくれると、なんだかすこし安心するよ。あんたにどう思われているのか、いつも気になっていたんだ」
「父上は、長い理不尽な遠征の果てに、ようやくあなたのもとへ帰ろうとしていた。帰ってくれれば、昔のような平和な暮らしにもどれたはずだった。その願いを断ち切ったやつがいる。憎んでも憎みきれないやつらだ」
「僧侶と騎士のふたり連れの話かい」

「そう、それが父上の仇なんだ。おれはかならずそいつらを探しだして、恨みをはらす。あなたの分の恨みもだ。待っていてくれよ、母さん。父上を殺したものの首を取って、あなたの目の前に吊るして見せるから」
思いつめたようなジークの目のなかに、マーガレットは一瞬ぞっとするものを見た。息子の激しい性格の裏に、父の愛情と庇護を一身に受けて育った子どものひ弱さのあることを、母は知っていた。辛い真実には目をつぶり、泣きわめいてでも思いどおりの世界を手に入れようとする、わがままなひ弱さのあることを。

5

一羽の家鴨(アヒル)がのんきに散歩としゃれこんでいるのへ、フォルケルは持っていたパンのかけらをちぎって投げた。
家鴨はすぐにパン屑を食べ、もっともらえるだろうかという顔つきで、石に腰を下ろしたフォルケルの方へ近づいてきた。フォルケルはまたパン屑を与えた。
「自分のやったことを、きれいさっぱり忘れちまうなんてことがあるものかね」
フォルケルは家鴨に問いかけた。家鴨はちょっと首を傾げただけだった。フォルケルはまたパン屑を投げた。
どこからともなく、もう二、三羽の家鴨が現われて、近づいてきていた。その家鴨たちにも、フォルケルはパン屑をやった。
気がつくと、何十羽もの家鴨に囲まれていた。
「うわあ、まいった、おまえたちみんなにやるほどのパンは持っていないよ」
閉口して立ちあがったとき、村のなかからジークがもどってきた。

勢いこんで歩いてきたジークに驚いて、家鴨たちが騒がしく鳴きながら逃げ散った。
「名がわかったぞ」ジークは言った。「パトリシウスとハインメルだ」
「パトリシウス……。ローマ風の名だな。そいつが司祭か」
「ひどいやつだ。病人から金を巻きあげていったという話だ」
「この村でか」
「長患いのせいで若いのに手足の自由も利かなくなった男があって、そいつが巡礼の司祭が通りかかると聞いて、病を診てくれと頼みにいったらしい。すると、司祭は、おざなりなお祈りをしただけで、多額の謝礼を要求したらしい。男の唯一の楽しみの蜂蜜酒も巻きあげていった」
「病は治ったのか」
「いや、もとのままだよ。軽くもなっていない」
「ほんとうなら、ひどい話だな」
「ほんとうなら？　おれが嘘を言っているとでもいうのか」
急にジークは気色ばんだ。
「いや」
とフォルケルは、ふたたび集まってきた家鴨にパン屑を投げた。
「金の亡者の堕落した司祭なら、全財産を巻きあげたって高の知れている、こんな貧しい村の病人なんか、最初から相手にしないんじゃないかと思っただけだ」
「そいつは相手にしたんだよ。チャンスと見ればどんな痩せた豚の血だって吸うやつなんだ」
「おまえがそう言うのなら、そうなんだろう。そんなにむきにならなくたって、信じるよ」
「信じていいさ。父上を襲って死体を漁(あさ)ったあさましい男だ。それぐらいのことはするに決まっている」
「で、そのパトリシウスとハインメルは、どこへ行ったかわかったのか」

「聖地巡礼の旅に上るところだったというから、南へ向かったのだろう」
「追うのか」
「追うさ。父の仇を討つ」
ジークは村のほとりにとめておいた馬に飛び乗った。
フォルケルは残ったパン屑をすべて投げ与えながら、家鴨たちに問いかけた。
「おれはいったい、彼に真実を思いださせた方がいいのか。父を殺したのはおまえ自身だと告げた方がいいのか。それとも、そんなことをしたら、彼を傷つけ、いっそう混乱させるだけになってしまうのか。どう思う、おまえたちは？」
家鴨たちはただがあがあ鳴いて、フォルケルにもっとパン屑をとねだるばかりだった。もうパン屑のないことを、家鴨たちに納得させることは不可能だった。ひとたびパン屑を与えられれば、いくらでも欲しがってとめどがなかった。

その家鴨たちの勢いに押されて、フォルケルはついもういちど懐を探った。やはりパンはなかった。なんだか悪いことをしたような気が、フォルケルはした。
「悪いな。ないんだよ」
フォルケルは言い、それから、馬に乗って、ジークのあとを追った。

パトリシウスは恐縮の体だった。
城の主人がみずから馬に乗り、大勢の伴を引き連れて、城の外まで見送りに出たのである。
それが、自身の人徳の成せる結果とは、司祭はまったく思ってもみないようだった。
「どうか、城主様、そんなに大仰なお見送りはなさらないでください」
パトリシウスは身を縮めるようにして、何度も固辞した。
「いやいや、そうはいきません」馬を進めながら城

主は言った。「司祭様のお話を聞いて、こんなすばらしい方がこの世にいらっしゃるのかと、わたしは感動したのです。最高の礼を尽くさなければ気がすみません。それに一刻でも長く、あなたのそばにいたい気持ちなのです。あなたがお急ぎでないなら、あと何泊でもお引止めしたいところなのです。それがかなわぬのですから、せめてそこまでお見送りをさせていただきますよ」

「いや、困りましたな。こんなに大勢で」

振り返ると、何十人もの正装した城兵の列が後ろにつながっていた。

城下に一夜の宿を求めたところ、有徳の巡礼僧が通るとの話が伝わったらしく、パトリシウスは城へ呼ばれた。田舎町のこととて、そんな旅人が珍しかったのだろう。

城主に謁見し、その求めで、キリストの教えにまつわる話をパトリシウスはした。城主はいたく感動したようすで、しばらく城に滞在していくように懇願したのだった。

一月でも二月でもといった調子の城主の懇願を、どうにか三日で許してもらって、パトリシウスは旅立とうとしているところだった。

「神を信じるとは、ひとの心のありようなのだというお話には、ほんとうに感動いたしました」城主は、馬上、晴ればれとした大声で話しつづけた。

「わたしはこれまで、信仰とは教会にたくさんの寄進をすることだとばかり思っていたのです。それはもう熱心に寄進をした。偉いお坊様がそうしなさいとおっしゃったからです。しかしどうも納得がいっていなかった。金銀財宝を教会に差しあげることが神様にとってどういう意味があるのかよくわからなかった。それをあなたは、信仰とはそんなことではないとおっしゃったのです。神はひとりひとりの人間と直接つながっている、教会はその手伝いをするだけのところなのだ、と。もやもやしていたものが、ぱっと晴れたような気持ちがしました。ほんと

うにあなたはすばらしいお方だ。しかも、たいへん謙虚な心をお持ちで、自分の信仰はまだ足らないなどとおっしゃる。聖地巡礼の旅費を援助しましょうというわたしの申し出さえ断られた。なんだかわたしは申し訳ない気がしているんです。すばらしいお話を聞かせていただいて、こちらがなにもしないではね。そうだ、こういうのはどうでしょう、あなたがこの旅から無事帰られたら、あなたのためにりっぱな教会を建てるというのは。この地に寄っていただければ、かならずそうしますよ。それはもう、わたしの全財産を投げ打ってでも、どこよりも高い鐘楼と、色あざやかなステンドグラスのランセット窓のある、りっぱな教会を、あなたのために建てましょう」

「あ、いや」パトリシウスは苦笑した。「ですから、信仰のためにはそんなにりっぱな教会など必要ないのです」

「あっははは。そういうお話でしたな。これは失敬」

城主は屈託なく笑った。

城下の村のはずれまで来ると、パトリシウスは馬を止めた。

「お気持ちはありがたいが、お見送りはこのあたりまでで」

「そうですか。そう言われるのなら、見送りはここまでにして、わたしは城へもどることにしましょう」城主は言った。「しかし、この先、せめてわが領地の果てるところまで、護衛のものに送らせましょう」

「いや、それもご無用に」

「遠慮をしておられますな。あなたはそういうお方だ。しかし、旅には危険がつきもの。わが領地内で、あなたにもしものことがあったら、わたしは悔やんでも悔やみきれません。領主としての名折れでもある。近隣の領国では、乱暴な盗賊団が我がもの顔に暴れているとの噂も聞いています。現にあなたは、森で盗賊団に襲われたとおっしゃっていたではは

ありませんか。遠慮はいりませんせん、護衛を連れてお行きなさい」
「だいじょうぶです。わたしにはすでに、ハインメルという心強い護衛がいてくれますから」
「わかりました。そこまで固辞されるなら、お言葉に従いましょう。もし、あなたが盗賊のたぐいに襲われ、命を奪われるようなことがあれば、わたしは配下の全兵力を挙げて、その下手人を探しだし、報復するでしょう。わたしには、あなたはなにものにも代えがたい大切なお方なのです」
「ありがとう。心強い気がいたします。ただ、わたしが盗賊に襲われて死ぬなどと、簡単に言ってくださいますな」
「あっははは。これはまた失敬」
城主はまた声をあげて笑った。
パトリシウスは頭を下げ、馬を進めはじめた。ハインメルがあとに従った。

「おい、この川は領地境だぞ。隣の領主の土地へ入った」
グリュワルトが馬を寄せてきて言った。川原の小石を踏みつつ歩む馬の胴体が、半ばまで水に濡れて、滴がしたたたっていた。
「わかってる」
フォルケルは馬を進めながら答えた。フォルケルの馬も、いま渡ったばかりの川の水に濡れている。見た目よりも深い川だった。
「だいじょうぶか、こんなことをしていて。おれたちの根城のある土地の領主は面倒嫌いで、盗賊狩りもときどき思いだしたように、ただの恰好つけでおざなりにやるだけだ。しかし、そうじゃない領主もいる」
「なに、用事がすんだらすぐに引き返すさ」
「さあ、その用事が問題だ。ジークはなにを考えている。親の仇を討つつもりだというのは、ほんとうなのか」

フォルケルは答えをしぶった。
盗賊団〈黒い風（シュヴァルツヴィンド）〉のナンバー2の地位を分け合うグリュワルトが、今回のジークの行動に反感を抱いているのは知っていた。
パトリシウスの足跡を追って、一党が城を出たときから、ぶつぶつと文句を言いつづけていた。ボスの私怨を晴らすのにつきあうのなどばからしいと思っているのだった。
享楽的なグリュワルトにとって、盗賊団の存在価値は、楽をして金銀財宝を手に入れ、気ままに遊び暮らせることだった。それ以外の目的のために動くというだけで、不愉快な気分になるようだった。その気分は、仲間の何人かにも伝染していた。
フォルケルは苦い顔で黙っていた。
「親の仇と言うが、その親を殺したのは自分じゃないのか。そんなばかげた話に、おまえはどこまでつきあうつもりなんだ」
グリュワルトが言った。
フォルケルは前を行くジークを気にしながら答えた。
「ジークはすこし混乱しているんだと思う」
「混乱しているやつに巻きこまれて、危ない目に遭うのはごめんこうむりたいね。いいかげん、真実を見ろと、言ってやった方がいいんじゃないか。おれが言ってやろうか」
「いまはよせ。時期を見て、おれが言う」
「そんなことを言っていると、何の関係もないやつ、パトリシウスというのか、そいつをジークは殺しちまうぞ」
「それでもいい」
「いいだと」
「そう思っている。親の仇を討ったと思って一安心すれば、ジークも落ちつくかもしれない。そのとき、真実を思いださせてやればいい」
「ばかいえ。誤った相手を殺しちまったら、ジークは引き返せないところへ行ってしまうぞ」

「しかし、いまジークを止めることはできない。いままで、ジークがこうと言いだしたことを、だれかが止められたことが一度でもあったか」
「ないさ。言いだしたら、聞かないやつだ」
「いまは、ジークのやりたいようにさせてやるしかないんだよ」
「しかし、いままでとは違うぞ。今回のジークの行動で、おれたちが得をすることはなにもない。それどころか、危険にさらされるかもしれないんだ。聖職者を殺すのは罪が重いと聞くぞ。天罰もふりかかってくるかもしれん」
「信仰深いことを言うじゃないか。怖いか」
「ばかいえ、怖いわけがあるか」
「それなら、とりあえずジークにつきあえ」
「つきあって、こうして来ている。しかし、おまえはどうしてそこまでジークに同情する」
「友情だ。なぜか知らんが、放っておけないやつなんだ。おまえにはそのような情はないのか」
「ないね。おれがジークに従っているのは、愉快に暮らせるからだ。それ以上の理由はない」
「わかった。それは覚えておく。いまはとにかく、ジークにはなにも言わないでくれ。言うときがくれば、おれが言う」
　グリュワルトは不満そうに唇を歪めて、フォルケルのそばから離れていった。
　グリュワルトの馬からも、フォルケルの馬からも、なお川の水が滴(したた)っていた。先を行くジークの馬の腹からも滴り、一歩ごとに地面に跡を残していた。
　地上でその川が領地の境を成していることなど知らぬげに、頭上を渡り鳥が群れを成して横切っていた。

6

　街道の上の青く晴れた空で、二羽の鳶(とび)が輪を描い

ていた。
遥かな高みから地上を見下ろす鳶の鋭い目に、轡を並べて街道をゆったりと進む二頭の馬が、小さく見えていた。
街道は山に囲まれた盆地の、平坦に広がる緑の野のなかに、茶色い筋となってまっすぐに延びていた。
高く昇った日の光に、馬と馬上の人物の影が道に短く落ちて、馬の歩むにつれてゆらゆらと揺れていた。
風もなく、おだやかな午後だった。
馬上の二人の人物は、行き先を馬まかせにして、昼寝をしているようにさえ見えた。
鳶の影が馬の乗り手の顔をかすめると、乗り手は顔をあげて、まぶしげに空を見あげ、鳶の飛行を目で追った。
その二頭の馬の後方から、十数頭の馬に乗った集団が接近してきた。
先行する二人の旅人に気づいたようすで、集団は馬の速度を上げた。
そのまま、ぐんぐん速度を増しながら、二人に追いついた。
「何者！」
騎士姿の男が、蹄の音に馬首を巡らした。
その目に映ったのは、手に手に剣を振りかざして迫ってくる盗賊団。
騎士は同行の僧服姿の男をかばう位置に馬を進め、剣を抜き放った。
盗賊団が騎士を囲んだ。
騎士は戛々と蹄の音をたてて輪乗りしつつ、
「わたしは騎士ハインメル。パトリシウス司祭をお護りして、巡礼の旅に向かうところだ。それと知っての狼藉か」
「パトリシウス司祭の命を頂戴しにきた。邪魔だてすれば、おまえも殺す」
ジークは言い放った。

盗賊団は、ハインメルを取り囲みつつ、斬りかかった。
騎士は応戦しながら、声を上げた。
「パトリシウス様、お逃げください」
パトリシウスは逡巡した。多勢に無勢、ハインメルの命はなきも同然だった。それを見捨てて逃げだすには決断が要った。
「早く！」
重ねて叫んだとき、盗賊団のひとりの剣が、ハインメルの胸を貫いた。
血がしぶき、体が揺らいだ。が、なおハインメルは剣を掲げて粘った。
パトリシウスは蒼白な顔で手綱を引き、馬首を巡らすと、逃げはじめた。
盗賊団の一部があとを追った。
ハインメルがついにとどめを刺されて馬から落ちた。
ジークはパトリシウスを追いはじめた。
前方で、フォルケルの馬がパトリシウスの馬に追いついていた。フォルケルは前にまわりこむようにしながら、体を乗りだしてパトリシウスの馬の手綱を引き、馬を止めた。
止められて、パトリシウスは転げ落ちるように鞍から降りた。僧服の長い裾を翻しながら走りはじめた。
ジークの手下たちがそれに追いつき、馬上から飛びかかって組み倒した。
両腕を抱えられて立ちあがったパトリシウスの前で、ジークは馬を下りた。
「乱暴な方たちだ。わたしの命を取るとおっしゃいましたか。こちらは聖地巡礼の貧乏旅、金目のものなど持ってはおりませんよ」
「金が目当てではない」
「では、なぜわたしの命を狙うのです。こんなつまらない巡礼僧の命を」
「父の仇だ」

「なんですって」
「命をいただく」
ジークは剣を構えた。
「お待ちなさい。なにか誤解があるようだ。すこし話をしましょう」
「話などない」
「いや、あります」パトリシウスはフォルケルの顔をしげしげと眺めた。「そちらの方は、お見かけしたことがある。遠征帰りの騎士団が森のなかで襲われたときです。あなた方はあのときの盗賊団ですね。わたしとあなた方のあいだで誤解が生じるとすれば、あの晩でしょう。それしか考えられない。お父様の仇とはどういう意味なのです」
「うるさい坊主だな。あの遠征騎士団の団長フレデリックが、おれの父上だったのだ」
「なんと！　すると、わたしがフレデリック殿を殺(あや)めたとでも？」
「そういうことだ」
「それはまたとんでもない誤解をされたものですな。どうしてわたしがフレデリック殿を殺さなければならないのです」
「しらを切る気か、こそどろめ」
「いや、そんな気はありませんよ。わたしひとりの命ぐらい、ここでなくなってもどうということはない。無理に命乞いをしようとしているわけではない。ただ、あなたが誤った相手を殺してしまうことを心配するのです。見たところ、まだお若いようだ。少年といっていい年齢と拝察する。まだ人生の先は長い。ここでわたしを殺してしまえば、その長い人生を、罪を背負って生きていくことになる。いま構えていらっしゃるその剣を振るってしまえば、いくら後悔してももうあともどりはできないのです。血で汚れた手は、決してきれいになることはありません。イエスを裏切ったユダが決して裏切り者の汚名を返上できなかったように。あなたのために、わたしはそれを心配するのです」

司祭の表情は真摯なものだった。剣を突きつけられているにもかかわらず、落ちついたものだった。その言葉に嘘のないことは、だれにでもわかる響きを持っていた。

「おい、ジーク」

とフォルケルが言った。

「落ちついて、その司祭の話を聞いた方がよさそうだぞ。いったん剣を収めないか。おれもおまえに話したいことがある」

ジークは剣を構えたまま、ぎろりとフォルケルを睨んだ。

鳶の影がジークの顔をかすめた。

ジークは一瞬、頭上に目をやった。

それから、無言のまま、一突きにパトリシウスの胸を刺した。

パトリシウスも、その両腕を捕まえていた手下たちも、フォルケルも、声を発する隙もなかった。

午後の日は、うらうらと照りつづけていた。風はあいかわらずなかった。街道には人影がなく、静寂があたりを支配していた。

仰向けに横たわったパトリシウスの死体の上にも、日は明るく差していた。

ジークの顔は蒼白だった。その心の内側で何かが起こっていた。フォルケルはそれを感じた。何が起こっているのかはわからなかった。

ジークにとってはひとつの決着が訪れたのか、とフォルケルは想像した。父の仇を討ち果たしたことになって、もとの剛胆闊達なジークにもどるのかと期待した。ジークが過ちを犯すのを止められなかったのは悔やまれるが、もとのジークにもどるならそれでいいと思った。

フォルケルの願いは、またジークとともに愉快に盗賊働きをすることだった。ジークがもとにもどれば、グリュワルトの不平も収まるだろう。

が、ジークの表情に、決着のついた爽快さは現わ

れてこなかった。
ジーク自身、これが誤りだと、心の奥底では気づいているのだ、とフォルケルは思った。
では、いまジークは、蒼白な顔の裏側で、父親を殺したのは自分自身だったと気づこうとしているのか。
血で汚れた手を布で拭(ぬぐ)いながら、ジークは死体の傍らに腰を落として、パトリシウスの僧服を探った。頭布から裾まで、胸元の血に汚れた部分もかまわずめくり返しながら、ジークは探りつづけた。
やがて、手に着いた血をふたたび拭いながら、ジークは立ちあがった。
血は拭いても拭いても落ち切らなかった。強く擦れば擦るほど、手の甲の毛穴、指関節の皺、掌の筋、爪と皮膚との境目の奥へと、血はいっそうこびりついていった。
「これは父の仇ではない」
苛立たしく手を拭いつづけながら、ジークは言った。
「仇は別にいる。父上を殺したのはもっと強大な敵だ」
ジークの物語に決着がついていないことを、フォルケルは知った。あきれたような表情のグリュワルトの視線が痛かった。
鳶が思いのほか低く飛行してきて、ジークの顔に一瞬影を落とし、ふたたび高く舞いあがっていった。
「それに」とジークはつづけた「父上の仇なら持っているはずのものを、この男は持っていない」
フォルケルの心の目に映るジークは、底知れず深い淵のそばに立って、暗くたゆたう水底を覗きこんでいた。ジークの青い瞳には、生き生きとした表情が欠けていた。

7

山に囲まれたその小さな湖は、ラピスラズリのような鮮やかな青色の水を湛えて、鬱蒼(うっそう)とした森林の木々を湖面に映していた。

さざ波のようなかすかな波が静かに打ち寄せる岸辺に、ひとりの男が立っていた。

口髭をたくわえ、暗く凶暴な目を光らせ、二本の剣を下げた男の名はセルバンテス。

北海に面した入り江の小さな漁村の近くでエイドリアン号を下船してから、虚空を通じて伝わってくる若く孤独な魂の叫びに引き寄せられるようにして、ここドイツ内陸の深い森のなかへとやってきたところだった。

その孤独な魂の叫びが、たったいま、いっそう激しさを増したのを、彼は感じとったところだった。

口髭がぴくりと動き、口の端に皮肉で残虐で冷たい笑いが浮かんだ。

——人間の心の深奥には、どのような剛胆な人間をも恐れさせる、暗く深い淵がある。その淵へと、おまえはいま足を一歩踏み入れたところだ。

ソウルエッジに取り憑かれた男は、心の内で孤独な魂に呼びかけた。

——それこそがおれの望むところだ。ソウルエッジの望んでいることだ。さらに深く足を踏み入れろ。水に濡れながら、こちら岸へ渡ってこい。それがおまえの宿命なのだ。もう引き返せはしない。引き返そうと足掻(あが)けば、水底の泥に足を取られて、いっそう深く淵の底へと引きずりこまれるのだ。あきらめて、水の流れに身を任せることだ。そうすれば、おれが味わっているのとおなじ、限りない快楽がおまえのものになる。

海軍提督服の男は、両手に握った大小二本の剣を空中に閃(ひらめ)かせ、目の前で交差させた。

傲岸不遜なまでにまっすぐで長大な剣と、なまめかしく波打つ小ぶりな剣とが接触すると、両の剣から怪しい光が放たれ、森がざわめき、湖水が揺れた。

波立った湖面にさかしまに映ったセルバンテスの影が、一瞬、髑髏の顔を持った剣士の姿に変じた。髑髏は炎のような赤い光の暈(かさ)に包まれ、歯を剝いて笑っているように見えた。

須臾(しゅゆ)の後、髑髏は消え、湖水も森も静まり、湖面はもとのラピスラズリの色にもどった。

青い眼の少年が、大地のまんなかに立って、空を見あげていた。

どこまでも高い蒼穹(そうきゅう)の彼方から、ソフィーティアは少年を見下ろしていた。

少年は迷子になっていた。どちらへ進むべきか、わからなくなっていた。両親から禁じられていたのに、川を越えて見知らぬ土地へと迷いこんでしまったのだ。

ソフィーティアは悲しい気持ちでいっぱいになった。少年に道を教えようとしたが、声が出なかった。涙があふれてきた。

どうしてこんなに涙が出るのだろう。疑問に思ったとたん、空の高みから真っ逆様に墜落しはじめた。

自分は一羽の鳥のはずだった。ソフィーティアははばたこうとした。しかしなぜか翼は風をはらまず、むなしく空を切るばかりだった。

森の梢を体がかすめた。地面に激突すると思った。そのとき、どうやら羽が風をとらえた。地面すれすれを仰向けになってソフィーティアは飛行した。

雲の浮かぶ空が見えた。ソフィーティアは身を起こした。

箱馬車は野中の道をのんびりと進んでいた。

「目が覚めたかね、異国の娘さん」馬を操っていた農夫が声をかけた。「よく眠っていたよ。疲れているのかね。長い旅だったのかね」

「ええ、長い旅でした。この先も、まだ長い旅のようです」
「もうすぐ家へ着く。今夜は屋根の下でゆっくり眠るといい。野宿続きじゃ体に毒だよ」
「ありがとう」
「しかし、いったいどこへ行こうというのかね」
「それはわたしにもわからないのです。どこか空の上から導かれるままで」
　ソフィーティアが干し草の屑の散らばる箱馬車の荷台から頭上を見あげると、一羽の鳶が悠然と輪を描いているのが見えた。

第四章

1

アンドレ侯はもったいぶった態度で部屋に入ってきた。

床に長く垂れたマントを扱うゆったりした手つきも、灰色の頬髭に覆われた顔に浮かべた落ちついた表情も、もっともらしいものに見えた。

由緒ある家柄に生まれ、幼少のころからつねに贅沢な着物をまとい、豪華な食事をし、貴族として躾(しつけ)られてきたものだけが身につけうる、独特の雰囲気を発散していた。

「これはこれは、アンドレ様。じきじきにおなりとはおそれいります」

部屋で待たされていた男が立ちあがり、揉み手をせんばかりの腰の低さで城主を迎えた。

背が低く小ぶとりな体に、金だけはむやみにかけているが、趣味がいいとはとうてい言い難い派手な衣服をまとっていた。

これみよがしに首からかけた銀の十字架も、信仰深さよりは財力を誇示したいがためのものと見えた。

十字架を揺らせながら、デューラーと名乗るその男は、盛大なお世辞に粉飾された初対面の挨拶を長々と述べたてた。

アンドレ侯はそのうるささに顔をしかめたが、しかし見えすいた誉め言葉の数々に結局のところ悪い気はしていないようだった。

「まあ、すわられよ、デューラー殿とやら。話を聞こう」

二人は向かいあってテーブルに腰を下ろした。

部屋は天井が低く、狭く、薄暗かった。そのこと

が、これが内密の会見であることを示していた。片隅に立っている古びた甲冑に、石壁に穿たれた小さな窓から淡い光が差している。光のなかに埃が浮き沈みしている。

「ご覧に入れたかったのは、これでございます」

デューラーは筒状に巻かれた紙を広げて、アンドレ侯の方に差しだした。

そこに描かれた絵図を一目見て、アンドレ侯の瞳が瞬間的に大きく拡大したのを、デューラーは見逃さなかった。城主の喉からは、かすかな声さえ洩れた。

「フランス王国で鋳造されたもの。興味がおありかと思い、お見せしにまいったのでございますよ」

恩を着せる調子をたくみに匂わせながら、デューラーは言った。アンドレ侯の目は絵図に釘付けになったまま、離れなかった。

「聞きおよびましたところでは、こちらでは城攻めの戦が迫っているとか。城に立て籠った敵を攻めるのは、手間も暇もかかるもの。まず第一に頑丈に造られた城壁を破るのが容易ではございませんからな。人数も要る、金もかかる、怪我人も多く出る、消耗の激しいことでございます。へたをすれば領国の経綸すら危うくなりかねない。それはアンドレ様もよくご承知のところ。しかし——」

デューラーは向かいの席からアンドレ侯の隣の椅子へと体を移した。

「しかし、これがあれば」絵図を指差し、アンドレ侯に顔を寄せるようにして言った。「攻城戦は一気に容易なものになります。この絵図からだけでも、威力はご想像がおつきになりましょう。モンス・メグと名づけられております。噂によれば、これを戦場に引き出しただけで、それを見た敵方の兵卒たちが我先に城を捨てて逃げだし、楽々と勝利を収めた戦もあったとか」

「手に入るのか」

絵図を見つめたまま、アンドレ侯が言った。

魚は餌に食いついた。デューラーは内心笑みを浮かべた。高貴な家柄の出の人間は、見た目よりは扱いやすい。
「つてがございます。それでなければ、このような絵図をお目にかけにまいったりはいたしませんよ」
「三門」アンドレ侯は言った。「三門ほしい」
「なんとおっしゃいました」
「三門、調達しろと言ったのだ。できるか」
「できますとも」
「すぐにか」
「大急ぎで手配いたしましょう。ただ、これだけの代物、運搬にも手間がかかります。多少のご猶予を」
「それはいたしかたあるまい」
「それに、運搬の手間賃も含めて、代金の方が少々……」
「かまわぬ。早く届くなら、別途褒美を出してもよい」
アンドレ侯はなお、魅入られたように絵図を凝視していた。
灰色のゆたかな頬髭をしごきながら、まるで一目惚れした想い姫の肖像画でも眺めるような笑みを、唇の端ににじませはじめたアンドレ侯の横顔を眺めて、デューラーがにやりと笑った。
やがて、アンドレ侯は絵図から顔をあげ、窓を見やった。窓外には、明るく日の光を浴びる森の一部が見えていた。

2

天から舞い降りた怪蛇(リントウルム)のように長大な城壁が、山を越え谷を渡り森を横切って、うねうねとどこまでも延びていた。
城壁の石積みは真新しく、あちらの丘の頂、こちらの谷の底に、未完成の箇所が残っていた。それらの場所ではなお建築作業が続けられていた。

城壁が囲みこもうとしている、森があり村があり村人たちの耕す畑のある広大な面積の野の、その中心に小高い丘があり、丘のうえに城があった。

その城、オストラインスブルク城には、騎士ステファンをリーダーとする反乱軍が立て籠っていた。

幾年か前、このあたりの農民が、税の軽減とプロテスタント信仰の容認を求めて蜂起した。

そのとき、農民側について戦ったひとりの騎士があった。ステファンである。彼は農民たちを組織し、軍としての体裁を整えると、領主アンドレ侯の居城ヘッセンハウト城に迫った。ひとたびはこれを陥落させることにさえ成功した。

しかし、日を置かずして、神聖ローマ皇帝の援助のもと、アンドレ侯の反撃が開始された。抵抗空しく城は領主の手に返った。

ステファンは農民軍とともに落ち延び、アンドレ侯の領地のはずれにあるこの土地へと逃げ帰ってきた。

そのとき、農民たちの協力によって築かれたのが、オストラインスブルク城である。ここがステファンと反乱農民の拠点となった。

以後、アンドレ侯は幾度かこの地に遠征軍を送ったが、そのたびに付近の農民が大挙してこの城に逃げこみ、城の増改築を行ない、抵抗を続けた。

城は堅牢で、周辺の農民たちも領主に面従腹背、裏で反乱軍を支援しつづけたため、遠征軍はついに城を落とせなかった。

いま、アンドレ侯は、これが最後と思い定めた大掛かりな遠征軍を催し、オストラインスブルク城を攻めようとしていた。

何十里にも渡る包囲城壁を築き、城の兵糧を断ち、ステファンと反乱農民を追いつめようとの作戦であった。

包囲城壁を築く大土木工事が、着々と進んでいた。

その土木工事を妨害するべく、オストラインスブルク城側は何度も城から討って出たが、アンドレ侯

側の防御は分厚く、結局工事を阻止するには至らなかった。

いま、オストラインスブルク城は鳴りをひそめていた。包囲城壁の完成が近づき、籠城戦の覚悟を決め、その準備に入ったものと見えた。

垂直に聳える高い城壁に囲まれた城は、誇り高い巨人のように、毅然として自らを囲む長大な石造りの怪蛇を睥睨していた。

「これがそのモンス・メグでございます」

デューラーが絵図を開いて示すと、広間に集まった一同からどよめきが起こった。

「アンドレ侯がこれを手に入れたというのか」

ステファンが訊いた。

「いや、まだ手に入れてはおりますまい。買い付けの発注をしたらしいとの噂でございます。仲間の商人からそのように聞きました」

デューラーはとぼけて答え、一同の顔を見まわした。農民反乱軍の幹部たちの表情に、絵図を見せた効果が覿面に現われていた。

テーブルに広げられた絵図には、モンス・メグが細密な描法で描かれていた。

四つの車輪を持つ木製の台座のうえに、水平に横たえられた巨大攻城砲だった。

重厚な鋳鉄の砲身は黒く光り、大の男が容易に這いこめそうな、洞窟のような砲口を覗かせていた。並べて描かれた砲兵の背丈は、大砲の上辺より低かった。

砲兵の傍らに三つばかり転がっている砲弾は、一抱え以上の大きさで、ひとりではとうてい持ちあげられそうもなかった。

農民反乱軍の幹部たちは、押しあうようにして、その絵図を覗きこんだ。

オストラインスブルク城の広間の光景は、デューラーには奇異なものに映った。そこにいるのは、垢まみれの粗末な農民服を着た男ばかりで、これだけ

のりっぱな城の広間に集っているのがどうにも似つかわしくなかった。
広間の内装もまた質素そのもので、そこにはゴブラン織りの壁掛けもなければ、銀の食器もなかった。ステファンはそれなりに騎士らしく装っていたが、それもごく飾りけのないあっさりしたもので、その態度ももったいぶって高貴さを気取るところがなく、農民たちから城主としてよりはむしろ仲間として遇されているのがよくわかった。
デューラーは、まるで農村の寄り合いに来ているような気がした。
農民たちは、口々に絵図の感想を述べあい、対処法を話しあいはじめた。
「この化け物のような大砲は、どれほどの威力がある。そもそもこんな巨大な砲弾を打ち出せるのか」
農民たちを代表してステファンが訊いた。
「威力は大変なものと聞いております。これで攻撃を受けたある城は、一撃で城壁が崩れ去り、馬十頭が並んで通れるほどの大穴が開いたということでございます」
また農民たちからどよめきが洩れた。その声に恐怖の色が混じっていた。ステファンが不快な表情を見せた。
テーブルの周囲に群がった農民たちの背後に、じっとたたずんでようすを見ていた人物があった。デューラーはその人物を振り返った。
彼はぬっとテーブルに近寄ってきた。
目に暗い光を湛えたその男は、半月ほど前、この城を訪れた。地底の湖を撫(な)でる風のような冷え冷えとした空気を身のまわりに漂わせていた。
自分はこの城の役に立つであろう、と男は言った。その証拠の手土産もやがて届く。客として迎えてくれれば味方をする。
ステファンが会うと、男は城の守りの弱点をいくつか挙げてみせた。急所を突く的確な指摘だった。

ふらりと立ち寄った旅人が、城の外観を見まわしただけでそこまで見抜いていることに、ステファンはただならぬものを感じた。
この城の兵は、ステファンが苦心してまとめあげ、反乱軍としての恰好をつけたものの、もとはといえば農民たちの烏合の衆。ステファンとしては頼りになる参謀のほしいところだった。
男は、客人として遇され、城壁の一角の塔の一室で暮らすようになった。
男の言っていた手土産が、いまテーブルに広げられている絵図であり、敵方がそれを買い付けようとしているとの情報であった。
「いかが思われる、セルバンテス殿」
ステファンが訊いた。
答えはすでに用意されていた。
客人がテーブルの上に図面を広げた。城の平面図だった。
ステファンは一目見てその意味に気づいた。身を乗りだして、忙しく視線を図面上に走らせて、細部を子細に検討した。検討するうち、顔が興奮に上気してきた。
やがて視線を上げ、客人を見た。客人は暗い目つきのまま、かすかにうなずいた。
「さっそく改修に取りかかろう。セルバンテス殿、指揮を取っていただけるか」
農民軍の幹部たちには、まだ図面の意味も、ステファンの意図も、見当がつかなかった。ステファンを魅了して、いつのまにか参謀の位置にすわってしまった怪しげな客人に、不審の目を向けるものさえあった。

「アンドレ侯は簡単に食いついたのか」
城の中庭までデューラーを送って出ながら、セルバンテスが訊いた。
「それはもう」デューラーは小ぶとりな体を揺すって笑った。「腹を減らした鼬が鶏を見つけたように」

城の中庭に放し飼いになっている鶏が餌をついばんで歩いているのを、デューラーは目で追った。
「よくやった。おまえは役に立つな」
「旦那にはたんまり金子をいただきましたからね。その分は働きますよ」
「商売人め。金の分以上は働かんということか」
「いえいえ、そのようなことは……」
「モンス・メグは三門売れたと言ったか。それなら、じゅうぶん儲かるだろう」
「運搬賃もいただくことにしましたからな。納期が早まれば褒美をいただく約束もいたしましたよ」
「いや、運搬はのんびりやれ」
「なんとおっしゃいます」
「適当に理由をつけて、運搬を長引かせるのだ。それから、砲弾や火薬も売りしぶれ」
「しかし、それでは……」
「儲からないと言うか。その分、こちらへ売れ」
「オストラインスブルク城へ？」
「こちらではたんまり買ってやる。おれを通じて弾薬が豊富に手に入るとなれば、この城でのおれの立場も強まる」
「しかし、この城は農民たちの寄り合い世帯。いったい資金があるのやら」
「心配するな。なければおれが用立てる」
「なんと。客人のあなた様が？」
「集められる限りの武器、弾薬をこちらへ運んでこい。すべて買ってやる。アンドレ侯には申し訳程度に売るだけでいい」
デューラーは理解しがたいというように首を振った。
「わたしとしてはどちらに売ろうと儲けはおなじ。おっしゃる通りにいたしますが、しかし、いったい何をお考えです、セルバンテス様」
セルバンテスは暗い笑いを唇の端に浮かべた。
「聞きたいか？」
「えっ……？」

聞きたいかとあらためて問われると、デューラーはなぜかぞっとするものを感じた。世の中には聞かない方がいいこともある。きわどい道を何度も通ってきた商人としての、それが実感であり、人生訓でもあった。

が、セルバンテスは平然としてさらりと言ってのけた。

「人死にのたくさん出るのが、おれの望みよ」

「…………」

デューラーは唾を呑んだ。

城の出口の跳ね橋が、もう目の前に近づいていて、そこまでいけばこの暗い目の男と別れられるのが、救いのように感じられた。

「戦が大きくなって、死体の山が築かれるのが望みなのだ。ひとりの少年の魂が大きく成長するために、それが必要なのだ」

セルバンテスの声に、デューラーはこの世ならぬものの響きを感じた。

武器商人として、戦の拡大にいくらでも加担してきた。しかしそれは、たつきの道であり、一方で心を痛めつつ余儀なくやってきたことであった。いま目の前にいる男はそうではなかった。人が死ぬこと自体に歓びを見出しているロぶりなのだ。少年の魂などと、途中から話も狂気じみてきた。

デューラーは身震いした。

城の中庭では、豚や鶏が遊び、女たちが井戸で水汲みをしたり、男たちが馬の世話をしたりしていた。戦いを控えているとはいえ、平和な日常の営みがそこにあった。農民たちばかりが集い、王も貴族もいないこの城独特の、のびのびした空気があった。そののんきな暮らしのうえに、戦乱の劫火(ごうか)の降り注ぐ様を、デューラーは想像した。

跳ね橋の向こうには、森に囲まれた静かな農村風景が広がっていた。その広い野の果てに、築かれつつある長大な包囲城壁が、大気にかすんで見えていた。城壁の内側の大地がやがて血にまみれるのだ

と、デューラーは思った。

セルバンテスという男がやってきたことで、この土地は一挙に呪われた土地に変わろうとしていた。デューラーは我知らず足を早めながら、跳ね橋を渡った。

渡り終えたとたん、目の前に広がる広い野の上に、不意に雲が広がりはじめた。明るく輝いていた田畑と森が、嵐の前触れのような分厚い雲の落とす暗い影に、急速に呑みこまれていった。

デューラーは思わず足を止めた。

「もうひとつ頼みがある」

雲の動きを見やりながら、セルバンテスが言った。デューラーは無言でセルバンテスの顔を見た。

「噂を流してほしいのだ」

「どのような？」

「天下無双の剣が、ここオストラインスブルク城にある。そういう噂だ」

デューラーは片眉を上げた。セルバンテスの意図がわからなかった。

野の果ての雲から大地へ、稲妻が光った。無音の閃きだった。遠いかすかな雷鳴がオストラインスブルク城まで届くのに、長い時間がかかった。

「一雨来るぞ。早く行け」

セルバンテスが言った。

デューラーはうなずいて、いよいよ暗さを増していく野の方へ、足早に歩きはじめた。その禿げあがった額に、大粒の雨滴が落ちてきたかと思うと、野はたちまち激しい雨音に包まれた。

3

閃きが、フォルケルを打った。全身に水を浴びたような気がした。

森の彼方に城の明かりがちらつきはじめたときから、なにかがおかしいと思いつづけていた。近づく

ほどにその思いは増していった。
天守の輪郭が闇の底に見えてきて、その窓々の明かりを観察するうちに、閃きがきた。漠然と感じつづけていたいやな気持ちの原因を頓悟（とんご）した。
留守番に残してきた仲間たちの灯す松明の明かりが、広間やそのほかの窓々から洩れていた。その明かりに、ふだんとのわずかな違いがあった。
「あそこだ。広間の上の階の窓。なぜあの窓から松明の明かりが洩れている」
そこは、盗賊たちの普段使わない納戸にあたっていた。
が、ジークをはじめ一党のものたちは、フォルケルの指摘に深く注意を払おうとはしなかった。
「なに、留守のものたちのだれかが、納戸に用事ができたのだろう」
「酒でも飲んで、入ったことのない部屋を覗いてみたくなったんじゃないか」
一党は、ジークの仇探しのための、半月以上にわたる長い旅からもどったところだった。
旅は三度目になる。
一度目は、巡礼僧パトリシウスとその伴の騎士を殺した。
二度目は、ジークがどこからともなく仕込んできた噂をもとに、捜索の旅に出た。ひとりの吟遊詩人（ミンネゼンガー）がジークの剣にかけられ命を断たれた。
「違う。この者ではない」
ミンネゼンガーの死体を前に、ジークはふたたびそのように断言した。
「父を倒すほどの者、僧や詩人であるはずがなかった。おれが間違っていた。仇はかならずや騎士に違いない」
そうでなければならない、とジークは言い、三度目の捜索を開始した。
騎士は発見された。
「違う。この程度の技量の者であるはずがない」
ジークはみたび、別人を殺したことを宣言した。

一党は、その徒労に終わった旅から帰還したところであった。

だれの心もささくれだっていた。

グリュワルトの不平が、盗賊たちの間に、風邪の感染が広まるように染み渡っていた。彼らの心はジークから離れつつあった。一銭の得にもならないばかげた旅と思えば、肉体の疲労もいっそう大きく感じられた。

フォルケルだけが、ばらけつつある〈黒い風〉をまとめなおそうと、心を砕いていた。そのことの心労が、フォルケルには溜まっていた。

ジークもまた、父の仇を見出せないことに苛立ち、焦れていた。焦れた挙句、身も心も疲弊していた。

フォルケルの気づいた城の異常を、子細に見当する余裕をだれも持たなかった。早く城へ入って、成果のなかったこの旅のことを忘れてしまいたいとの気持ちが先走っていた。交わされた相談もおざなりだった。

フォルケル自身も、そのように細かなことが気になるのは疲れのせいかと思った。

一党はそのまま馬を進めた。

丘の斜面を駆け登り、城壁の破れ目を飛び越して、つぎつぎに中庭へと入っていった。

中庭の闇の奥に、圧し殺されたざわめきのあるのを、だれも気づかなかった。

一団の馬が前後しつつ、中庭の中央に達したとき、先頭の馬の乗り手が闇のなかの気配に気づき、馬を止めた。

後続の馬たちが、つんのめるようにつぎつぎに止まった。

「どうした」

グリュワルトが苛立った声をかけた。

「なにか、いる」

先頭の馬の乗り手が答えた。

瞬間、盗賊団の周囲の闇を割って、多数の馬が姿

を現わした。
囲まれていた。
中庭をぐるりと囲んで、馬に乗った兵士たちが、闇に潜んでいたのだ。
指揮官が命令を下す声、応じる部下の声、馬の蹄の音、馬具の揺れる音が、一挙に中庭を満たした。
あわてた盗賊団が剣を抜いて応戦し、火花を散らす金属音が響きはじめた。
「逃げろ!」
フォルケルが馬首を返しつつ、叫びを上げた。
ジークは馬群の中段にあって、ツヴァイハンダーを引き抜き、敵に立ち向かおうとしていた。
フォルケルの叫びは、そのジークに向けられていた。
旅の疲れの溜まったところへ不意を襲われ、盗賊団に分はなかった。人数も敵の方が多いものと思われた。闇のなかのこと、状況は把握しにくかったが、そのこと自体、待ち伏せ側の有利だった。立ち向かえる状況ではなかった。その判断がフォルケルにはあった。
ジークの意志は違った。踏みとどまって戦う構えだった。
その周囲では、盗賊団の仲間たちが、闇のなかから閃く白刃にかかって、つぎつぎに馬から落ちていた。
フォルケルはジークに馬を寄せ、再度叫びを発した。
「ジーク! 逃げろ!」
叫びつつ、ジークの前方に馬を進め、敵中に血路を切り開きはじめた。
ようやくジークも、逃走へと方針を変えた。襲いかかる敵を斬り伏せながら、フォルケルのあとに続いた。
ふたりはあいついで城壁の破れ目を越え、虐殺の場と化した中庭から脱出した。
何人かの仲間があとに続いて逃げだしてきた。そ

れを追って、敵の馬もつぎつぎと城壁から飛びだしてきた。

振り向いて状況を確かめている余裕はなかった。ジークとフォルケルは、ひたすら馬を駆り、丘を駆け下り、森の奥へと走り続けた。

4

松明の明かりが、闇の奥に、現われたかと思うと消え、消えたかと思うとまた現われた。

点滅を繰り返しながら、松明は人の背丈の倍ほどの高さを、音もなくゆっくりと水平に移動していた。

森の木々のあいだを、追っ手が進んでくるのだった。

執念深い追っ手だった。逃げても逃げても、気がつくとまた姿を現わしている。

茂みに身を潜めながら、フォルケルは戦慄を感じた。恐怖が霧雨のように全身にまといついていた。

追っ手が話していた。

「焚き火の跡が暖かかった。やつは近くにいる」

「わかっている。そこの茂みだ。汗臭いにおいがしやがる」

追っ手たちは目を見交わし、白い歯を剝いて笑いあった。松明に顔の右半分がオレンジ色に輝き、残りは翳(かげ)っていた。

「おれは知っている。これはフォルケルのにおいだ」

「たしかにフォルケルのにおいだ」

追っ手がまた言いあった。

川で汗を流すべきだったとフォルケルは思った。焚き火の跡を土で埋めてこなかったことも悔やまれた。

ふいに背後で、茂みの揺れる音がした。鞘鳴りが聞こえた。

冷たいものが首筋に当たった。

それが剣の刃であることをフォルケルは知っていた。
すっと剣が動いた。冷たい筋が肌に延びた。その筋から生温かいものが伝い落ちた。
血だった。
フォルケルは飛び起きて、首筋を手で探った。汗が浮いていた。
傍らに、ジークが眠っていた。鎧をまとったままで、手の届く位置に剣を横たえていた。ジークが身じろぎすると、手が柄に触れ、剣が音を立てた。
周囲の森をフォルケルは窺った。森は漆黒の闇に包まれ、静まり返っていた。人の気配はなかった。
夕刻につくった焚き火が、熾となってくすぶっていた。胴着の襟元を引っ張り、ふんと鼻を鳴らして内に籠ったにおいを嗅ぐと、むっとくる汗臭さがあった。
フォルケルは苦笑した。
焚き火に新しい枝をくべて、炎を燃えたたせた。ジークの寝顔は別人のように見えた。
傷つきやすい少年の顔をしていた。こどもとおとなの境目の年齢の、その幼い方の顔つきが表に現われていた。
父の死の衝撃を、フォルケルは思った。それはジークに何重もの衝撃を一挙にもたらした。
父の死自体が、大きな衝撃であったろう。すねて家を飛びだし、父への憎悪をつねに口にしていたジークだったが、肉親への思いが消えていたはずはなかった。
おなじようにして家を捨て、盗賊団に身を投じたフォルケルには、それはじゅうぶんに察しのつくところだった。
訊ねられれば父などいないと嘯(うそぶ)いたりはするが、フォルケルとて心の底には両親への思いがあった。思いが強かったからこそ、反発したとも言えた。ジークよりかなり早く、反発ばかりが先走る年ごろを抜

けだしたフォルケルは、いまや自分の内心をそのように省察する余裕ができていた。

その目から見れば、ジークの内にあったはずの父への思いは手にとるようにわかった。直接に語られることはなかったが、幼いころに父と遊んだ思い出をジークは持っていた。フォルケルは言葉の端々からそれを覗い知ることができた。

その父を、ジークは殺した。自らの手にかけた。父の死という、それだけでも辛い事実の上に、殺したのは自分だとの衝撃が重なった。

事故とはいえ、まさにジークの剣がフレデリックの胸を貫いたのだ。その肉の、骨の、内臓の感触が、ジークの手には残っていたであろう。生温かい父の血を手や腕に浴びてもいた。闇のなかで、手が赤く濡れ光っているのを、フォルケルも目にしていた。

どんな思いだったか、そればかりはフォルケルにも測りかねる。倒した敵の死体のそばで、ジークは父の紋章の入った盾を見た。それから、死体の顔を確認したのだろう。盾の紋章を見て、それから死体の顔の確認へと進むジークの心中を思うと、フォルケルは胸の裂かれる思いがした。同時に、ひとりでそれを成したジークの勇気に、身震いのする思いがした。自分ならその場から逃げだしただろう。最低でもほかのだれかを呼んできてからでなければ、とうてい死体の顔を見る勇気はなかっただろう。

死体は父だった。しかも紛れもなく自分が殺したのだ。その上に、さらに追い討ちの衝撃がきた。Mの縫い取りのあるハンカチーフである。

父の剣帯の小物入れに大事にしまわれたその赤いハンカチーフは、それが父以外のだれでもないことを確認する最終的な証拠だっただけではない。母マーガレットへの愛の証だった。

ジークのそれまでの父親像は音を立てて崩れ去った。いつもフォルケルに語っていたとおり、ジークは父を憎んでいた。母を裏切った不実な男だった。そのことで身を持ち崩した母をも、ジークは憎んで

いた。そうなってしまった原因を作ったのがほかならぬ父であった。それがそうではなかったことが判明したのである。
すべてが崩壊したと言ってよかった。あるいは、父の死以上にジークを動揺させることだったかもしれない。父を憎むことはジークの存在の根だった。母を蔑んだことも、家を捨てたことも、盗賊稼業をすることも、そのなかで人殺しをすることも、すべては父のせいだったのだ。父の裏切りは、道をはずれたジークのすべての行動の口実だった。それが消滅することは、ジークの全存在が否定されることだった。
ジークの心は赤ん坊のように泣き叫んだ。泣き叫ぶことで自己を主張した。自分にとって不快な状態を拒否しようとした。乳首を奪われた赤ん坊は、それがもどるまでひたすら泣き続けるほかはなかった。赤ん坊にとって、乳首は自分の一部だった。
自己の存在を守るためには、都合の悪い現実を否定しなければならなかった。父の死を否定しようとした。しかし目の前に父の死体が横たわっていた。
だれかほかのものの死体であってほしいと、ジークは望んだことだろう。それならば父の死自体を否定することができる。ことは簡単だった。口を拭い、知らぬ顔を決めこめばよかった。そこにいるだれも、それがジークの父であることを知らなかった。ただ見知らぬ騎士団の長を倒したのだと主張すればよかった。父はどこかにまだ生きていることにすればいい。それならば、自分を騙すのも簡単だったろう。嘘は単純なほどいい。
が、ジークにはそれはできなかった。できない事情があった。赤いハンカチーフを見てしまっていたからである。父は母を愛していた。父の名誉は回復されるべきだった。父が偉大な騎士であってほしいというのが、ジークの願望だった。子どものころの幸福な状態へともどる、それはチャンスだった。そのためには、ハンカチーフの件を母に知らせなけ

ればならなかった。知らせれば、母とジークの関係も回復されるはずだった。現にあとでジークはそうした。

そのためには、死体は父でなければならなかった。父は死に、愛の証のハンカチーフを残した。息子はそれを母に届け、父の死とその変わらぬ愛を告げる。そのような物語の完結をジークは望んだ。その物語を成立させるには、父を殺したのはだれか自分以外のものでなければならなかった。

嘘は単純なものではなくなった。父を殺したものがだれかほかにいるのだから、息子としてそれを探しだし、仇を討たねばならなくなった。

5

ジークが身じろぎした。目を閉じたまま、眉間に皺を寄せ、喉から声を洩らした。なにかが胸につかえているような苦しげな声だった。

結局のところ、自分を騙しきれてはいないのだ、とフォルケルは想像した。ジークの心の内は虚構で整理しきることができず、現実の小骨が喉の奥に刺さって残っている。夢のなかで、その小骨が大魚と化して暴れている。

剣とともにはずされたジークの剣帯に、フォルケルは手を伸ばした。そこにつけられた小物入れから、赤いハンカチーフを取りだした。広げて、Mの文字の縫い取りを眺めた。

それも一種の小骨だった。それがなければ、ジークは父の死自体を忘却して、もっと単純な物語のなかで生きられたのかもしれない。

フォルケルは、いましがた自分が組みたてたジークの物語を、もういちど点検した。一応の筋は通っているように思われた。しかし、しょせんは他人の物語だった。

ジークがジーク自身を騙すために生みだした物語

を、はたから想像してみただけのことだった。よく似てはいても、ジークの内にある物語とはまったく別の物語であるかもしれなかった。フォルケルが、フォルケル自身のために組みたてた物語にすぎなかった。

そんな物語をいくらきれいに組みたててみてもしようがなかった。組みたてることで、ジークのことを多少なりとも理解できたような気がするが、できたところで、その理解できたと思ったこと自体がフォルケルの物語だった。

むしろ、ジークに真実を思いださせることを考えるべきなのではないか。フレデリックの死以来、何度となくそう思い、しかし果たせずにきたことを、フォルケルはまた心にのぼせた。

ジークがまた身じろぎした。まぶたがふるふると震えた。

フォルケルはすばやくハンカチーフを小物入れにもどした。

ジークが目を開いた。

「起きていたのか」身を起こしながら、いぶかしげに焚き火の炎を見た。「火を熾しなおしたのか。何かあったのか」

「いや、なんでもない」

フォルケルは焚き火を枝でつついた。

「追っ手の気配は？」

「いまのところ、ない」

「眠れないのか」

「ちょっといやな夢を見た」

「夢か」ジークは目覚ましにはしばみの実を噛んだ。「おれも何か妙な夢を見ていたような気がする。うまく思いだせないが」

「ふたりとも神経が高ぶっているのだろう。しつこい追っ手だからな。もう十日以上も気の休まるときがない」

「領主の手先なのだろうか。以前はこんなに執拗におれたちを追いまわすことはなかったのに」

「やはりパトリシウスを殺したことが響いているのだろう。何度かの旅のあいだに、そんな風聞を耳にした。おれたちが殺す直前、あの司祭は土地の領主の城に招かれた。領主はいたく司祭に心酔したということだ。その司祭が自分の領地内で殺されて、領主は腹を立てた」
「追っ手はその領主の手先か」
「それもいる。それに、この土地の領主が援軍を出しているに違いない」
「くそ。厄介なことになったな。別の土地へ逃げるしかないのか」
「そうかもしれない。おれたちがこのあたりに潜伏していることがわかっているあいだは、この狩りは終わらないのだろう」
「グリュワルトやそのほかのものたちはどうしたかな」
「待ち伏せに遭ったとき、少なくとも〈黒い風〉の半数は、死んだか、怪我をしたか、捕らえられただろう。城の留守番の部隊は、もちろん全員敵の手に落ちていた」
「半数？　いや、待ち伏せから逃れられたのはもっと少なかっただろう」
「そうかもしれない。半分は逃げただろうというのは、おれの希望を言ったんだ」
「逃げたうちの、どれだけが狩りだされ、どれだけが生き残ったか……」
「生き残っているやつがいることはたしかだ。仲間のものらしい馬の蹄のあとがあった。もういちど集結できればいいのだが……」
　フォルケルはジークの肩越しに森の奥を目で探った。夢のなかで彼を脅かした松明の炎は、そこにはなかった。
　大きな闇のなかに、フォルケルとジークはいた。闇は深かった。事態は悪い方へ悪い方へと進んでいた。盗賊団はばらばらになり、追っ手に追われ、ついこのあいだまでの愉快な日々は、幻のように消え

てしまった。

すべてはジークの狂気からはじまったことだった。急坂を転げ落ちるようなこの崩壊を止めるには、父の死に関する真実をジークに思いださせるほかはないと、フォルケルはまた思った。

あるいはもう遅いのかもしれなかった。自らを騙すための物語という名の馬に乗って、ジークはすでに、狂気の領土へとその境界の川を越えてしまった。いまとなって真実を思いださせることは、未知の土地の森の奥へと、いっそう深くジークを踏みこませる結果を招くだけかもしれなかった。その先に待つ、暗く深い湖をフォルケルは思った。

どこから話すべきかと思案した。直接にフレデリックの死に言及するのは危なすぎるように思われた。

「ジーク……」

自分の声が心づもりとは異なって低くくぐもっているのに、フォルケルは自分でぎくりとした。

「責めるわけではないが――」

言いはじめながら、川を越えたジークを呼びもどす、これが最後の機会だと思った。

「パトリシウスを殺したことは誤りだったとわかっているだろう」

ジークは不審げにフォルケルを見返した。フォルケルはつづけた。

「つぎに殺したミンネゼンガーも、おまえの父の仇ではなかった。そのつぎの騎士もそうではなかった」

仇など存在しないからだ、との言葉をフォルケルは呑みこんだ。

「なぜ」フォルケルは問うた。「繰り返し誤った相手を殺す？　仇でもないやつを殺しつづける？」

「わからなかったのだ」

ジークは言った。青い瞳に、剣の切っ先の形をした赤い炎が映っていた。

「わからなかったとは、なにが」

「もっと早く気づくべきだった」ジークは自嘲の笑

いを洩らした。「おれはうかつだった。司祭もミンネゼンガーも軟弱な騎士も、父の仇であるはずがなかった。考えてもみろ、そんな連中に父を殺せるはずがないではないか。父は偉大な騎士だった。仇はそれを倒したのだ。おれごときの剣の腕で、簡単に倒せるはずがない。それでは、父はおれより弱かったことになってしまう。そんなことがあるはずがないのだ」

「奇妙な理屈に聞こえるな。それでは、おまえが倒せる相手はすべて仇ではないということになる。おまえは永遠に目的を果たせない」

「だから、おれは腕を磨かねばならないと思っている。もっと強大な剣も手に入れなければならない。父の仇たる強大な敵を倒すためにはそれが必要なのだ」

「そんな強大な敵がやがて現われると思っているのか」フォルケルは思いきって言った。「ほんとうは、ジーク、おまえは、父の仇など存在しないことを、心の底で気がついているのではないか」

「おまえこそ奇妙なことを言う。仇が存在しないとはどういうことだ。現に父は殺されたのだ。何者かが剣で父の胸を貫いたのだ」

「その何者かを、見つけることができると、ほんとうに思っているのか」

「できるさ」

「できないのではないか。できないことを、おまえは知っているのではないか」

「そんなことはない。かならず仇は見つかる」

「どこでだ。ここではないか。ここ以外のどこかで見つけようとすれば、誤った相手を殺しつづけることになるのではないか」

「フォルケル、何の心配をしている」

「正直に言おう。おまえの心の混乱を心配しているのだ」

「何を言っている。おれは混乱などしていない。たしかに誤った相手を何人か殺したかもしれない。し

かし、もうわかったのだ。父を殺したのがどんなやつか、はっきりとわかったのだ」
「いや、そのわかったと思うこと自体が誤りなのだ、ジーク。仇は見つからない。世界中探したって見つからないのだ。なぜなら、おまえの父を殺したのは、いいか、落ちついて聞け、友達だと思うからほんとうのことを言うぞ、フレデリックを殺したのは――」
「ハンカチーフを持っている男だ」
ジークが大きな声をあげて、フォルケルの言葉を遮った。
「なに?」
フォルケルは驚いて訊き返した。
「父を殺した男は」ジークは言った。「父の死体を探って、母への愛の証の赤いハンカチーフを持ち去った。Mの文字の縫い取りのあるハンカチーフだ。それを持っているのが、父の仇なのだ。パトリシウスは持っていなかった。ミンネゼンガーも騎士も持っていなかった。ハンカチーフを持っている男が仇なのだ。おれはそれを探しだせばいいのだ。仇はかならず見つかる」
「何を言っている。おまえはそのハンカチーフを持って、母に会いにいったではないか」
「それは違う。そんなことができるはずがない。おれは父が皮の小物入れにハンカチーフを入れて持っていたのを見た。それから、その場にいるのがいたたまれなくなって、父の死体のそばを離れた。すこし落ちついて死体のそばへもどってみると、賊が父の死体を漁っていた。あとで調べてみると、ハンカチーフはなくなっていた。だから、母にそれを見せにいくことなどできるはずがない。ただおれは、父がハンカチーフを携帯していたことを告げにいっただけなのだ」
「その賊というのは、パトリシウスじゃないか。追い払ったのは、ほかのだれでもない、このおれだ。そのあとで、おまえはおれにハンカチーフを見せ

たぞ」
「パトリシウスはハンカチーフを持っていなかった。おれは懐を探ってそれをたしかめた。だから、あのときの賊は、パトリシウスではない。おれがおまえにハンカチーフを見せたとすれば、賊がそれを持ち去る前だろう」
　先刻フォルケルが組み立ててみた物語の上に、あるいはその一部をいったん忘れて、ジークがさらなる物語を組み立てようとしていることを、フォルケルは知った。その新しい物語が、強固に築きあげられてしまうまえに壊さなければならないと、フォルケルは思った。城壁の石組みはまだ完全に組みあがっておらず、あるひとつの石を抜きとれば一挙に崩れ落ちさせることもできそうだった。
「では、ハンカチーフを持っている者が、フレデリックを殺した者なのだな」
　ジークの物語に乗って、フォルケルは言った。
「そうだ」
　ジークはうなずいた。
　フォルケルは、ジークの剣帯に目をやった。
「剣帯を拾えよ」
　ジークは怪訝(けげん)な顔でフォルケルの視線を追い、言われるままに剣帯に手を伸ばした。
「腰に巻けよ」
「なんだ。何をさせたい」
　ジークは立ちあがって剣帯を腰に巻いた。
「その剣帯はおまえのものだよな」
「そうだ」
「剣帯に付いている物はすべておまえの持ち物か」
「そうだ」
「小さな皮の小物入れもか」
「小物入れ？」
　ジークは顎を引いて腰の剣帯を見た。小物入れがあった。
「それを開けてみろよ」
　ぱんっと音をたてて、焚き火の薪が爆ぜた。ジー

クの瞳のなかで、炎が大きくなった。
「いやだ」
とジークが言った。
「なぜ」
「開かないんだ」
「なぜ開かない」
「知るかよ。開かないものは開かないんだよ」
「さっきは開いたぞ」
「なに？　どういう意味だ？」
「おれに開けさせてみてくれ」
フォルケルが立ちあがった。
ジークが小物入れを手で押さえながら身を引いた。フォルケルが一歩足を踏みだした。
踏みだして、足を止めた。
ジークの肩越しに森の奥へと視線を馳せ、眉を寄せて闇を凝視した。
小さく揺れるオレンジ色の炎が、闇のなかに現われ、消え、また現われた。それは、宙を漂うように右へ左へと動きながら、しだいに大きさを増していた。
見つめるうち、その炎の左右に、ひとつ、またひとつと別の炎が見えはじめた。たちまち、炎の数は十を越した。
「ジーク……。やつらだ」
フォルケルは押し殺した声で言った。振り返って、ジークも事態を確認した。
二人はそれ以上言葉を交わさなかった。即座に地を蹴って走り、馬の背に飛び乗った。手綱を取ると、追っ手が迫ってくるのと反対側の森のなかへと、必死の逃走を開始した。

6

逃走は果てしなく続いた。
追っ手は執拗かつ大規模だった。昼夜を分かた

ず、追撃が続行された。
かつてこの土地の底知れず深い森は、たとえ領主配下の兵隊たちでも、恐れて容易には踏みこまず、盗賊団にとって安息の場所となっていた。いまや、逃走を続ける二人の盗賊に、森はそのような守護を与えてはくれなかった。追っ手はどこまででも深く森に分け入ってきた。
追う方は随時交替したが、追われる方はそうはいかなかった。フォルケルは悪夢に脅かされる暇もなくなっていた。現実の方が悪夢を追いこして迫ってきた。一昼夜も二昼夜も、不眠不休で馬を走らせざるをえないこともあった。
馬が疲労して使いものにならなくなると、手近な村に押し入り、馬を盗んだ。貧しい農村では、ろくな馬が手に入らず、乗り換えるたびにますますひどい老いぼれた駄馬になっていった。
馬を盗むついでに、食糧を仕入れた。二人はしばしば、暴れて羽を撒き散らす家鴨や鶏の脚を鷲づかみにして、罵り声をあげる農夫を尻目に、老いぼれた馬の腹を蹴って村から走りでた。
が、しだいにそれもままならなくなっていった。村に手配の触れがまわり、村人たちが警戒するようになり、さらには、追っ手が二人の行動を読んで、先回りして待ちかまえていることも増えた。
ジークのやり方は、乱暴なものになっていった。追っ手が迫っているために、短時間で仕事をすませねばならず、そのためには、村人の隙を待つより、殴りつけて黙らせる方が早かった。
もっと早いのは、殺すことだった。追いつめられた苛立ちをぶつけるかのように、ジークは剣を振るった。初めから剣を抜いて村に乗りこみ、村人に出会うなり斬り捨てて、ジークは平気だった。剣を振るうと、すこし気分の晴れるふうでもあった。
鶏一羽のために、一軒の家の家族全員を殺したこともあった。しかし、そこまでして鶏を手に入れても、火を使えば昼間は煙が、夜は火が目立つ。結

局、食べることのできないままになったりした。
「この土地を出よう」
ついにジークが言ったのは、元の仲間の凄惨な末路を目の当たりにしたときだった。
それは教会の礼拝堂の高い屋根の上にあった。若い仲間がすでに死んでいるように見えるのが、わずかな救いだった。
ジークとおなじ年ごろの少年だった。盗賊団では使い走りの下っ端で、盗賊稼業に不向きな気の弱さがあった。根城で待ち伏せに遭ったときには、おそらく馬群の後方に従っていて、脱出に成功したのだろう。そのあとで追っ手に捕らえられた。
運の悪いことに、捕らえられた場所から程近い村の教会が、異端者を暴きだすための道具を所持していた。道具は利用された。盗賊仲間の動向を知るために、哀れな犠牲者は拷問にかけられた。少年は吐きだすべき情報を何一つ持っていなかったに違いない。そのまま放置されることになった。
赤錆びた鉄製の籠のなかで、少年の死体は倒れることもできずにいた。眼球がえぐりだされて暗い穴と化し、頬は食い破られて歯が覗いていた。服はぼろぼろで、腹の皮も破れていた。
一羽の烏（からす）が、籠の隙間に首を突っ込んで、少年の腹から垂れた皮を、嘴（くちばし）でしきりに引っ張っていた。少年が生きているあいだにも、烏はおなじことをしていたのだ。死ぬのに幾日かかったかと思い、フォルケルは吐きそうになった。
「賛成だ。この土地を離れよう」
フォルケルは言った。
生き残った仲間となんとか連絡をつけて、盗賊団を再結集したいというフォルケルの望みは、ついにあきらめるときがきたようだった。
それまでのあいだに、ジークはひとつの噂を聞きこんでいた。
剣の噂だった。
追っ手の触れもまだまわらない山奥のちいさな村

で、そのとき二人はつかのま羽を延ばしていた。二人をただの通りすがりの旅人と思った村人が、夕食に酒をふるまいながらその話をした。
「天下無双の剣だそうだ」
と村人は語った。
剣は人知を越えたある特別の力を秘めていて、それを持つものに力を与え、無敵の剣士にする。
「オストラインスブルク城という城に、その剣はあるそうだ」
「その城はどこにある」
ジークが訊いた。
口にふくんだ葡萄酒を呑みくだして身を乗りだしたジークの横顔に、なみなみならぬ興味の色の浮かんでいるのを、フォルケルは見た。
村人はその城のありかをたしかには知らなかった。なんでも西の方らしい、とだけ答えた。
「西へ行こう」
教会の屋根の死体を見たあとで、ジークはその方角を口にした。フォルケルはその意味をすぐに悟った。
父を殺すだけの力を有した仇を倒すために、強力な剣が要る。噂の剣に、その力を求めているのだ。
惨憺たる逃走行のあいだも、ジークは仇討ちのことを片時も忘れていなかった。そこへ飛びこんできた剣の噂だった。ジークの頭に焼きついていたのは当然だった。
「いいだろう。オストラインスブルク城とやらを探しにいこう」
フォルケルは同意した。
あの森の一夜、ジークに告げようとして告げられなかった真実を、もういちど持ちだす機会は、すでに失われていた。
闇の奥に現われた松明の群れから、辛くも逃れた翌日の夜のことだった。浅い眠りからフォルケルが目を覚ますと、ジークの姿がなかった。フォルケルは起きだして、ジークを探した。

森のほとりを流れる川の堤に、ジークは立っていた。水の流れの音に耳をすましているかのように、すこし首を傾(かし)げていた。

フォルケルが森から出て、そちらへ近づこうとしたとき、ジークが手にしたものを川へ向かって放り投げた。月明かりの下に弧を描いたものは、掌に包みこめるほどの大きさのものだった。

あっとあげそうになった声を、フォルケルは呑みこんだ。フォルケルのところからは水面は見えなかったが、投げられたものが川の流れに落ちたことはたしかだった。ジークが流れていくそれを目で追っていることが、首の動きでわかった。

力の抜けるような気が、フォルケルはした。寝場所へもどって、もとのように体を横たえた。いろいろに頭をめぐらしたが、どうにも取り返しはつかないように思われた。

ジークのもどった気配が、背後にした。いま見たことを、言おうか言うまいかとフォルケルは迷った。とうとう寝返りを打って、ジークを見た。

ジークは熾になった焚き火のまえに腰を下ろしていた。はずされたジークの剣帯に、フォルケルは目を走らせた。皮の小物入れがなくなっていた。

「どこへ行っていた、ジーク」

フォルケルは訊いた。

「なにを言っている。おれはずっとここにいたよ。夢でも見たのか」

ジークは言った。落ちつきはらった声だった。

もしかすると、ジークに真実を思いださせる機会は、あの夜、永遠に失われたのかもしれないと、フォルケルは思った。決してこの世に存在しない、赤いハンカチーフを持った仇を求めて、少年は果てしなく森を彷徨(さまよ)いつづけることを選んだのだ。

その最後の一押しを、フォルケル自身がしてしまったのかもしれなかった。迷いの森に踏みこんだ少年を見離すことはできなかった。

オストラインスブルク城へ、フォルケルはジーク

とともに旅立った。
　その道中を通じて、あの森の一夜、まだ築城中だったジークの心のなかの城壁が、みるみる堅固に、揺るぎないものになっていくのを、フォルケルは感じつづけた。

7

「くそっ。ふざけやがって。こんな仕事。冗談じゃねえ。おれのやる仕事か。輪っかを廻すなんぞ。鼠じゃねえってんだ。これでも侍だ。傭兵に雇われたって、侍は侍だ。異国にいたって、侍は侍だ。鼠じゃねえ。輪っかを廻したって、うれしかねえ。いつまで廻したって、おもしろかねえ。いつまでも、こんなこと、やってられるか。食うには困らんが、ばかばかしい」
　木製の巨大な輪のなかに入って、足を踏ん張って輪を回転させせながら、御剣平四郎がわめき散らしていた。
　輪は建築中の城塞のてっぺんにあった。城塞は野を横切って連なる長大な城壁の一角に築かれつつあった。切り石が目のくらむほど高く積みあげられている。
　数人の人足といっしょに御剣が輪を踏みつづけると、輪はロープを巻きあげ、そのロープに引かれて、地上から切り石があがってきた。
　切り石がてっぺんの高さまであがると、あたりから職人たちが走り寄って、何人がかりもで切り石を引き寄せ、城塞のてっぺんに降ろした。
　御剣はほっと一息ついて、輪のなかに腰を下ろした。足の筋肉が突っ張るようにぴくぴく震えていた。
　森と畑の入り交じる野の彼方に、オストラインスブルク城が見えている。
　御剣はそこへ行こうとして、うかつにもアンドレ

侯側の警備兵に捕らえられてしまったのだった。正体を怪しまれ、命まで危ないところだった。

必死になって、身振り手振りで、自分は体力もあり役に立つ男だと訴えたところ、どうやら傭兵の地位を与えられたのだが、その傭兵の仕事というのが、朝から晩まで築上用吊上げ機の輪を廻すことだったのだ。

早いところ逐電するに限ると思ったが、包囲軍は兵糧攻めの真っ最中、オストラインスブルク城への出入りは厳しく監視されていて、身動きがとれなくなってしまった。偉そうな職人の親方に、わからぬ言葉でがみがみ言われて、働かされ通しの毎日だった。

彼方に見えるオストラインスブルク城でも、城壁の改築が急速に進められていた。戦が始まり、攻城側が城へ攻めこむまで、御剣が向こうの城に入る機会はなさそうだった。

髭面の親方が近づいてきて、御剣の耳元でがみがみ言いはじめた。言葉はわからなくても、仕事をしろと言っているのはわかった。それ以外の用事があるはずもなかった。

人足の掛け声に合わせて、輪を踏みはじめた。

「くそっ。こんちくしょうっ。どいつもこいつも。巻き舌でしゃべりやがって。なんだか威勢よくしゃべりやがって。何を言ってやがる。どいつもこいつも。わかる言葉でしゃべりやがれ。剣のことだ。剣の噂だ。それを知りたいんだ。どいつもこいつも、噂をしやがる。こんちくしょうっ。しかしそれ以上、わからねえときやがる。唾飛ばしてべらべらしゃべりやがって。わかるのは剣の噂だってことだけ。くそっ。オストラインスブルク城。あそこにあるのか。どいつもこいつも。そう言ってるように聞こえるが」

どいつもこいつもこんちくしょうと輪を踏みつづけながら目をあげると、オストラインスブルク城の城壁に動くもののあるのが目に入った。・

人間のようだった。豆粒のように小さく見えた。赤い服を着ていた。垂直に切り立つ石積みの城壁を、猿のような身軽さでするすると登り、てっぺん近くに開いた四角い見張り窓からするりとなかに潜りこんで姿を消した。

御剣にはなじみのある服装だった。忍びの衣裳。こんな異国の地でなぜ、と不思議の思いにとらわれ、それから御剣は思いだした、秀吉の所持するソウルエッジの書を盗みに入った女忍者があると噂に聞いたことがあったことを。タキという名の忍び。

その者がこの地までソウルエッジを追ってきているにちがいない。こちらも早く行動を起こさねばと焦れる気持ちになった。オストラインスブルク城に入る方法はないかと思案をめぐらした。

気がつくと、耳元で人足たちがなにかわめいていた。職人の親方が飛んできて、手を振りまわしながら叫んでいた。御剣の足が止まっていた。

ゆっくりと輪が逆回転しはじめた。だれにも止めることができなかった。回転はどんどん速くなった。

御剣は輪のなかでうしろ向きに走りはじめた。ついに追いつかなくなって、他の人足たちといっしょに輪の外へ転げでた。

城壁の下の方から、人足たちの悲鳴と怒声が湧きあがってきた。

8

金髪碧眼の踊り娘が、臍を出した衣裳で腰をくねらせていた。ペルシアの踊り娘との触れこみだった。腕や脚のなまめかしく透ける薄物が、月下の小川の流れのように優雅に揺れていた。

「きのう、船付き場まで見にいってきた」

銀の杯を片手に、アンドレ侯が言った。その目は踊り娘に注がれていたが、表情は崩れのない高貴さを保っており、まるで無関心なようにさえ見えた。

「苦労いたしましたよ。あれを乗せても流れに沈まない船を探すだけでもたいへんでございました」

デューラーが言った。こちらは話より踊り娘の方に興味が行っていた。パン種をこねるような腰の動きを、目を輝かせて見つめていた。

「まったく途方もないものをこしらえたものだ。絵図でも驚いたが、実物を目の当たりにすると、膝が震えたぞ」

「わたくしもあらためて惚れぼれといたしました。見ているだけで、恍惚といたしますな」

「しかし、あれをどうやって陸へあげる」

「吊上げ機で吊り上げます。これがなかなか難事でして、船に積むときはロープがはずれて怪我人が出ました」

「戦場へ引きだすのもおおごとになるな」

「はい。じつのところ、それがいちばんの問題でございます。特別の部隊をおつくりにならなければなりません」

「どれほどの部隊が要る」

「まず牽引のための雄牛二十頭。運搬作業の人員百人ばかりとその指揮をする者が五、六人。そのほかに射撃を行なうための砲兵が二十人。それらの牛と人間が緊密に連携して滞(とどこお)りなく動くように訓練しなければなりませぬ」

「三門それぞれにか」

「もちろんでございますよ。それもじゅうぶんに練りあげた部隊でなければなりません。何か問題でもおありですかな」

デューラーはパンで皿の底のスープをこそげて頬ばった。目も口も、アンドレ侯のもてなしを最後の一滴まで味わいつくそうと、忙しく働きつづけていた。

「モンス・メグの買い付けについては、城内に反対の声が強かった」アンドレ侯は困惑の表情で言った。

「金がかかりすぎるというのだ。それを押しきって買った。ところが届いてみれば、そのようにも手間

のかかる代物。いっそう反発を買いそうだ」
「なに、一発撃ってみせれば、みな歓声をあげましょう」
「ならばよいのだが」
「見ただけで膝が震えたと、おっしゃったばかりではございませんか」
「残りの二門はすでに手配済みか」
「まさか、いまさら要らぬとおっしゃるのではございますまいな」
「一門だけでも手こずりそうだからな」
「どうかご勘弁を。すでに残りの二門も船積みの作業にかかろうというところでございますよ」
「ならばしかたがないか」
「そのかわり」とデューラーはアンドレ侯の言葉におっかぶせた。「牽引牛の調達をお手伝いいたしますよ。格安の手間賃でお引き受けいたします」
憮然とした表情で唇を結んだアンドレ侯に、あでやかな微笑を投げて、踊り娘が踊りおさめると、楽隊の楽の音が明るく調子を変じ、おどけた身振りで道化師が登場した。
道化師は泣き顔のように見える化粧をした顔で、アンドレ侯に微笑みかけ、赤いハンカチーフが消えたり現われたりする手品を演じはじめた。
道化師の悲しげな微笑につられて、デューラーも、半分はアンドレ侯を気の毒がっているような皮肉な笑いを、一瞬浮かべた。
厩の片隅に積まれた干し草のうえに、ソフィーティアは腰を下ろした。まだペルシア風の踊り娘の衣裳を身につけていた。
一座の座長が近づいてきて、日払いの給料を渡した。
「それから、これは、祝儀だ。同席していた商人がいたろう。あれがおまえにとよこした。デューラーというお方だそうだ。おまえの臍にご執心のようだったぞ」

ソフィーティアは、うれしくもなさそうに座長のさしだしたものを受けとった。
「大砲のお話をなさっているようだったけれど、あれは武器を扱う商人なのでしょうか」
「そうらしい。このあたりの農民のあいだで、噂になっていた。武器商人が暗躍し、戦火を拡大させようとしていると。あのデューラーという男が、その当の武器商人かもしれない」
「戦火というのは、オストラインスブルク城の?」
「そうだ。ステファンという騎士の率いる農民反乱軍にアンドレ侯が手を焼いている。もう長いこと、長大な包囲城壁で囲いこんで兵糧攻めにしているが、城側は音を上げない。どこかに抜け道があるのではないか、などとの噂もある。アンドレ侯は焦れて、巨大な攻城砲を買って攻撃に出ようとの考えのようだ」
「その大砲が届いた、きょうはお祝いというわけですね」
「そんなところだな。噂では、あのデューラーという武器商人、オストラインスブルク城側にも武器を売って儲けているという話だ。商人のやることはえげつないな。アンドレ侯に会えばアンドレ侯の味方、ステファンに会えばステファンの味方、二つの顔を平気で使い分ける」
先刻、広間で道化を演じた男が厩に入ってきた。井戸に行ってきたらしく、化粧が落ちて、素顔を見せていた。思いのほかに若いハンサムな男で、まだ脱いでいない道化の派手な衣裳が似合わない。
「さっぱりした?」
ソフィーティアが声をかけた。
「ああ。だけど、素顔はてれくさい。おれは顔をつくってた方が、なんだか自由な気分でいられるんだ」
道化師は言いながら、広間で使っていた赤いハンカチーフを手のなかで消し、なにも持っていない手をひらひらさせた。ソフィーティアがおやと反応を

見せると、彼女の煽情的な衣裳の臍の裏側あたりにひょいと手を伸ばして、ハンカチーフを取りだして見せた。ソフィーティアに気のある素振りとも見えた。

挨拶がわりの手品が終わると、道化師は自分の寝床と決めた干し草の山の方へと歩き去った。

「だから」と座長が話をつづけた。「包囲側にも城側にも、いまどんどん武器弾薬が溜めこまれている。あちらが買えばこちらも買うで、切りがない。このまま戦いが始まって、それが一挙に使われるとなると、見たこともないすさまじい戦いになるのではないかと、もっぱらの噂だよ。武器商人は笑いが止まらないだろう」

「わたしの聞いたところでは、その武器商人をさらにうしろで操っている黒幕がいるらしいという話でしたけど」

「オストラインスブルク城にいる異国の客人の話か。それなら、おれも聞いたよ。陰気な暗い陰を引きずった男だとか。しかし、どうかな。そんな異国の男ひとりに、この戦争全体が操れるものかな。なにかいきさつがあって、ステファンの味方についたというだけの話ではないのかな」

「でも、現にわたしはこうしてその戦場に近づきつつあるわ」

「え……？」

「わたしがこの旅芸人一座に出会ったり、そのほか大勢のひとに助けられて、長い旅の果てにここにやってきたのは、偶然ではないんです。だからこそ、わたしは勇気を持って、ここまで旅してくることができた。偶然は偶然のように見えて、その偶然の積み重ねには、ある力が働いているんです。天の高みから見下ろしている存在がある。それを感じられるかどうかは、その人次第だけれど。おなじように、そのオストラインスブルク城の客も、たまたまそこにいるだけではないはずなんです」

「なんの話だ」

「わたしがここに来たから、その戦争が始まると言ってもいいんです。人間と世界の関わりは、一筋縄ではいかない。複雑な綾がある。たとえば、さっき、道化の彼が手品をしてみせたのも、たぶん彼の気まぐれのせいだけではないんです」
「わからないな」
「あなたにはわからなくても、オストラインスブルク城の客にはわかっていると思います。ところで、そのオストラインスブルク城の客が二本一組の剣を所持しているという話はほんとうかしら」
「その噂もしきりに流れているな。なにか特別な力を秘めた剣で、なんでも、ソウルエッジという名の剣とか」
「やはりその名が噂にのぼっていたのですか」
「そう聞いた。その剣に興味でもあるのか」
「まさにそれを求めて旅をしてきたのです」ソフィーティアが身じろぎすると、ペルシア風の衣裳の薄絹が静かな入り江の波のように揺れた。「オストラインスブルク城へ行けるでしょうか」
「われわれが、という意味か」
「ええ」
「行こうと思えば行けるさ。旅芸人一座には敵も味方もない。国境も領土もない。鳥とおなじで気楽なもの、地上に流れる川が領地境だったとしても、空からそれを越えるのは簡単なことだ。どこへでも入りこめる。行きたいのか」
「はい」
「行ってみようじゃないか。戦場では歌や踊りの楽しみは、とりわけ歓迎される」

9

オストラインスブルク城の切り立つ城壁のところどころに、円筒状に石を積みあげた塔がいくつも聳えていた。

中庭に開いた入口から塔に入り、廻り階段を登れば、城壁上の歩哨通廊へと出ることができる。塔のなかに部屋があり、農民軍の主だったものたちが寝起きしていた。

それらの塔のひとつが、客人に提供されていた。

その夜、客人セルバンテスは、いったん塔内の寝室に入ったものの、なぜか寝苦しく、寝室を出て歩哨通廊の上に立った。

月が出ていた。

中庭をはさんで反対側の城壁の上に、歩哨の立っているのが見えた。徹宵、彼は城壁の上を歩きまわる役目である。

その歩哨のいるあたりに、改築工事のための足場が組まれていた。城壁の上には巻上げ機も据えつけられていた。

天守にある大広間からは明かりが洩れ、人影が動き、楽の音が聞こえていた。

旅芸人一座がやってきていると、昼間から城兵のあいだで評判になっていた。

みなそわそわとして、口実をつくっては厩を覗きにいっていた。一座がそこを控えに使っていたからである。美しい異国の踊り娘がいるとの噂は、ほんの一刻のあいだに城中に広まっていた。

その一座を見物に、城のものたちが大広間に集まっていた。

セルバンテスには興味の湧かないことだった。陽気な楽の音がうるさいばかりで、彼は不機嫌に髭を震わせた。

蝙蝠の影が大広間から洩れる明かりのなかを過った。その影のはためきも不快で、苛立たしいものに感じられた。

が、もう宴も終わるころだった。

見ているうちに、音楽が止み、大広間の明かりが落とされはじめた。

セルバンテスは塔内へもどろうとして、塔の屋根に一羽の梟がいて、丸い目を光らせているのに気

づいた。追おうとしたが、梟は悠然とそこに止まりつづけていた。

しかたなくそのままにして寝室に入り、寝台に身を横たえた。梟の声が耳についた。

天井の隅に守宮（やもり）の張りついているのが目に入った。守宮はいつまで見ていてもじっと動かなかった。

不快な夜だと、セルバンテスはまた思った。思いつつ、しかししだいに眠りの淵に沈んでいった。

目を閉じた彼の頭上に剣掛けがあり、雌雄の剣が掛けられていた。

小振りな方の剣が、熾火のように、かすかに赤い光を放った。光は、火吹き筒で吹かれたように、明るさを増し、また減じた。息をしているように見えた。

やがてそれに呼応するように、大振りな方の剣もうっすらと光を帯びはじめた。ゆっくりと気まぐれな周期で明るさを増減させた。ふっと明るくなったかと思うと、小振りな剣の何呼吸ものあいだ、暗くなったままで何の反応も示さずにいたりした。

そのうち、光の増減が、小振りな剣の周期に同調しはじめた。その周期は、セルバンテスの寝息にも同調していた。

天井の守宮がすすっと動いて、壁に伝い下りた。壁にもう一匹の守宮の黒い影があった。濡れ滴るような月明かりが壁を青く染めていた。

小振りな剣が、明るさの増減をわずかずつ速めはじめた。誘われるように、大振りな剣もリズムを速めた。セルバンテスも寝苦しげに眉間に皺を寄せ、呼吸を速めた。

壁を這う二つの小さな影が重なった。

一組の剣のリズムは、一定の速さに達すると、それを保ってしばらく続いた。雌雄で周期に些少のずれがあり、同時に明るさを増したり、互い違いに一方が明るさを増したときに他方が暗く沈んだり、それをまた修正するように、倍のテンポを刻んだり、長く光りつづけたりして戯れた。

梟がほうと鳴いた。

不意に、二本の剣が光りやんだ。

セルバンテスは淫夢から目覚めた。

すぐに立ちあがって、剣掛けと並べて置かれた甲冑をとり、身にまとった。

剣をとった。柄が熱を帯びているように感じられた。その刃は月の光を映して、濡れているように見えた。

塔の階段のきしむ音が聞こえた。音は、塔内の深い井戸のような円筒形の空洞に響きながら、螺旋状にしだいに上の階へと上がってきた。

セルバンテスの口の端に、かすかに微笑が浮かんだ。

やがて音の主が姿を現わした。

甲冑をまとい、抜き身の剣を下げた、金髪碧眼の女だった。

肌が白い。歩哨通廊への出口を背にして立つと、胴丸から出た二の腕が月の光を受けて青く見えた。髪の毛は夕陽に光る海の波の黄金色だった。

「剣が望みか」

セルバンテスが両刀を構えつつ言った。

「それを破壊することが」

女は言った。

「だれもかれもが手に入れたがるこの剣をか。変わったやつ」

「それが神々の意志」

ソフィーティアは言い放った。

ぎんっ、と鋭く、剣の打ち合う音が、塔の内から響いた。

梟がほうと鳴き、首を小刻みに動かして、油断なく周囲を覗った。

ぎんっ、ぎんっと、続けざまに金属音がした。しゃりんっ、と刃の擦れあう音が交じった。塔内の丈高い空間に反響して、残響音をともなっていた。

塔の石積みの壁に穿たれた出入口から、歩哨通廊

の上へ、女戦士が後退しながら姿を現わした。

梟がばさばさっと羽音を残して、夜空へ飛びたった。

その目に、城全体の俯瞰（ふかん）風景が映る。歪んだ五角形を成す最外周の城壁の、その角々に塔がある。塔と塔を直線で結ぶ狭い歩哨通廊上を、女戦士があとじさっていく。中庭は闇に沈んでいる。

通廊の幅はほんの一、二歩分。外壁の側には攻めてくる敵の矢を防ぐ牆壁（しょうへき）があるが、中庭の側には何の壁もない。通廊からすぐに、垂直に落ちこむ壁となっている。

うしろへ退いた女戦士の踵が、城壁の縁を越え、中庭の闇を踏んだ。はっとして振り返り、足を通廊上にもどし、肩でバランスをとりなおす。

男が斬りこむのを、盾で受ける。受けながら、踵を後方へ擦りだし、縁を探る。探っては体重を移す。

城の外の地面に、城壁の影が落ちている。その影の縁で、二つの影がからみあう。大きい影が小さい影を圧倒し、二つの影はすこしずつ城壁の影の縁を移動していく。

ソフィーティアは相手の尋常ならざる強固さにしだいに気づかされた。それは男としての膂力や剣の技からだけ来るものではなかった。それを越えた何かが男の内にあった。

自分が早まったことを、彼女は知った。神々から賜った剣や盾であったが、生きた相手にそれを用いるのはこれが初めてだった。それらの武具防具の持つ力を、ソフィーティアはまだ十全に引きだすことができない。

相手が悪かった。伝説の邪剣を手にした相手のこと、一筋縄ではいかないと覚悟はしていたが、それでもこの場へ来て、実際に剣を交えるまでは、神々の加護のもと、ただ相手を斬り伏せて、剣を奪いとればいいだけのことと考えていた。それがそうはいかなかった。

相手は思いのほか深い存在だった。彼の生命力

は、地の底の闇のようなものとつながっていて、その根を断ち切るのは容易なことではなかった。地中深く張った根を、すべて掘りだすような作業が必要だった。

ヘパイストスの誤算とも言えた。鍛冶の神はソウルエッジを破壊と殺戮をもたらす剣だと言った。しかし、いま目のまえにいるセルバンテスの握る剣は、ただそれだけのものではなくなっているようだった。長い年月が剣を変貌させ、さらに変貌させつづけているようだった。

ヘパイストスの言った、神々の領域に達した剣とは、単に人間の領域を越えた剣との意味だった。しかし目のまえの剣は、それだけのものではなかった。宇宙の存在そのものに関わる闇を秘めていた。

その闇が、剣を操るセルバンテスの心の闇と呼応していた。呼吸を通じあっていた。その関係は、剣が直接かつ一方的にセルバンテスを支配しているというものではなかった。両者はこの宇宙という共通の空間にそれぞれの場所を占めるものとして交通していた。宇宙を包む一つの波動として共振しあっていた。

これらのことを、ソフィーティアは整然とした思考の筋道として了解したのではなかった。二本の剣が月下に閃く銀色の筋、自らの剣と衝突する手ごたえや音、その向こうにいる重い闇のような男の存在、それらが一つに溶けあって、ソフィーティアにもたらした直観だった。自分の思考のようには感じられなかった。どこか彼方からやってきたものだった。

その闇の波動の間に間に、ソウルエッジをめぐる数々の人物、数々の物語を垣間見ることができた。そのなかで、自分がきわめて特異な存在であることを、ソフィーティアは知った。我欲からであろうと、義憤からであろうと、怨念からであろうと、あらゆる人間が、ソウルエッジを必要なものとして追い求めていた。ソフィーティアだけが違っていた。

彼女だけがソウルエッジを破壊し、葬り去ろうとしているのだった。
ソウルエッジの周囲に蠢(うごめ)く存在は、程度の差こそあれ、ソウルエッジの放つ闇の力に呑みこまれていた。その闇に身を浸していた。ソフィーティアだけが例外だった。希少な存在だった。いまここで、セルバンテスとことんやりあって、命を落とすわけにはいかなかった。
蝙蝠の影が頭上をかすめた。風の渦に巻きこまれた黒い布切れのように、ひらひらと忙しく進路を変えながら飛ぶ蝙蝠を追って、梟が飛んだ。
逃げる。
そのことをソフィーティアは思った。
月光の銀の滴を振りまくセルバンテスの剣を、満身の力をこめて跳ねあげると、踵を返して城壁上を走りはじめた。
細く長く延びる歩哨通廊の左右は闇。通廊の幅だけを見つめて、ソフィーティアは走った。セルバンテスが追ってきた。
前方から歩哨が走ってくるのが見えた。歩哨は剣を抜き放っていた。
歩哨とソフィーティアの中間に、城壁改修工事の足場があった。
ソフィーティアがそこへたどりつくのと、歩哨がやってくるのと同時だった。
次の瞬間、ソフィーティアの姿が消えた。
セルバンテスと歩哨が、立ちどまって、目を見あわせた。二人の視線の交わるところで、巻上げ機の輪が回転していた。
牆壁越しに覗きこむと、巻上げ機のロープにぶら下がって降下していく女戦士の姿が見えた。
城壁の下方は月光の届かないまったき闇になっていた。その闇の底へと垂直に降下しはじめながら、ソフィーティアは闇のただなかにひとりの少年のいるのを見た。
大地を覆って広がる巨大な闇の底で、少年は道に

迷い、助けるものもなく孤独で、声なく絶叫しつつ、闇にむかって無益に剣を振りまわしていた。距離が遠いために蟻の頭のように小さく見えるのに、傷つき絶望した表情だけは瞳のわずかな動きまでくっきりと見える少年にむかって、暗い夜空の天頂からソフィーティアは降下しつつあった。

　それがいましがた自分の対峙した二本の剣が発していた波動の余波がもたらした幻であることに、ソフィーティアは気づいた。少年もまた、ソウルエッジの放つ闇に呑みこまれようとしている人間のひとりだった。

　不意に衝撃がきた。ソフィーティアの降下が止まった。巻上げ機の回転するきしみ音も止まっていた。見上げると、セルバンテスが歩哨通廊から建築足場へ乗り移ろうとしていた。

　足元は闇のためにどれほどの距離があるのかわからない。しかしすぐにソフィーティアは決断した。ロープを握っていた手を離した。

永遠かと思える落下が続いた。地中深くへと穿たれた縦穴を落ちていくようだった。その果てに地面に転げた。

　ソフィーティアは立ちあがって、闇のなかへと走りはじめた。

第五章

1

自然の摂理のごとく、戦いの機は熟していった。

星空が一巡りすれば朝が訪れるように、草木が成長すれば実を結ぶように、戦いのときはやってきた。

包囲城壁の外に、アンドレ侯が集めに集めた傭兵たちが犇めきあっていた。土砂で堰かれた川に水が溜まるように、人馬が満ちあふれていた。その兵糧を維持するだけでも物入りで、いつまでも決戦を先送りしているわけにはいかなかった。

やがて堰は切られた。土砂を孕んだ洪水のように、大軍が戦場へなだれこんだ。包囲城壁の内側は泥水の流れこむ湖と化した。

その中央に孤城があった。長期の籠城戦を耐えに耐えて維持してきた城であった。援軍として期待できる他国の農民軍のうち、馳走できるものはすでにみな城に入り、包囲軍の外からの援軍はもはや頼むべくもなかった。孤立無援、あとは守りに徹し、敵をてこずらせ、和議に持ちこむよりほかに生き延びる道はなくなっていた。

押し寄せる泥水のような大軍の前に、城は小さく寂しげだった。勝敗の帰趨はすでに決したも同然と見えた。

攻め方はひた進んで城の足元に達した。途中、抵抗はなかった。通過する野に伏兵はなく、村の住民たちは窓を閉ざして家に閉じこもっていた。

しかし、砲撃の火蓋が切られてから、攻め方はこの城が容易ならざる相手であることに気づかされることになった。

城は変貌を遂げていた。

オストラインスブルク城の大規模な改修工事が始まったとき、包囲軍の幾人かの有為の将はすぐに気づいて、

「敵は稜堡(りょうほ)を造りはじめましたぞ」

アンドレ侯に注進した。

砲撃による城攻めに対抗する築城術であった。

時代は戦闘方式の大転換期を迎えていた。かつては騎士同士の一騎討ちや、槍を持った歩兵の部隊の白兵戦が、戦闘の中心だった。弓を携えた部隊による矢の一斉射出という戦法がこれを打ち破った。弓はやがて鉄砲に置きかわった。

鉄砲は当初とても役に立つ武器ではなかった。この物語のわずか数十年前、火縄銃が使われはじめたころには、一発発射してから次の弾丸を装塡するまでに数分かかり、射程距離もせいぜい百メートル程度だった。これに対して、熟練した弓兵は一分間に十回も矢を射ることができ、二百メートルは飛んだ。鉄砲など使っていた日には、装塡しているあいだに敵の騎馬兵が自陣に飛びこんできてしまった。

しかし、鉄砲は短期間のうちに改良に改良を加えられ、威力を増し、扱いやすいものになっていった。こうなると、弓よりものを言う武器になった。弓兵を熟練させるには長期間の訓練が必要だったが、鉄砲なら数日で一応の形のついた鉄砲兵に仕立てることができた。

戦闘方法も新しいものが考案された。斉射戦術である。部隊を何班かに分け、一班ごとに横一列にずらりと並ばせる。第一列目が一斉射撃を行なうと、ただちに後方へ下がり、第二列が進み出て二発目の一斉射撃を行なう。この間に一列目が次弾の装塡をすませる。それを繰り返せば、切れ目なく弾丸を発射することができる。これなら敵の騎馬兵が飛びこんでくる隙はない。

このような銃と戦術の改良で、鉄砲は戦場の花形となった。

それにつれて、攻城戦にも変化がもたらされた。

弓や槍の時代には、ともかく城壁は高ければ高いほどよかった。城はのっぺらぼうに垂直にそそりたつ城壁に囲まれて、超然としていた。巨大な投石機や車輪のついた攻城塔など、城攻めの武器はさまざまにあったが、城に立て籠った敵を打ち破るのは容易なことではなかった。城側が圧倒的に優位だった。

その状況を一変させたのが、大口径の火砲の出現だった。大砲があれば、どんな堅牢な城も数日で落ちた。

もちろん、城の建築家たちがこれを黙って見ているはずはなかった。大砲に対抗する築城法を考案した。

城壁に稜堡を造る築城術だった。

垂直にそそりたつばかりの城壁は簡単に大砲に破られる。そこで城壁は低く分厚いものにする。同時に、城壁の外側へ張りだした稜堡を築く。張りだした稜堡上から砲撃を行なうことで、敵の大砲が城へ接近するのを防ぎ、稜堡の左右の城壁に取りついた敵兵を狙い撃ちにする。さらに、その稜堡の外側へ冠塞と呼ばれる付属城塞を張りださせれば完璧である。

弓と肉弾の戦闘が、砲弾と火薬の戦闘へと変わるにつれ、このような築城術がヨーロッパ中に広まりつつある時代だった。オストラインスブルク城の改築はそれを取りいれようとしていた。

ただし、この築城法は、あらゆる地域で広く知られるにはまだ至っていない。包囲軍側で、改築の意味を見破ったものはわずかだったし、そのできあがりの形を正確に予見できるものはもっとわずかだった。

「なに、あわてることはない」アンドレ侯はのんきに構えていた。「敵は農民たちの烏合の衆、そのような新しい築城法をどこかで聞きこんできて真似てみたところで、おいそれとうまくいくものではあるまい。改築工事のせいで、かえって城壁に弱点ので

きるのが落ちというところだろう」
「いや、しかし」注進に及んだ将は戦場の空気を肌で感じ、情報も仕込んでいた。「敵方に最近謀略に長けた客将があるとか。おそらく城の改築はそのものの入れ知恵。改築現場で指揮をとっている姿も遠望されています。烏合の衆などと侮るのは禁物ですぞ」
「浮き足立つな。こちらには、モンス・メグもある」
とはいえ、ともかく妨害の兵を出し、ようすを見よ、とアンドレ侯は言った。が、この包囲軍の総帥はそのことにあまり熱心ではなかった。包囲軍側はおざなりに幾度か兵を出しただけに終わった。
現場の将たちの心配をよそに、オストラインスブルク城の改築は進んだ。
そうして、その生まれ変わった姿が、いま包囲軍の将兵たちの目の前にあった。

2

フォルケルは心配をしていた。奇妙な心配だった。自分の部隊が勇猛すぎるのではないか。そのことを恐れていた。
心配しつつ、包囲城壁の一角にある城塞を馬で出た。部隊とともに進軍し、オストラインスブルク城に接近した。
百人ほどの傭兵部隊だった。隣にジークが馬を並べて進んでいた。そのジークこそが、この部隊の指揮官だった。心配はそこにあった。
この戦場へ来て、アンドレ侯の包囲軍に傭兵として雇われてすぐ、フォルケルとジークの配属された部隊は小戦闘に駆りだされた。
敵の城壁の改築現場を襲撃し、反応を見るという作戦だった。

せいぜい五十人ばかりの傭兵が、馬に乗らず、丘や森の陰に身を隠しながら、敵の城に接近した。わっと討って出て、改築作業の現場を奇襲した。

敵は工事の護衛部隊を分厚く配置していた。それがただちに応戦を開始した。同時に、城壁内外の他の守備部隊が、待ちかまえていたように瞬く間に参集してきた。

包囲軍側はそれで目的を達した。敵の反応を見ることが目的だったから、かなり神経質に護衛を張りつけて工事を行なっていることがわかれば、それで十分だった。

退きあげよ、との命令が発せられた。

が、ジークは弾け飛んだ。部隊の動きとは逆に、剣をかざして敵の城の方へと突っ込んでいった。

フォルケルが追った。さらに、傭兵仲間の何人かの猛者（もさ）連が、おもしろがってあとを追った。

即席の突撃部隊は敵中に乱入して、一暴れした。敵に囲まれ、退路を断たれたかに見えた瞬間、ジークは仲間をまとめて脱出した。その間、わずか一、二分という時間であったろう。

逃げもどったジークの手に、斬り落とした敵兵の首がぶら下げられていた。

後方の工事現場では、作業足場が崩れて、乗っていた人足が何人もばらばらと地上に墜落していた。一暴れのあいだに、足場の木材を固定した縄の何本かを、ジークが剣で叩き切ってきたせいだった。

それがジークの、この戦場での暴れはじめだった。

襲撃部隊の指揮官は、ジークの跳ねっ返りに大目玉をくらわせた。くらわせたあとで、しかしにやりと笑い、

「見どころのあるやつ。先刻の突撃部隊をおまえに任せる」

小部隊の長にジークを任命した。

もとよりジーク、盗賊団の首領である。猛者連を束ねるのには慣れていた。生来乱暴な連中に魅力を感じさせるものを持っていた。

「おもしれえぜ、このガキは」
「ひとついっしょに暴れてくれよう」
はるかに年長の傭兵たちが、喜んでジークの配下となった。
いくつかの小戦闘で、ジークの部隊は派手で乱暴な活躍をした。
警戒巡視中に敵と遭遇するや、人数で数倍する敵の部隊に平然と斬りかかって、たちまち潰走させ、潰走させるだけでは足りず、そこまでせずとも十分に責務を果たしているのに、追撃して敵兵の後ろ襟をひっつかまえ、片端から首を掻き斬り、ついに皆殺しにしてしまった。
包囲城壁に抜け道があり、ひそかにそこを通って守備側の武器弾薬食糧の補給が行なわれていることを知るや、待ち伏せして武器を満載した馬車と護衛の部隊を襲撃し、全滅せしめ、それだけでは足りず、返す刀で、袖の下をとってその通過を黙認した包囲軍側の裏切り者の部隊に襲いかかり、これも皆殺しにしてしまった。
それどころか、敵に流れるはずの武器が多量に手に入ると、
「わが部隊の手柄、獲物は山分けだ」
ジークは傭兵部隊の指令官に強談判におよび、奪取した武器弾薬の半分を自分の部隊に持ってきてしまった。
噂は包囲軍全軍の傭兵たちのあいだに広まった。跳ねっ返り、不平分子、ごろつき、腕に覚えの一匹狼など、所属する部隊に肌があわず、長々としたがまんの攻城戦にうんざりしていた連中が、
「あんたの下で一暴れさせてくれ」
三人、また五人と、ジークの部隊へ集まってきた。
いつのまにか数十人の部隊がジークの配下となり、集まるのがそんな連中だったから、部隊を移ってくるにあたっては、手土産にと、元の所属部隊から武器弾薬をかすめとってきてしまい、気がつくと包囲軍中でも最強の傭兵部隊ができあがっていた。

まるで戦場に出現した新〈黒い風〉であった。

元の部隊では厄介者がお払い箱にできたというほどの気分であり、小戦闘で次々と華々しい戦功をあげるジークのやることを指令官も黙認せざるをえず、新〈黒い風〉はそのまま包囲軍の一角に位置を占めることになった。

そのジークの部隊が、オストラインスブルク城に接近しつつある。

配下の兵は命知らずの猛者ばかり。鉄砲玉のごとく、ひとたび突撃を開始すれば引き返すことを知らず、どこまでも突き進みつづける連中である。それを率いているのが、また、たががはずれればそのはずれ方が並でない男であった。

しかも、配下の猛者たちは、この指揮官に愉快を感じ、親しみを覚え、全幅の信頼を置くようになったものばかりだった。死ねやと号令されれば、おもしれえ死んでくれようと応じるものばかりだった。

フォルケルはそれを案じていた。

いや、それだけのことなら、〈黒い風〉と事情は変わらない。心配が広がるのは、ここが戦場だということだった。

包囲軍は、フォルケルの見るところ、長い攻城戦に倦んでいた。ほとんどは金で雇われた傭兵で、しかもいささか多人数を雇いすぎたせいで金の支払いは遅れがちだった。軍への忠誠心はなく、結束は弱く、士気も低かった。おまけにアンドレ侯を中心とする上層部内には、戦略的行き違いがあって、そのせいで、部隊の構成や武器弾薬の配給に種々の齟齬が生じてもいた。

そのような軍のなかに、ひとり強悍な部隊があったらどうなるか。それが鉄砲玉のように飛びだして、背後の押さえなく孤立したらどうなるか。フォルケルの心配はそれであった。

敵は自発的に集まった農民反乱軍で、結束は強く、士気も高かった。参加しているものはみな命懸けだった。金のために集まった傭兵部隊とはだいぶ

様相が異なった。圧倒的な人数を集めながらまとまりのない包囲軍に比べて、はるかに充実した力を秘めているように思われた。

その充実した農民軍が籠っているのは、城壁を改修し、守りを固めた城だった。城は、もともとの五角形の城壁の角々に、巨大な船の舳先のように稜堡を突きだし、美しい幾何学的形態に変貌していた。

その美しさに、フォルケルは恐れを感じた。魔術的な秘法を内に秘めて、美しいがゆえに強力で打ち壊しがたいものと見えた。その形自体に特別の力が宿っているように感じられた。

フォルケルの心配をよそに、この星の形をした城を巡る戦闘は開始された。

3

野を戦塵が包んだ。雷鳴のごとく砲声が轟き、敵味方の銃声が交錯した。人馬の声が地に満ちた。

暗く狭い鐘楼の内壁に垂直に据えつけられた梯子(はしご)を、ソフィーティアは伝い登っていった。光は頭上から射し降りてくるだけで、手元は薄暗闇、ほとんど手探りで梯子の次の段を探さねばならなかった。

不意に目の前が明るくなると、鐘楼のてっぺんに出ていた。鐘楼内までくぐもって伝わってきていた戦闘の騒音が、わっとじかに耳に飛びこんできた。

人ひとりなかに収まってしまうほどの鐘が中央に吊るされ、鐘楼内に紐を垂らして、下方から引き鳴らせるようになっていた。その鐘の下端の高さに、ようやく足を乗せられる程度の歩廊がめぐっていて、ソフィーティアはそこを伝わって、開口部から鐘楼の外に出た。まるで空中に浮かんでいるかのような視界が、広々と眼前に開けた。

そこからさらに小さな梯子を伝って鐘楼のてっぺんにあがった。尖った屋根の先端に大きな十字架が立ち、そのわきに、ごく狭い展望台がつくられて

いた。
先客があった。ソフィーティアとおなじく旅の途中この教会に身を寄せているイタリア人学問僧だった。
「司祭様、戦はどんなようすです」
ソフィーティアは学問僧とならんで展望台に立った。二人ならんで立つことができたが、展望台は狭く袖が触れあうほどにしていなければならなかった。
「わたしは司祭ではありません。教会とは縁を切った身です」
学問僧は戦場を眺めやりながら言った。
「そうでしたか。それは失礼を」
「いや、かまいませんよ。身分などどうでもいいことです。宇宙の真理にくらべれば」
「宇宙の真理？」
「妙なことを口走りましたかな。そのことでいつも頭がいっぱいなものですから、つい失礼をいたしました」
「いいえ」
「戦況はどうやら攻め方に不利のように見えますよ。あの星型の城はかなり強力なようだ」
「そうですか」
「ここから見ると、まるで天界から地上を眺めおろすように、戦いのようすがよくわかります」
場所を譲りましょう、わたしはもう十分見物しましたから、と学問僧は言って、梯子を伝って降りていった。ソフィーティアはあらためて戦場のようすを眺めた。
教会は小さな村のはずれの小高い丘のうえに建てられていた。村へむかって下っていくと、その村のむこうに広い低地が広がり、その低地が彼方でゆるやかに登り勾配になった先に、オストラインスブルク城が見えた。
攻め方の部隊が、その勾配を攻め登って、城に迫ろうとしていた。ちょうどその正面に、城壁から突出した稜堡があり、稜堡の前にさらに冠塞があり、

そのうえに数えて五門の大砲と数十丁の鉄砲隊がずらりとならび、攻め方に弾丸の雨を降らせていた。攻め方は容易に城へ近づけなかった。

それでも、その部隊が、全軍のなかにあっては、もっとも果敢に攻めている部隊だった。遠望される他の部隊は、もっと及び腰で、届きもしない場所から野砲を撃っていたりした。

ソフィーティアの青い瞳は、ほんの一呼吸のあいだに、そのもっとも果敢な部隊を率いている少年の姿を見つけだしていた。少年は馬上、長大な剣を振りかざし、なんとか砲弾をかいくぐって城に接近しようともがいていた。

その目に狂気の炎が燃えていた。きつく結ばれた薄い唇には、苛烈な闘争への意志があった。胴丸も肩当ても籠手も脛当ても氷のように青く冷たく光っていた。鎧の下から覗く緑色のかたびらは、森の木下闇の色と見えた。

馬のすぐまえに砲弾が落ちた。吹きあがった土煙に竿立ちした馬のうえで、ジークは歯を食いしばって手綱を引き、なお城へ接近する道を探した。

「ジーク！　ジーク！　あわてるな。落ちつけ。城攻めに性急さは禁物」

土煙のむこうからフォルケルが叫んだ。ジークがその声を睨みかえす。フォルケルは重ねて叫んだ。

「おれたちだけ突っ込んだところで、どうにもならんぞ。ほかの部隊と合わせるんだ」

「知るか」ジークは叫び返した。「おれひとりでも突っ込む。合戦がどうなろうと知ったことか。父の仇を討つ剣を手に入れるのだ」

部隊の猛者連は、ジークの焦れたような叫びに応じて、我先に砲弾の雨のなかへと突っ込んでいく。部隊がそのように動きはじめては、フォルケルにも止めようがなかった。

次々に死者が出た。爆発的に舞いあがる土煙に混じって、人間の胴体やもげた手足が舞い飛んだ。しかし部隊は微塵（みじん）も怯（ひる）むことはなかった。指揮官の

ジークの号令に従って嬉々として死地へと突き進んだ。

ついに先頭の何人かが、冠塞の足元に達し、城壁の石積みに取りついた。たちまち城壁上から銃弾が撃ちかけられ、熱した油が注がれ、石が投げ落とされた。後方にいる味方の野砲は、まだこれらの先鋒部隊を掩護（えんご）できる位置にまで押しだしてきていなかった。冠塞の下に死体の山が築かれた。

それでもなお、部隊は突撃をつづけた。フォルケルの心配は現実のものとなりつつあった。

細く柔らかい金色の髪の毛の揺れるのが、少年の傷つきやすい心そのもののように、ソフィーティアには見えた。戦場で多数の配下の兵に囲まれながら、少年はひとり孤立していた。周囲を闇に閉ざされ、行くべき道を見失っていた。氷河の先端にできたつららのような剣を振りまわすのが、まるで大声を発して泣き叫んでいるように見えた。

ソフィーティアは目をあげて、戦塵の彼方に、攻められてなお泰然と落ちつきはらっているオストラインスブルク城の姿を遠望した。城壁の一角に聳える塔のすぐそばに、歩哨通廊の牆壁から腰からうえだけを覗かせて、腕組みをして戦場を見下ろしている男の姿があった。

「攻めろ。突き進め。攻めれば攻めるだけ死者が出る。死体の山を築け」

奮戦するジークを見下ろしながら、口髭を歪ませ、歯を覗かせて、セルバンテスはつぶやいていた。

目を上げれば、戦場のすべてを一望のもとに見渡すことができた。まさにジークの部隊だけが突出して、死体の山を築きつつあった。

武器弾薬はあきらかに守備側が豊富だった。戦闘法も組織だっていた。セルバンテス自身が指揮して築いた城壁は、期待通りの効果を発揮していた。

戦場の彼方、攻め方の後方に視線を馳せて、セルバンテスは皮肉な笑いを唇の端に浮かべた。牛に曳（ひ）かせて、巨大な攻城砲が引き出されてきていた。多

数の作業兵が、青虫の死骸に群れる蟻のように巨砲のまわりを右往左往し、小さな口をいっぱいに開いてわあわあわめきあっていたが、巨砲の運搬作業はまるではかどらなかった。

突然、黒々とした巨砲の砲身が、がくりと傾いた。運搬台車の車輪がはずれて転がりだし、蟻たちがわっと逃げ散った。

「何をやっている！　あれほど運搬訓練を念入りにやれと言っておいたではないか。砲兵隊長！　どういうことだ！」

モンス・メグの部隊とともに、威風堂々、戦場へ姿を現わしたアンドレ侯が、馬上で罵り声をあげた。

砲兵隊と作業班は首を縮め、大あわてで台車を修復しようと試みたが、巨砲を載せた台車は重すぎて持ちあがらず、車輪をはめなおすことは不可能のようだった。

「役立たずめっ！」

罵声を残して、アンドレ侯は、もう一門、先に前線へ進んだモンス・メグの方へ、馬を駆けさせはじめた。そちらでは砲兵が発射の準備にとりかかったところだった。

巨大攻城砲の登場が少年をいよいよ追いつめる結果をもたらすだろうことを、ソフィーティアは見てとった。

怪物のような大砲の出現は少年の部隊の士気をいよいよ高め、突撃の果敢さをいよいよ増大させた。が、冠塞下の状況は何ひとつ変わっていないのだ。そこは部隊にとって死に場所でしかなかった。

アンドレ侯が前線へ押しだしたモンス・メグのそばへと駆けつけたとき、砲の射撃準備がちょうど整った。砲兵隊長が発射の号令を発した。

モンス・メグが火を噴いた。ただし、筒先ではなく筒元の方から。

十人ばかりの砲兵が吹き飛ばされ、高々と宙に舞った。爆風でアンドレ侯も馬から落ちた。爆発煙

の流れ去ったあとに、ひび割れた砲身と焼け焦げた台座が姿を現わした。
　それが戦いの境目となった。
　頼りになるはずの巨砲の失態で、攻め方は急速に戦闘意欲を失い、退却しはじめた。
　皮肉なことに、そのときようやくジークみずからが冠塞の城壁にとりついたところだった。背に長剣を負い、石積みの城壁にしがみついて、よじ登りはじめていた。
「ジーク！　負け戦さだ。引き返せ」
　フォルケルが呼ばわった。
　ジークは振り向きもしない。
　城壁の根方に累々と積み重なった仲間たちの死体が、上へ向かう意志の原動力となっていた。これだけの数の人間を死に追いやっておいて、ここで入城を断念するわけにはいかない。力ずく以外にジークの行動を止める方法がないことを、フォルケルは承知していた。ジークの尻を見あげながら、フォルケルも城壁をよじ登りはじめた。
　鎧をまとった尻のむこうに、青空が広がっていた。その青空が一瞬、真っ黒に色を変えた。桶一杯の烏賊の墨をぶちまけたようだった。実際にぶちまけられたのは、コールタールだった。コールタールは熱く煮えたぎっていた。
　とっさに腕で目を守りながら、フォルケルは墜落した。そのうえへ、ジークが降ってきた。ジークはもろにコールタールを浴びて、髪も顔も真っ黒になっていた。皮膚が焼けただれて真っ赤になっていた。
　ジークは絶叫しながら、顔に粘りついたコールタールを手で拭おうと試みた。その指がたちまち火膨れを起こした。立ちあがり、罵り声をあげてうろつきまわる彼を、暗黒が覆っていた。目をやられて、方向を見失っていた。
「ジーク、こっちだ」
　フォルケルは少年の肩を抱いて導いた。その頭上

へ、人の頭大の石がばらばらと落ちてきた。そのいくつかが二人の肩や背を激しく殴りつけた。フォルケルは歯を食いしばって進んだ。
「逃げろ！　退却だ！」
部隊の兵たちに叫んだ。さすがの猛者連もついに退きあげにかかった。
城壁のうえから銃声が轟いた。城に背を向けた兵たちの幾人もが、ばたばたと倒れた。それらの兵たちを助けている余裕はフォルケルにはなかった。
ジークの膝ががくりと折れた。その鎧の背に、いくつもの穴が開いていた。鎧の下で赤く血の噴きだしているのがわかった。倒れこみそうになるジークを叱りとばすように激励して、逃げつづけた。
部隊の兵がジークの馬を準備して待っていた。フォルケルはジークを鞍のうえに押しあげた。ジークは腹で鞍にひっかかるように馬にしがみついた。
「ジーク？　聞こえるか？」
フォルケルが大声で訊いた。むう……とジークは声を洩らしたように思えたが、さだかではなかった。
わっと多人数の声があがり、蹄の音が轟いた。跳ね橋が下ろされ、城内から敵兵が繰り出してきたのだった。蜘蛛の子を散らすように逃げはじめたジークの部隊に、城兵が襲いかかった。
フォルケルはジークの馬の尻を叩き飛ばした。馬は走りはじめた。フォルケルも自分の馬に飛び乗り、ジークのあとを追って走りはじめた。

4

闇のなかにジークはいた。手探りで必死に鞍にしがみついていた。振り落とされずにいるのがせいいっぱいだった。
追っ手の蹄の音が間近に聞こえていた。すぐ耳元に騎馬の大集団がいるようだった。発砲する音も聞こえた。

フォルケルの声がときどき聞こえた。自分の馬を誘導してくれているようだった。闇のなかでただひとつの命綱だった。が、それがいつしか跡切れて、聞こえなくなった。

それと前後して、追っ手の蹄の音も遠ざかった。あるいはフォルケルが追っ手を引きつけて逃げたのかとも思われた。

ジークはなお闇のなかを走った。背中が焼けるような痛みを発していた。顔や首筋や腕の皮膚も悲鳴をあげていた。馬の一揺れごとに、地獄の劫火に焼かれているようだった。

やがて走り疲れて馬が止まった。戦闘の物音は遠くに聞こえていたが、あたりは静かだった。ジークはずり落ちるように鞍から降りた。

手探りで地面を這い進んだ。馬はいずれ追っ手に見つかる。馬からできるだけ離れて、茂みなりなんなりに身を隠したかった。すぐにでも意識は薄れていきそうだった。そうなるまえに、隠れ場所を見つけたかった。

水の匂いがした。急に喉の渇きを覚えた。そう気づくと、それはたちまち居ても立ってもいられない激しさになった。すがるように匂いをたぐった。

全身が熱を帯びていた。鎧のなかに血が溜まっているのがわかった。手足が重く、自分のものではないようだった。

匂いの源は容易に見つからなかった。鼻を突きだして這いまわるうち、耳が多数の蹄の音と人の声をとらえた。追っ手にちがいなかった。戛々と重なりあう数頭以上の馬の蹄の音と、騎手の剣や鐙の揺れる音が、ジークに接近してきた。

少年が闇のなかにあることに、ソフィーティアはすぐに気づいた。馬からずり落ち、地面を這いずりまわりはじめると、そのことはいっそうあきらかになった。少年はなにかを求めて、しかし、おなじところをぐるぐるまわっていた。

鐘楼のうえからそれを見て、ソフィーティアは梯子をくだった。鐘楼内に入ろうとするとき、追っ手の小隊が丘の下に姿を現わすのが見えた。

礼拝堂から教会の前庭に出ると、少年の姿は見えなくなっていた。鞍をつけた馬だけがたたずんでいた。

ソフィーティアは馬の手綱をとって、礼拝堂の裏手へ引っ張っていった。大急ぎで中庭にもどると、馬の蹄のあとを足で蹴るようにして消した。丘の下からあがってきている蹄跡までは消している暇はなかった。

丘の斜面の途中でいったん視界から見えなくなった追っ手が、間近な位置でぬっと大地から迫りあがるように姿を現わした。騎馬十頭に歩兵三十人ばかりが従っている。馬の息が顔にかかるほどにソフィーティアに近づいて、一隊は止まった。

「アンドレ侯の傭兵が逃げてきただろう」

隊長がソフィーティアを見下ろして問うた。

ソフィーティアは首を振った。

「いいえ」

「どこへ行った」

隊長はソフィーティアの答えを無視して、重ねて問うた。

「そのようなものは見なかったわ」

「匿(かくま)ったのか」

「いいえ」

「隠しだてをすると、おまえの身にも危害が及ぶぞ」

「見なかったものを見なかったと言っているだけです。隠してなんかいないわ」

「おい」

隊長は部下の歩兵たちに合図した。歩兵たちはさっと分かれて、礼拝堂の周囲を探しにいこうとした。

「待って。ここは小さくても教会の領地。かってなことは許されないわよ」

ソフィーティアの一喝に、歩兵たちは動きを止め

て、隊長を見た。隊長は苦々しい顔でソフィーティアを見、ソフィーティアの足元の地面を見た。蹄の跡を消した名残があった。
「馬の足跡はここへと続いていた。われわれはそれをはっきり見たのだ。急にここからなくなっているのは不自然だな」
「馬の足跡？　逃げてきた兵隊の？　どこにそんなものがあるの」
ソフィーティアは手を広げて、追っ手たちの後方の坂道を差し示した。道には部隊の馬の足跡がいっぱいについていた。そのなかから一頭の馬の足跡を区別することは不可能だった。
虚を突かれて隊長が言葉に詰まった一瞬を逃さず、ソフィーティアは切りこんだ。
「下馬なさい。乗馬したまま教会の庭に踏み入るとは、なんと驕慢な態度なのです」
凛とした声に何人かの騎手があわてて鞍から降りた。すでにソフィーティアの勝ちだった。
「お引きとりください。ここにはだれも逃げこんできやしません」
おだやかな声にもどって言うと、追っ手はしかたなく轡を返した。
追っ手の姿が見えなくなってから、ソフィーティアは中庭を見てまわった。
積み石で丸く囲った井戸のへりに、土がこすりつけられた跡のあるのを見つけた。覗くと、円形の闇の底で、黒くたゆたう水に半分浸かっている人の姿を見分けることができた。顔を井戸に突っ込むようにして呼びかけてみたが、反応はなかった。
ソフィーティアは助けを求めて礼拝堂に走りこみ、イタリア人学問僧を引っぱってもどってきた。
教会とは縁を切ったと言いながら、頭布つきの修道服をまとっている学問僧は、井戸を覗きこんで人の落ちているのを確認した。
井戸には二本の柱で支えられた屋根があり、その

二本の柱のあいだに水平に渡した丸太にロープが巻きつけてあった。丸太は自由に回転し、ロープの先端に吊るした桶で水を汲みあげる仕組みになっていた。

ソフィーティアは桶をはずし、石積みの囲いのうえに立って、垂れたロープにしがみついた。学問僧が身を乗りだしてロープをつかむと、ソフィーティアはロープに体重をかけた。井戸穴の周囲を蹴りながら降りるソフィーティアにあわせて、学問僧はロープを繰りだした。

井戸のなかは冷え冷えとしていた。ロープのきしみとソフィーティアの呼吸の音が空洞に反響した。地上の光の届かない闇の底へとソフィーティアは下っていった。

少年は意識を失っていた。鼻まで水に浸かり、もうすこし遅れれば地底の水のなかで溺れ死ぬところだった。

ソフィーティアはロープをたぐり、みずからも水に浸かりながら、それを少年の体に巻きつけた。合図を送ると、地上で学問僧がロープを引きあげはじめた。宙吊りになった少年の鎧から、血の混じった水があふれて、井戸の底に帰った。どうにか引きあげられていく少年の体を、ソフィーティアも必死で下から押しあげた。

学問僧に助けられて、ソフィーティアが井戸からあがると、少年は鎧を着たまま井戸の脇の地面に横たえられていた。

少年の顔のうえにかがみこんで、頬を鼻に触れるほどに近づけた。息は感じられなかった。

少年の顔は赤く焼けただれ、水疱を生じ、触れれば皮膚がずるりと剝けてしまいそうだった。美しかった金髪には黒くコールタールがこびりつき、髪はちりぢりに焼け縮れていた。ただ薄い唇だけが、奇跡のように無傷だった。

半ば開かれて白いきれいな歯の覗く唇に、ソフィーティアは唇を重ねた。かすかにはしばみの実の匂い

がした。井戸の水に濡れて、薄切りにした生肉のように、冷たく柔らかい少年の唇に、唇を隙間なく吸いつかせて息の洩れないようにし、蠟燭の炎さえ揺れないほどの注意深さで、ゆっくりと息を吹きこんだ。息は少年の気管からの抵抗を押し返しながら、染み入るように体の奥へと吸いこまれていった。

「おつづけなさい。あわてず、あきらめず、くりかえすのです」

学問僧が傍らに膝をつきながら言った。

ソフィーティアはつづけた。息を吹きこみ、間を置いて、また息を吹きこんだ。やがて少年の唇にぬくもりがもどってきた。ついに少年は口から水を吐きもどし、自発的な呼吸をはじめた。

「医術の心得があるのですね。傷の手当をしてくださいますか」

ソフィーティアは顔をあげて、学問僧に訊いた。

「礼拝堂へ運びましょう」

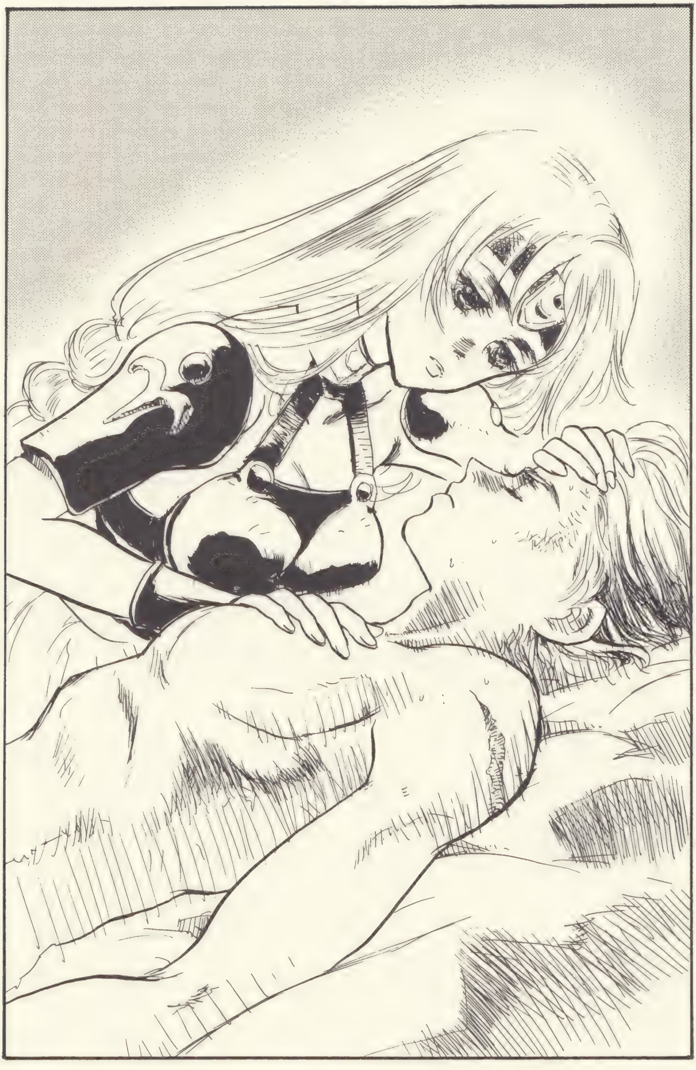
学問僧は言った。

5

ランセット窓に嵌めこまれたステンドグラスは、花咲く野に立つ聖人と、その背後の空に群れ飛ぶ鳥たちを描きだしていた。聖人の金色の衣服、背後の空の青、鳥たちの白、それらのガラスを透過してきた光が、礼拝堂の床に映えていた。

礼拝に集まる人々が使う長椅子を四つ寄せ集めて即席の寝台をつくり、少年の体は俯せに横たえられていた。長椅子の脇には、ソフィーティアと学問僧が二人がかりで脱がした鎧一式がならべられ、鎧の下に着ていたかたびらが胴丸のうえにかぶせられていた。

色の白い少年の背中の筋肉は固く盛りあがり、引き締まった腰を経て、かたちよく丸くふくれた尻へと連なっていた。ステンドグラスからの光がそのな



めらかな肌を金色と青と白の交錯する色彩で染めあげていた。

背中に二か所、太腿に一か所、弾傷があった。血で汚れた傷の奥に、肉に埋まった弾丸が黒く見えていた。それ以外にも、赤紫色に腫れあがった打撲の痕や皮膚の裂けたような傷がいたるところにあった。

学問僧は、焼いて消毒したナイフで、弾丸を抉(えぐ)りだした。その態度は冷静で、ナイフを肉にこじ入れるのに一切の躊躇(ちゅうちょ)がなかった。少年の肉は新たな血をあふれさせた。

ソフィーティアはこの教会で掻き集められるかぎりの布切れと井戸から汲んできた水を手元に置いて、学問僧を介助した。ナイフが肉を抉るとき、少年の体が痙攣(けいれん)し、かすかにうめき声の洩れるのが、かえってほっとするものに感じられた。それは少年に生命の息吹のある証だった。

手術が終わると、ときどき布を取りかえて傷口を清潔に保つようにと言い置いて、学問僧は礼拝堂を出ていった。

ソフィーティアは湯を沸(わ)かして、血に汚れた傷口の周囲の肌を、ひとつひとつ洗い、当て布を施した。少年はときおりうなされたような声を発するだけで、意識をとりもどすことはなかった。

傷口の始末が終わると、少年を仰向けに寝かせかえ、髪にこびりついたコールタールを洗い落としはじめた。乾いた黒い物質はなまなかなことではとれず、かといって少年の髪は切り落としてしまうにはあまりに美しすぎ、一本一本金色の髪を指でつまんでは、湯に浸した布でていねいに拭いとるようにした。少年の髪は見た目通りの柔らかさ細さで、強く引けばすぐにぷつりと切れてしまいそうだった。

途中で気づいて、少年の体の冷えぬよう、ソフィーティアは自分の寝室から持ってきた夜具の敷布を覆いかぶせた。いつしかステンドグラスの色合いが移ろい変わり、赤みを帯びた光が礼拝堂を満たしてい

た。蠟燭を灯した燭台を掲げて学問僧がもどってきたのは、その赤い光も薄れて窓が夜の影に覆われはじめたころだった。
「薬草を煎じました。気がついたら、飲ませておあげなさい」
と、学問僧はどろどろした液体の入った鍋を長椅子に置いた。
「ありがとうございます、司祭様」
ソフィーティアは少年の髪をさわるのを中断して立ちあがり、あらためて礼を述べた。
「司祭ではないと言いませんでしたか」
気にさわったようすではなく、慇懃にしかし毅然として学問僧は言った。
「そうでした。では、なんとお呼びしたら……?」
「ジョルダーノと言います。ジョルダーノ・ブルーノ」イタリア人学問僧は言った。「フランス、イングランド、それからこの地へと、旅をしながら考えをまとめ、本を書いているところです」
「では学者の方?」ソフィーティアも自己紹介をして訊いた。「どんな本をお書きになるんですか」
「ある意味では危険な本です」
「危険な?」
「教会の連中からはそう思われているようです」
言いながら、ジョルダーノは長椅子に腰を下ろした。ソフィーティアもならんで腰を下ろした。
「わたしも教会にはなじめなかった人間なんです。ギリシアの神々の声を聞いて育ったものですから」
「知っていますよ、ゼウスをはじめあまたのギリシアの神々の名は。多少は本を読みますからな」
「多少なんてご謙遜なんでしょう」
「いやいや、世の中には古い時代から蓄積されたたくさんの書物があって、とても読み尽くせるものではないのです。わたしが読んだ本など高が知れていますよ」
「でもゼウスの名はご存じ。わたし、そういう方に伺ってみたいことがあるんです」

「どんなことです」
「この少年と出会ったのは偶然ではないんです」
いまは静かな寝息をたてている少年の横顔を、ソフィーティアは見やった。
「ええ、鐘楼に上がってきたとき、あなたはすでになにかを、いいえ、だれかを探しておいでのようでしたね」
ジョルダーノは言った。
「え……？　そうでしたか。鐘楼に上がるまえは、そんなことは予想してもいなかったのですけれど」
「戦場を見る目が、すでにだれかを探していました」
「それならそうだったのかもしれません。神々の導きで彼に巡り会ったと、わたしは信じているんです。でも、なにかそれ以上のものを感じもするのです」
「それ以上の？」
「わたしの旅はある剣を探す旅でした」ソフィーティアは旅の経緯を語った。「その剣にオストラインスブルク城で巡り会いました。その剣を操る、というよりは操られているようでしたが、セルバンテスという男に挑んだとき、なにか途方もない闇を覗きこんだような気がしたのです。どういえばいいのか、この宇宙の……」
「宇宙の……？」
「わたしの信じる神々をもそのなかに含む、この宇宙の存在そのものに関わるような闇、とでもいうような……。ジョルダーノ様、あなたは宇宙の真理について考えていられるとか。どんな考えなのか、教えていただけませんか」
「それはずいぶん巨大な問いですね」
「話してはいただけませんか」
「わたしの説は異端に属します。めったに口にできるものではありません。でも、あなたになら話してもかまわないと思います。ただ、いったいどこから話せばいいのか。それに、あなたの質問の答えになるような話になるのかどうか」

「むずかしいお話でしょうか」

「むずかしくはありません。真理はつねにやさしいものです。ただそれが人々に理解されるには時間がかかる。ついこのあいだまで、だれもこの大地が丸いなどとは考えていませんでした。海の果てには大きな滝があって、船で進めばそこへ落ちてしまうと思っていました。マゼランという男が世界を一周してみせて、ようやく人々は大地は球形らしいと思いはじめたところなのです。しかし、そう理解されてみれば、いろいろのことがよりよく分かりはじめる。真理は単純だからです」

「世界を見る見方を変えた方がいいとお考えなのですね」

「そういう時代にさしかかっていると思います。人類はその世界観をいま大きく変えつつあるのです。といっても、ものの見方自体は、たいてい古い書物のなかに見出せるものです。たとえば、地球は球体だとの考え方も、あなたのお国のピュタゴラスという学者の一派が大昔に考えていたことです。それが、羅針盤を使った航海術の発達で、ようやく確認され、一般に受け入れられるようになったというわけです。天体についてのわたしの考えも、じつはあなたのお国の古代の学者たちが考えていたことです」

「どんな考えなのです」

ジョルダーノは一瞬躊躇して、それから囁くように言った。

「地球が太陽のまわりを回転しているという考えです」

「このわたしたちの住む大地が……?」

「わたしはこの考えを信じています。しかし、残念ながら、わたしの考えには、まだマゼランは現われていません」

「つまり、実地に確かめる方法がない?」

「いま、デンマークのティコ・ブラーエという男が、天体を詳細に観測するおもしろい研究を進めて

いるところです。彼が観測に用いる望遠鏡という道具は、わたしの説にとっての羅針盤となるでしょう。しかし、その結果がでるのは、まだ先のことです。確実な証拠のでるまでは、わたしの考え、すなわち地動説は、あまり口にすべきではないと考えています」

「異端の説だから？」

「地動説自体はさして教会から睨まれることもないでしょう。しかし、この考えは、もっと恐るべき考えを含んでいるのです。地球が数多くある天体のひとつとして、月や火星や金星とともに太陽のまわりをまわっているのだとすると、天体の世界もこの地上も、物体の運動についておなじ法則が支配していることになります。つまり、天界も地上とおなじ世界だということになる」

「神々の世界がわたしたちの世界とおなじものだと？」

「そうです。神の居場所がなくなってしまうのです。これは教会にとって許されざる考え方でしょう。神への冒瀆（ぼうとく）。神を地上へ引きずり下ろすことです。へたをすれば火刑に処せられかねない世界観です。しかし、わたしは、さらに先へ考えを押し進めています」

「どのように？」

「太陽もまた、この宇宙に数多く存在する星々のひとつにすぎないという考えです。この宇宙は無限に、しかもどこまでいっても等質に広がっていて、そのなかに太陽とおなじような星がたくさん浮かんでいるのです。その星々のなかには、地球のような惑星を持つものもあって、そこにはわれわれとおなじように知性を持った存在が住んでいる可能性がある。なにしろ宇宙はどこへいってもわれわれの住むこの場所とおなじ法則で動いているのですから、われわれとおなじような存在がほかにいても不思議ではないことになるのです。これも、人間は神のつくった特別の存在だと考える教会の世界観に真っ

向からぶつかる考えです」
ソフィーティアは目のまわるのを覚えて、ふうと息を吐いた。
「やはりむずかしかったですかな」
ジョルダーノがやさしい目で訊いた。自説を話せる相手のできたのが、うれしくもあるようすだった。
「いいえ、美しいと思っただけです。美しくて、そして、怖い……」
「そうですね。わたしたちの住むこの地球は、無限の広がりを持つ宇宙の暗闇のなかに浮かぶ豆粒のような点になってしまうのです。ぞっとするような考えです」
「無数の星々に人間ではない別の存在がいるとすると、そのなかには宇宙を旅して、この地球を発見するものもいるのでしょうか。コロンブスが新大陸を発見したように」
「宇宙を旅する手段があれば」
「この宇宙の真理をわたしたちよりも深く理解している存在もいるということでしょうか」
「そういうことになりますね。無限という考えはおもしろいもので、もしこの宇宙が無限に広がっていて、無限の数の知的な存在があるとすれば、われわれの想像しうるかぎりのどんな形の存在でもかならずどこかに存在することになるのです」
「たとえば、剣のような形をした存在でも……?」
「もちろん。剣だろうと、盾だろうと、書物だろうと、十字架だろうと、どんな形をした生命でも存在しうる、いやすでに存在していることになります。なにしろ、無限の可能性が宇宙全体としてはかならずどこかで実現されているのですから」
ソフィーティアはまた息を吐いた。
「もうすこしお話をしてもいいですかな」
ジョルダーノが訊いた。
「ええ。どうせわたしは、今夜は彼に付き添ってずっと起きているつもりですから」
「じつは、わたしは、この自説のために、火刑に処

せられる運命にあるのです」
「え……？」
「地動説にとっては、これからしばらくは闇の時代がつづきます。教会はこれを迫害し、たとえばガリレオ・ガリレイという優秀な学者もわたしと同様の運命をたどります。しかしそのあとで、地動説は広く世間に受け入れられることになっていきます」
「いま、あなたは未来のことをしゃべっていらっしゃるんですか」
「はい。時間というものもまた不思議なもので、ただ過去から未来へと順に流れるだけではないのです。未来から過去へも流れます。何百年か先の発達した物理学では、過去と未来は鏡に映ったようにまったく対称なものとして扱われるようになります」
「何百年か先の……？」
「わたしの頭のなかには、ときどきそのような未来からの信号が届くのです」
「時を越えた信号が？」
「アイザック・ニュートンという男が、それはいまからほんの百年ばかり未来の話ですが、わたしの説の延長上に、新しい物理学の体系を築きます。そこではまさに、天体は地上で林檎が木から落ちるのとまったくおなじ法則で動いていることが証明されるのです。彼は万有引力や作用反作用や物体の慣性についての法則、この宇宙の真理そのものと言っていい物体の運動法則、力の働き方を解き明かします。それを理解し、利用することで、それからさらに三百年ほどのち、人類は宇宙を旅する方法を考案するのです。その元になる原理は、われわれの時代にさかんに使われるようになった大砲です。弾丸を撃ちだすかわりに、砲身の方を宇宙へ飛ばすのです」
「よくわからないわ」
「火薬が砲身から噴きだす力を利用するということです。それはニュートンの作用反作用の法則を利用することでもあるのです。ともかくも宇宙を旅する

方法は、やがて存在するようになるのです。ですから、この宇宙のどこかにすでにそれを自家薬籠中のものにしている存在があってもまったく不思議ではないのです」

「火を噴いて飛ぶ乗物……」

「ええ、それに乗って人類は月にまで行くのですよ。そのころには、物理学はさらに大きな変化を遂げています。ひとつは光の速度にうんと近い速度で運動する物体についての物理学です。そこでは、物体が運動すると、その物の大きさや重さが変わってしまう奇妙な現象が起こります。もうひとつは、うんと小さなもの、この世を構成する最小の粒子——あなたのお国のデモクリトスという学者のつかったアトムという言葉で呼ばれるようになりますが——そのような小さいものの運動についての物理学です。そこでは、粒子の運動は確率的にしかわからないということが発見されます。そこまで宇宙の法則が理解されれば、この太陽系の外、そのころには地球と太陽の距離の百三十倍もの遠さで太陽を巡っている天体が発見されるでしょうけれども、その天体の軌道よりももっと外、他の太陽系へも飛んでいくことが可能になっていくでしょう」

「裏を返せば、他の太陽系からこの地球へやってくる存在があってもおかしくない……」

「そういうことです。宇宙の存在そのものにつながる力、そんなものを操る存在があっても不思議ではないのです。もっとお話をつづけてもいいですかな」

「ええ、でも、ちょっと水を」

ソフィーティアは立ちあがって、少年が目覚めたときのために甕に汲んであった水を口にふくんだ。少年がかすかにうなり声をもらして、身じろぎした。

ソフィーティアが長椅子にもどると、ジョルダーノはまた話しはじめた。

「実はここまでの話はまだまだ序の口なのです。われわれの子孫は、いまからたった四百年ほどのち

に、この宇宙の姿をほぼ解明するようになります。宇宙が誕生したのは、百五十億年ほど昔のことで、高密度の物質が爆発してできたものであること。いまでも宇宙は光の速度で膨張しつづけていること。そんな宇宙の姿を知るのです。それからさらに百年ほどのち、人類は星間物質を燃料にして噴射する宇宙船に乗って、はじめて太陽系の外へと出ていきます。その最初の探検隊がたどりついた星というのが……」

ソフィーティアはもうほとんど話についていくことができなくなっていた。ステンドグラスはすでに闇に閉ざされ、蠟燭の明かりだけが、大法螺吹きなのか途方もない天才なのかわからないイタリア人学問僧の顔を照らしていた。

6

フォルケルがジークを見つけたのは、包囲軍の総攻撃が失敗に終わってから五日ほどあとのことだった。

敗退後一日二日は、オストラインスブルク城の農民兵が戦場の半ばまで出張ってきていて、うっかり出歩くわけにいかなかった。戦勝に敵兵は気勢をあげており、逃げ遅れた包囲軍側の兵を狩りだそうと躍起になっていた。

いくつかの小戦闘を経て、包囲軍側は敵を押しもどし、どうにかその勢力圏を城の周辺地帯だけに縮小させた。包囲城壁と城とのあいだに、自然に兵力の空白な緩衝地帯ができ、敵はふたたび籠城態勢となった。戦況はもとの睨みあいの状態にもどった。

そうなってからようやくフォルケルは、逃走の途

中で見失ったジークを探しにでることができた。
追っ手に追われて別れ別れになった地点から探索をはじめ、ジークを乗せた馬が走っていく可能性のある地帯を探し歩いた。
探しはじめて三日目、とある村からその村を見下ろす丘へと登りかけて、丘のうえに見える教会の方から馬で坂道を下ってくるジークにばったり行き会った。
「無事だったのか、ジーク。どこにいた」
フォルケルは歓びの声をあげて、馬を寄せていった。
近づくと、ジークの顔が青ざめ、額に脂汗の浮かんでいるのがわかった。額や頬の火傷痕がまだ生々しく、馬の背の一揺れごとに、苦痛に耐える表情を見せていた。
「城へ行く」フォルケルに気づいてジークは言った。
「つきあってくれ」
「城？　オストラインスブルク城のことか。なにを血迷っている」
「剣だ。剣を手に入れなければならないのだ。こんなところでもたもたしているわけにはいかない」
「待てよ、ジーク。そんな体で——」
フォルケルが言ったとき、ジークの上体ががくりと前のめりに倒れた。馬の首にしがみつくようにしたかと思うと、そのままずるずると鞍から落ちた。
あわてて馬から下りたフォルケルが抱き起こしたときには、ジークの意識はなくなっていた。
とりあえず休ませる場所を探して、フォルケルはあたりを見まわした。
そこへ、丘の上の教会の方から、ジークの名を呼びながら、駆けおりてきたものがあった。金色の髪に青い瞳をした女だった。
「ジーク、なんてむちゃなことを……」
フォルケルに抱えられたジークを、ソフィーティアはあきれ顔で見下ろした。
ジークはふたたび教会の礼拝堂に運びこまれ、ジョ

ルダーノの手当を受けた。治りきらないのに動いたため、傷が開いてしまっていた。その手当のあいだに、ソフィーティアはフォルケルに、ジークを助けた経緯を語った。

あとで礼拝堂に行ってみると、ジークは意識をとりもどしていて、悔しげにフォルケルの顔を見た。

「まだ動くのは無理だったようだ」

「あたりまえだ」

ジョルダーノという男は、優れた学者で、医術もよく心得ているという話だから、彼がいいと言うまで、二度ときょうのようなまねはするな、とフォルケルは言った。

しばらくジークはこの教会の厄介になるほかなさそうだった。動かすことは体に負担がかかりすぎた。フォルケルはジークを残して部隊にもどった。

傷が癒えるまでのあいだ、フォルケルは何度もジークを見舞いにいった。ジークは容易に体力が回復せず、ジョルダーノからもらう薬草のせいもあって昏々と眠っていたり、たまに体調がいいと、元気をもてあまして、傷の治りの遅さに苛立ちを見せたりした。

ジョルダーノはいつも自室に籠って書き物をしているらしく、ほとんど顔を見ることはなかったが、ソフィーティアはジークの面倒を見ながら、教会の厨房仕事や庭仕事を手伝っていて、フォルケルが行くとかならず顔を見せた。ジークの古い友人であるフォルケルに親しみを覚え、また興味も覚えているというふうだった。

ある日、ソフィーティアが、野へ出ないかとフォルケルを誘った。ジョルダーノの指示で、ジークのために薬草を摘みにいくのだという。フォルケルはソフィーティアとともに、教会の裏手に広がる草地へ分け入った。見分け方を教わって、フォルケルも薬草を探した。

「ジークのことをすこし話してくれませんか」

休憩をとって、草地に腰を下ろしたとき、ソフィー

ティアがそう言った。

かまわないが、どうしてそんなことに興味があるのか、とフォルケルは訊いた。ジークを追っ手から匿った動機も、考えてみればよくわからなかった。

「あの少年は剣を探しているでしょう」ソフィーティアは言った。「ソウルエッジという剣」

ソフィーティアもその剣を探して旅してきたのだという。剣はオストラインスブルク城の客セルバンテスの手にある。自分とジークとはともに剣に引き寄せられるようにして、ここで出会ったのだと、ソフィーティアは語った。

「旅の途中、何度もジークの幻影を見ました」

幻影の少年はいつも闇のなかで迷い子のように泣き叫んでいた。

「彼の心のなかにある闇、それが気になるのです」

フォルケルはパンをちぎってほおばった。今朝ソフィーティアが焼いて、おやつにと持ってきたものだった。しっとりしてやさしい甘みのあるパンだった。自分が話すまでもなく、ソフィーティアはジークのことを心の奥底までよく知っているかのようだと、フォルケルは感じた。

「ジークは父を殺したのです」

フォルケルは言った。

「ああ、そんなことがあったのですか」ソフィーティアはあまり驚いたふうではなかった。「うなされるのは、体の傷のせいばかりではないと思っていました」

「長い話になります。起こったできごとと、ジークの心のなかの物語と、両方を話さなければなりません」

フォルケルはフレデリック殺しの経緯を語った。ジークが事実を心の底に封じこめ、存在しない父の仇を追い求めていることも語った。

パンに塗った黄金色の蜂蜜のせいで、蝶が日なたをふわふわと近づいてきて、二人の周囲を舞った。日が陰りはじめても、物語は終わらなかった。

次にソフィーティアと話す機会を得たとき、フォルケルは物語の続きを語った。
「あるいは、おれが、ジークの誤った物語をいっそう強固にするのに、一役買ってしまったのかもしれないのです」
Mの字の縫い取りのある赤いハンカチーフは、初めフレデリックのマーガレットへの愛を示すものだった。ジークにとっては父が徳の高い騎士であったことの証であり、そのかたみであった。ジークはそれを持って母を訪ね、母と和解し、父の仇を討つと誓った。
が、あるときからそのハンカチーフの意味が変わった。変わったのは、あの森のなかでの一夜を境にしてだった。
そのとき、フォルケルはジークに真実を思いださせようと試みた。追い求めている仇が、実は存在しないものであること、それどころかジーク自身であることを、ジークにつきつけようとした。そのために、問いを重ねた。仇が存在しないことをジーク自身知っているのではないか、存在しないものを求めているのではないか、と。
ジークは追いつめられた。フォルケルの問いの行き先をジークは知っていた。重ねられる問いの先にあるのは、ジーク自身が父を殺したという事実だった。それを認めることを、というよりは、言葉としてジークの、あるいはフォルケルの口から吐きだされねばならないような事態になることを、ジークは避けなければならなかった。
ジークはとっさに新しい物語をつくりだすことを余儀なくされた。仇は存在し、見つけることが可能だと言わざるをえなくなった。
「赤いハンカチーフを持っているのが父の仇だ」
その言葉が口を突いて出た。突いて出てしまったその言葉を出発点として、ジークは新たな物語を即座に織りあげていった。フレデリック殺しの場面がその物語に沿って語り直された。

フォルケルは追求の手を緩めなかった。そのとき赤いハンカチーフはジークが身につけていた。赤いハンカチーフの入った皮の小物入れを開けさせようと試みた。

ジークは拒否した。拒否すると同時に、それを身につけていることの危険を悟った。

赤いハンカチーフを身につけていることは、いまやジーク自身が父殺しの犯人であることを示す証拠となっていた。それを突きつけられれば、ジークのつくりあげた物語は一挙に瓦解（がかい）する。ジークはそれを捨てた。

ジークは無限の迷い道に踏みこんだ。赤いハンカチーフを持っている者は、この世のどこにも存在しなくなった。仇は永遠に見つからない。永遠に見つからないものを求めて、ジークは彷徨いつづけるほかはなくなった。ジーク自身が当の仇であることを思いだすよすがも、この世からなくなってしまった。

「そこまでジークを追いこんでしまったのは自分なのではないかと、おれは感じているんです」

フォルケルは言った。

フォルケルには何度かジークに真実を告げる機会があった。たとえば、フレデリックの死体を埋葬したとき、たとえば、パトリシウス司祭を殺したとき、フォルケルはそれを口にしようとした。

パトリシウス司祭殺しは、狂気の領土へとジークが川を渡った瞬間であり、そのときならまだ呼びもどすことができたのかもしれない。あるいは、それより以前に川は渡られていて、フレデリックの埋葬のときが最後の機会だったのかもしれない。いずれにしても、フォルケルは機会を逸した。

ジークの傷つきやすい魂を知っていればこそのことだったが、フォルケルには悔やむ気持ちがあった。自分以外にそれができるものはいないのだから、たとえジークに、肉にめりこんだ弾丸を抉りだすような痛みを与えてでも、自分がそれを成すべき

だったかとの思いがあった。
「いまとなっては、弾丸は心臓の奥にまでめりこんでいて、それを抉りだすことはジーク自身を殺すことになってしまうのかもしれません」
フォルケルは苦悶の表情で言った。
「では、いつだったら、ジークを呼びもどすことができたのでしょう」
ソフィーティアが言った。
フォルケルは不意討ちを食らったような気がした。そのソフィーティアの問いへの答えは見当たらなかった。埋葬のときに口にできなかったことが、フレデリック殺しの直後なら言えたのだろうか。言ったとして、ジークを呼びもどすことができたのだろうか。否。あのときすでに、ジークは狂気へと突っ走りはじめていた。では、フレデリック殺し自体を止める以外に、ジークを救う道はなかったことになるのか。
「フレデリック殺し自体を止めることも、おそらくできなかったでしょう」ソフィーティアは言った。
「ジークは事故で誤って父を殺したのだと、あなたはおっしゃったけれど、ほんとうにそうだったのでしょうか」
「え……？」
フォルケルは眉を寄せてソフィーティアの顔を覗きこんだ。
「わたしの国に、ひとつの悲しい神話物語が伝えられています」ソフィーティアはつづけた。「テーバイという国の王ライオスに赤ん坊が生まれたとき、その赤ん坊が長じて父を殺し母を犯すであろうとの予言が行なわれました。ライオスは予言を信じ、生まれたばかりの赤ん坊を荒れ地に捨てました。赤ん坊は牧人に拾われ、コリントス王の息子オイディプスとして育ちました。ある日、自分についての予言を知ったオイディプスは、実の父と信じているコリントス王を殺すのを避けるため旅に出ました。それがあだとなりました。オイディプスは旅先で偶然

ライオスに行き会い、揉めごとを起こし、ついに父と知らないまま殺してしまいました。その後、テーバイの国にスフィンクスが現われ、人々を襲ったため、王女イオカステが、スフィンクスを退治したものに王の地位を与えると触れを出しました。オイディプスはスフィンクスの出す謎を解いてこれを退治し、約束通り王の地位につき、イオカステを妻にしました。そのイオカステこそが実の母であることも知らずに。それからあと、テーバイの国に災いが続きました。やがてその災いの原因が自分の犯した罪の汚れにあることを知り、調べた挙句真実を見出して、オイディプスは自ら両目を突き、闇の世界を放浪する運命に身を投じました。イオカステも真実に気づき、自殺を遂げました」

「何が言いたいのです。その物語がジークの運命を暗示しているとでも？」

「そのオイディプスの物語を」ソフィーティアはフォルケルの問いには直接答えず話しつづけた。「ジョルダーノ様から伺った話ですが、いまから数百年ほどの後、この神聖ローマ帝国の末裔たちの地に現われるシグムント・フロイトという学者が、すべての人の心の内にある物語として読み変えることになります。男の子はみな、赤ん坊のころに母に恋をし、父をその母との関係を邪魔する敵対者とみなし、それを除きたいと考えるというのです。フロイトは人間の心の奥底に、無意識という広大な世界のあるのを発見します。無意識の世界では、だれしもが父を殺し、母と交わりたいとの欲望を抱いているというのです」

「まさか、ジークが父を殺したがっていたと……？」

「無意識にそのような欲望を持っていたかもしれないということです。ジークが父を殺したのは、かならずしも偶然の事故だったわけではないのだと思いますよ」

「ばかな。あれは偶然の事故でした。おれはその場にいたのです」

「もちろん、そうでしょう。でも、人間の犯す過ちには、往々にして無意識の欲望が反映されているものなのです。あなたの話によれば、その騎士団を襲うとき、ジークはそれが遠征帰りの騎士団であることを知っていたのでしょう。遠征帰りの騎士団に父親のいる可能性のあることに、ジークが思い至らないはずはありません。それでもあえてジークはその騎士団を襲ったのです。そこに父のいることを、もちろんジークは知っていたわけではなかってでしょう。しかし、心のどこかで、たとえ父がいたとしてもかまわないという気持ちがあったのですよ。かまわない、襲う以上は皆殺しにしてしまえ、と。ジークは母を見捨てた父を恨んでいたのでしょう？　父は、ジークと母との幸せな結びつきを壊す存在だったのですよ」

「フレデリック殺し以前のジークは、たしかにいつもそのように言っていたが……」

「それに、偶然というものも、たいていは単なる偶然ですますことのできない意味をふくんでいるものなのです。わたしは父殺しの罪を犯したオイディプスという男の伝説のある国からやってきて、父殺しから狂気へ走ったジークに出会いました。そのジークの住む森に覆われた土地で、数百年の未来、人間の無意識が抱く父殺しの欲望というものが発見されるのです。これはただの偶然でしょうか」

フォルケルはなにも答えられず黙っていた。この世界の思いがけず奥深い不思議さに、肌の冷えるような気持ちがした。

「こんな話であなたの気が楽になるとは思いません」ソフィーティアは言った。「けれども、ジークを狂気の淵へと突き進めてしまったのは、かならずしもあなたのせいばかりではないのです」

「で、ジークにはこの先もう救いはないのでしょうか。オイディプスのように、光を失って世界を彷徨いつづけることだけが、ジークの運命なのでしょうか」

「いいえ、まだ希望は失われたわけではないと思います」

ソフィーティアは落ちついた調子でそのように言った。

7

膠着状態が数か月つづいた。

ある日、ヘッセンハウト城のアンドレ侯の居室に闖入者（ちんにゅうしゃ）があった。

夜である。アンドレ侯は寝台に横たわり、局面の打開法を思案していた。

包囲軍は退くに退けず、かといってオストラインスブルク城の守りはいよいよ堅固だった。兵糧攻めに対して、敵は変幻自在に抜け道を見つけた。包囲城壁は長すぎ、関わる人数が多すぎたため、その抜け道をつぶしきることができなかった。モンス・メグを扱う砲兵の訓練はつづけられ、熟練度はあがっていたが、城攻めの決め手とするには、なお頼りなかった。

思案するうち忍び寄ってきた眠気に、アンドレ侯は抵抗することなく身をゆだねた。眠りの淵に沈もうとしたとき、部屋の空気の動く気配に、はっとして目を開いた。闇のなかを、赤いものがさっと横切るのが目に入った。

と思った瞬間、喉に刃物が当てられていた。身動きができなくなった。目だけ動かして横を見ると、自分の顔のすぐ横に、人間の頭部がぬっと突きでていた。鋭い切れ長の目だけが見えた。女の目のようだった。目以外は赤い頭布に覆われていた。

目は声を出すなと言っていた。喉の刃物が肌に強く押し当てられた。自らの動きで肌に刃物がもぐりこんでしまわないように用心しながら、アンドレ侯はごくちいさくうなずいた。

賊は刃物にこめた力をわずかにゆるめ、しかしな

おいつでも喉を掻き切れるように構えながら、もう一方の手でアンドレ侯の目のまえに巻き物をさしだした。

はらりと巻き物が開いた。

そこに墨一色で描かれた図面の意味にアンドレ侯が気づくのに数呼吸の暇がかかった。アンドレ侯の目がしだいに大きく見開かれた。

全体が星型をした図面はオストラインスブルク城の改築後の平面図だった。各所の城壁の厚さ、城内の人数の配置、大砲の据えつけ状況から天守にある秘密の出入口まで、こと細かに描きこまれていた。

「なにが望みだ。金か」

アンドレ侯は言いながら、部屋の片隅にある戸棚を指さした。

賊はアンドレ侯を立たせ、喉に刃物を当てたまま、戸棚まで歩かせた。アンドレ侯は扉を開き、ずしりと重い皮袋を賊に渡した。

とたん、賊はアンドレ侯を突き飛ばし、一飛びで窓から室外へと飛びだして姿を消した。身にぴたりとあった全身赤い衣裳に包まれた長身の体が、一瞬のうちに窓外に消えるのをアンドレ侯は見て、すぐに飛び起きて窓から身を乗りだした。

窓は天守の上層部にあった。賊は垂直の城壁を伝い下りて、すでにその最下部に達しており、すぐに闇にまぎれて見えなくなった。

部屋には巻き物が残されていた。アンドレ侯はあらためて図面を検討した。オストラインスブルク城の弱点が浮きあがるように見えてきた。

三日後、再度の総攻撃が開始された。

包囲軍の部隊の配置が、前回とはがらりと変わっていた。

ソフィーティアは鐘楼に上って、そのようすを見た。

モンス・メグが三門とも一か所に集められ、歩兵、鉄砲隊、騎馬兵もその周囲に分厚く配置されて



いた。城の一角を集中的に攻撃しようという態勢だった。
　オストラインスブルク城側はそれに応じて城内の武器人員の配置を整え直そうと試みていたが、城壁上の兵士たちが前回にくらべるとあきらかにあわてふためいているのが見てとれた。
　ソフィーティアは鐘楼を下りた。
　礼拝堂にジョルダーノ・ブルーノの姿があった。どこか晴ればれとした顔をしていた。
「戦いのようすはいかがですかな」
　ジョルダーノは訊いた。
「こんどは城が落ちると思います。包囲軍が守備軍の状況を見抜ききった配備を敷いていますから。あなたの方はいかがですか」
「ずっと書きつづけていたラテン語の著述があと一章で書き終わるところまできました。書くべきことはもうほとんど書き尽くしました。あとは結論を与えるだけです。先が見えてほっとしたところです」
「それはすばらしい。拝読したいけれど、時間がありません。題名だけでも教えていただけます?」
「〈無限、宇宙、および諸世界について〉というものです。ナポリへ帰って最後の一章を書き、この世界の謎をすべて解き終えたら、印刷させようと思っています」
　祝いの言葉を述べながら、ソフィーティアはこの思想家が異端の罪で火刑に処せられる姿を思い浮かべた。
　ジョルダーノと別れの言葉を交わして庭へ出て、ソフィーティアは井戸で水を飲んだ。
　井戸端にきれいに洗われた器がひとつ放置されていた。ジークがここにいるあいだ、煎じた薬草を飲ますのに使った器だった。ジークが部隊に帰ってすでに久しい。
　礼拝堂とは別棟の自室へ入り、ソフィーティアは鎧兜を身につけた。胴丸、籠手、脛当てと順に装着しながら、最初にそれをまとわせてくれたメリボイ

アのことを思いだした。
　遠くへきた、と思った。その遠くは地理的な距離ばかりのことではなかった。
　すべてを着け終え、剣と盾を携えると、ソフィーティアは馬でオストラインスブルク城へ向かった。

8

　ジークがトンネルから這いだしたとたん、大地を震わせる砲声が轟きわたった。モンス・メグだった。ジークは顔をしかめ、焦燥の表情を浮かべた。
　砲撃部隊は東側から城に迫っていた。三門の怪物めいた巨大攻城砲の姿を彼方の丘のうえに認めることができた。二門はまだ準備が整わないようだったが、ともかくも一門だけは無事に砲弾を射ちだすことに成功したようだった。
　ジークたちの部隊は城の南側にいた。射てるかどうか博打のような攻城砲をあてにせず、ひそかに攻城用のトンネルを掘りすすめ、それがぎりぎりこの総攻撃に間にあって完成に漕ぎつけたところだった。
　ジークはソウルエッジを手に入れるために、城に一番乗りをしたかった。モンス・メグの攻撃が先に奏効して城壁が破られてしまえば、トンネル部隊は遅れをとる結果となる。
　砲声はジークを焦(あせ)らせた。
「火を放て。いまだ！」
　ジークが号令を発した。
「おい、待て。まだなかにひとがいる」
　フォルケルがあわててジークの腕を引いた。
　トンネルは地下を数百メートル掘り進んで、オストラインスブルク城の城壁の真下まで達していた。長々と穿たれた空洞は木材を組んだ柱と天井で支えられていた。火を放てば支えの木材が燃え、一挙に地盤が崩れ、同時に城壁が崩壊する仕掛けだった。

着火のために導火線となる火薬が入口から最奥部まで幾筋も撒かれていた。
しかしその最奥部では、落盤の効果を確実なものにするために、さらに数メートル、トンネルを掘り進める作業が行なわれていた。
「かまわん。やれ」
ジークは言った。
二発目の砲声が轟いた。遠い丘のうえのモンス・メグの砲口から噴きだした火が、ジークの青い瞳に映った。
「よせ、ジーク。苦労をともにしてきた仲間が死ぬぞ」
「戦闘で犠牲がでるのは当然だ。火を放て」
ジークの言葉に、しかしさすがに周囲の兵たちは動かなかった。躊躇していた。
それを見て、ジークは自らトンネルの入口へ飛びこんだ。しゃがんで火打ち石を打ちあわせた。
フォルケルが飛びかかって、ジークの肩をつかんで引き倒したときには遅かった。火薬の火が爆ぜながら、猟犬に追われる兎のような速さでトンネルの奥へと燃えていった。
「逃げろ！」
奥へ叫んで、フォルケルはジークとともにトンネルの外へ逃れでた。
ほどなく朦々たる黒煙がトンネルの入口から噴きだしはじめた。作業兵の幾人かが咳きこみながら逃げだしてきたが、大半はそのまま姿を見せなかった。
不意に、城壁の真下の地面が、透明な巨人の足で踏みつけられたように、ぼこりと陥没した。ついで城壁が高さを減じたかと思うと、裾の方から砂煙をたてながらゆっくりと崩壊しはじめた。
「突っ込め！」
ジークが走りはじめた。
城壁は破壊されはしたものの、その破れ目は所期の規模に達していなかった。崩れ残った左右の城壁

のうえから、敵の鉄砲隊、弓隊が必死の応戦を開始した。先を走る味方の兵がばたばたと倒れた。それでも、

「止まるな！　進め！　みな死ね！」

ジークは兵を追いたてつづけた。

オストラインスブルク城の天守の上から、セルバンテスは満足げに戦況を眺めていた。

トンネル部隊によって破壊された城壁の破れ目は狭く、敵方の兵は大人数で一挙に城内へなだれこむことができなかった。小人数で突っ込んできては一人また一人と城内からの狙い撃ちに遭っていた。文字通りの死体の山が築かれていった。

それでも死体の背を乗り越え乗り越え、敵兵はしだいに城内に入りこんできた。彼らが立ち止まることを知らないのは、うしろに控えるジークの感化力のせいだった。ジークの心の闇がその死体の山をつくりだしていると言ってよかった。

ついに、味方の死体を踏みつつ、ジークが城内に入ってきた。戦闘は白兵戦に突入した。ジークは長大な剣を振りまわして、寄りくる敵を片端から血祭にあげた。腕が飛び、首が跳ね、少年の鎧はたちまち返り血で真紅に染まった。

それは一個の殺人機械だった。人を斬ることにのめりこみ、他のことに興味のいかなくなっている表情が読みとれた。憑きものに憑かれたような目をしていた。腕の動きは自動化し、ただひたすらに斬りつづけていた。

「もっと殺せ。殺しまくれ」セルバンテスはつぶやいていた。「殺しつづければやがて殺戮の歓びが全身に湧きあがってくる」

ジークの部隊が血路を切り開いたあとへ、後続の部隊が入城してきたころ、モンス・メグが東側の城壁を撃ち崩した。ひとたび命中すると、さすがにその破壊力はすさまじかった。

土煙の晴れたあとに、ぽっかりと開いた城壁の開

口部ができあがっていた。そこへアンドレ侯の部隊が一斉に乱入してきた。
「城壁が破られたぞ、セルバンテス殿」
守備隊を激励しに下りていたステファンが青い顔で天守にあがってきた。
「モンス・メグの砲弾が命中すれば、どんな城壁だとて破られる」
セルバンテスは微塵も動じないようすで言った。
「敵には砲弾が不足しているはずと、あなたは言っていなかったか」
「最初のうちはな。時間が経てば不足は埋められるもの」
「なんと！　では、このたびは城壁が破られるのを先刻承知だったというのか」
「どんな堅固な城でも、いつかは落ちる。死を免れる人間がいないように。問題はそれが早いか遅いかだけだ」
「きょう城が落ちるのは、早すぎはしないと言うのか」
「城は十分に保った。目的は果たされた」
「目的だと。何の目的だ。この城を守ることが目的ではなかったのか」
「そんなことを言った覚えはない。わたしの目的は別にあった。もうこの城に用はなくなった」
「では、何だったのだ、おまえの目的は？」
セルバンテスは冷酷な目でステファンを一瞥し、悠然と背中を向けた。その体にまといつく冷え冷えとした空気に、ステファンはそれ以上声をかけられなかった。

死体の折り重なる惨状に目を覆いつつ、ソフィーティアは城壁の破れ目を馬で走り抜けた。左右に崩れた城壁の聳えたつ狭い通り道は異世界へ通じる大門のようだった。
城壁の内側では農民軍が抵抗をつづけ、あちこちで戦闘が行なわれていた。アンドレ侯側の騎馬兵と

見て斬りかかってくる農民兵の剣や槍を交わしながら、ソフィーティアは一散に戦場を駆け抜けた。
城壁や内堀で区切られたいくつかの中庭を通りすぎ、覚えのある中庭へ出た。塔の根元へ乗りつけると、ちょうどそこにいた鶏がばさばさと騒がしい羽音を立てて逃げまわった。馬を下り、塔のなかへ入った。
塔内の暗い階段をぐるぐる上り、最上階へ出た。セルバンテスの部屋である。
ソフィーティアは立ち尽くした。部屋は空だった。セルバンテスの身のまわりのものは何ひとつ残っていなかった。寝台はきれいに整えられていた。二本の剣もなくなっていた。
城壁上の歩哨通廊へ走りでた。通廊上にはすでに攻撃軍に撃ちかける鉄砲兵の姿はなくなっていた。城壁の内に揉みあう敵味方、城壁の外に犇(ひし)めく攻撃軍を見下ろしながら、通廊を走った。
城の天守にも戦場のどこにも、海軍提督服姿の男は見あたらなかった。
歩哨通廊を走りつづけ、モンス・メグによる崩壊箇所の手前で塔伝いに地上に降り、その向こうでまた塔から城壁のうえに上がった。さらに走った。
トンネル部隊による城壁の破れ目の、天守をはさんでちょうど真裏のあたりまできたとき、城の外、野のはるか彼方に、遠ざかっていく一頭の馬が目に止まった。
鞍上にあるのはセルバンテス。二本の剣を携えているのも目視できた。
ソフィーティアは立ちどまり、歯噛みしつつじっとその姿を睨みつけた。
オストラインスブルク城の客はほどなく深い森のなかへと馬を乗り入れ、視界から消えた。
「よせ。もう敵は戦意を喪失している」
フォルケルが声をあげた。
ジークの部隊は、農民兵の一小隊を、中庭の一隅

に追いつめたところだった。
取り囲まれて逃げ場を失い、十数人の敵兵は怯えあがり、自ら武器を投げだしていた。ありあわせの材料を利用してそれぞれが工夫してつくった、安っぽく薄汚れた胴丸や兜や籠手を身につけた男たちは、戦意を失うと同時にもとの温厚な農民の顔にもどっていた。
その一団へ、ジークが剣を上げて斬りかかろうとしたのである。フォルケルはあいだに立ちはだかってジークを制止した。
「やつらは降伏したんだ。無益な殺生を重ねるのはよせ。もう十分殺しただろう」
「十分だと。もちろんまだ十分愉(たの)しんでいないさ」
「なに？」
ジークの言葉にフォルケルは耳を疑った。
瞬間、ジークの剣が閃いた。
それが自分に向けて斬りつけられたものであることを、フォルケルは信じられなかった。反射的に体だけが動いて、頭は状況を呑みこめなかった。呑みこめないまま飛び下がり、しかし避けきれずに剣の刃を胴丸に受けた。フォルケルは仰のけにひっくり返った。
ジークは返す刀で無抵抗の農民兵たちに斬りかかっていった。水平に銀色の弧が描かれたと見るや、いちばん端にいた農民兵の首が空中高く飛んだ。他の農民兵たちは驚き恐れて身動きできなかった。また銀色の光が閃き、次にいた農民兵の腕がぼとりと地面に落ちた。まだ立っている農民兵の肩口から激しく血がしぶいて、隣の農民兵の顔を真っ赤に染めた。ようやく残った小隊が逃げはじめた。ジークの剣は逃げる男たちの背中を刺し貫き、首や腕を跳ね飛ばした。
剣を振るうジークの唇の端に暗い嗤(わら)いの浮かんでいるのを、フォルケルはたしかに見た。
小隊はついに皆殺しになった。

嗤いを顔に貼りつけたまま、ジークは中庭の反対側に聳える塔を振り仰いだ。地面に広がる血の海を踏み渡って、塔の入口へ向かった。

地に倒れたまま、フォルケルはその塔を見あげた。胴丸にひび割れが生じ、割れ目の下の皮膚が血を流していた。

ジークが塔のなかへ姿を消すのと前後して、異装の武者が城壁上に現われた。武者は袖無しの上着を着て、束ねた黒髪を風になびかせ、反り身の剣を手にして、塔へ向かって歩いていた。

その武者の目のまえに、突然城壁の向こう側から、赤い衣服の女が躍りでた。ぴったりとした衣服にすらりとした長い手足を包み、覆面で顔を隠し、短い刃物を逆手に握っていた。

赤の女が武者の行く手を妨害し、いきなり二人は城壁上で剣を交えた。武者は異国の言葉で大声にわめきながら、膂力にものを言わせて剣を振りまわした。女は無言で、狭い城壁上でもたくみにバランスをとって、武者の剣をかわした。ときに武者の頭上を回転しながら飛び越えて、武者をからかっているかのようにさえ見えた。

やがて赤の女が、武者の剣を跳ね返しておいて、塔へ向かって走りはじめた。赤の女は塔に飛びこみ、あとを追って武者も飛びこんだ。

一呼吸の間もなく、赤の女が塔内からふたたび城壁上へ飛びだしてきた。追って武者がでてきた。さらにそのあとへ、ジークが姿を現わした。

赤の女は城壁の破れ目に至ると、空中で体を縦に回転させつつ、軽々とそれを飛び越し、その先の城壁のうえをしばらく走ってから、向こう側へと姿を消した。

武者は破れ目を飛び越すことができず、崩壊した城壁の瓦礫（がれき）を伝い下り、城の外へと走りでていった。

ジークは破れ目まで二人を追い、そこで立ち止まった。しばらく二人の行方を目で追っていたが、やがて塔の方へ引き返した。

塔の下の出口から出てくると、剣を掲げて城の天守の方へと進みはじめた。

9

ソフィーティアは城壁のうえを歩いて、セルバンテスの塔の方へ引き返そうとしていた。

天守のあちこちから火の手があがっていた。塔のいくつかも窓から炎と煙を噴きだしていた。包囲軍はこの城を徹底的に破壊しつくし、二度と反乱の拠点とならないようにするつもりのようだった。

途中、足元に城の最内陣を見下ろして、ソフィーティアは足を止めた。無数の棺が宙を舞っているのが見えたような気がした。木製の簡素な棺だった。それが隙間なくならんで群れ飛んでいた。

棺の向こうに海辺の小さな漁村が見えた。村の地面には生々しい血の痕が残り、なにも知らぬげな子猫が一匹、風に飛ばされる藁にじゃれていた。港町の教会の礼拝堂にあふれた死者たちは、つい前日までなにごともなく平和だった漁村の住人たちだった。草葺きの屋根のならぶ村に、邪悪な剣を振りかざして乱入した男の姿が見えた。村人たちが恐怖の声をあげて逃げまどい、次々に剣にかかって死んでいった。

実際に逃げまどっているのは、オストラインスブルク城の農民兵たちだった。邪悪な剣士は少年だった。少年は逃げまわる敵兵を斬り伏せ斬り伏せ、天守の方へ近づこうとしていた。その周囲には血まみれの死体が累々と横たわり、その数は剣の一振りごとにさらに増えつづけていた。

ソフィーティアは手近な塔へ入り、地上へ下りた。ジークを見つけると、剣を抜いてその目のまえへと立ちはだかった。

「おやめなさい、ジーク。もう城は落ちます。それ以上の殺戮は意味のないこと」

ジークは剣を止めて、剣と盾を構えた女戦士を見つめた。農民兵たちが算を乱して逃げ散っていく。一呼吸ののち、ジークが斬りかかってきた。ソフィーティアの盾が長大な剣を受けた。高々と金属音が響いた。

後退し、間合いをとって、ソフィーティアは言った。

「ジーク、落ちついて。剣を収めなさい。ここにはもうセルバンテスはいないわ。剣もありません。いくら剣を振るっても、あなたの目的のものは手に入らない」

「剣がない？　確かめたのか」

「セルバンテスが逃げ落ちていくのを見ました。彼が使っていた塔の部屋にも、もちろん剣は残されていなかった」

「おまえも、剣を探していたのか」

「剣を破壊することがわたしの使命。そのためにここまで旅してきたのです」

「破壊だと。優れた剣をなぜ破壊する」

「あれは邪悪な剣。人の血を吸い、世界に殺戮と破壊をもたらす剣なのです」

「だから破壊すると？」

「それがわたしの信じる神々の意志。あの剣は人々を惑わせ、血で血を洗う闘争へと駆りたてるのです。あなたも惑わされているひとり」

「笑わせやがる。そんなことを言うのはいったいどこの神々だ。たしかにあの剣を狙うやつらがいるらしい。さっきセルバンテスのいた塔で会った。ふたりもだ。しかし、だからなんだというのだ。あの剣は父の仇を討つのに必要なもの。おれにはそれだけのことだ。邪魔するものは容赦しない。ましてそれを破壊しようなどと考えるものは！　剣を破壊されてたまるものか」

ジークはふたたび長剣を閃かせた。白銀色に輝く円弧がいくつもいくつも連続して空中に描かれた。激しい速度で動く剣の刃によって、斬り裂かれた大気の裂け目が、そのまま一瞬固定されて光を放って

いるかのようだった。神々から下賜されたソフィーティアの盾が、白銀色の閃きを防ぎ、受け流し、跳ね返した。
ソフィーティアは一歩また一歩と後退した。うしろに養魚池があった。藻の浮いた、膝ほどの深さの水のなかに、ソフィーティアは足を踏みいれた。底は柔らかい泥で足場が悪かった。バランスを崩しそうになりながら、ソフィーティアはなお後退した。嵩にかかって、ジークも池のなかに踏みこんできた。
「あなたは気づいていないけれど」ソフィーティアは言った。「あなたはソウルエッジの邪悪な闇の影響のもとにある。ソウルエッジに呼びよせられてあなたはここへきた。だからこんなに殺戮を重ねるのです」
「ばかな。おれはおれの意志でここへきたのだ」
「その意志そのものがソウルエッジの影響のもとに形成されたものなのよ。気づいて、ジーク、あなたは悪い方へ悪い方へと進んでいる」
「ちがう。おれは父の仇を討つという自分の志のためにここにきたのだ」
「それでは訊くわ。あなたはいま、人を殺すことに歓びを感じているのじゃない？」
ジークの剣が止まった。ソフィーティアを見つめたまま、にっと唇に嗤いを浮かべた。
「歓びを感じない人間などあるものか。血のしたたる肉を食らえばだれだってうまいと思うように。その歓びがわからないのは、肉を食ったことのない人間だけだ」
足で水を跳ね飛ばして、ジークが斬りこんだ。ソフィーティアは盾ごと跳ね飛ばされて数歩後退した。
「その歓びが異常なものだということに気づいて！それこそがソウルエッジのもたらしたもの」
ソフィーティアの言葉に、もうジークは答えなかった。黙って剣を振るった。
「あなたの心のなかにある闇に気づいて」

ソフィーティアはよろめきながらさらに後退した。

「その闇をソウルエッジが求めているのよ。殺戮の歓びを餌にして。その餌にだまされないで」

　剣が盾に当たる音が、盾の悲鳴のように聞こえた。悲鳴がたてつづけに三度あがった。ついに耐えきれず、ソフィーティアの体がうしろざまに倒れこんだ。濃緑色の水が跳ね散った。

　取り落として水中に沈んだソフィーティアの剣をジークが踏みつけた。ソフィーティアは剣を拾うことができなかった。あとじさり、かろうじて身を起こして、盾を掲げた。ジークが踏みこんで盾を蹴り飛ばした。盾はソフィーティアの手を離れ、空中に飛び、池の外へ転がった。

　ジークが長剣を振りあげ、半身になって肩の上に構えた。その目のなかで赤い炎がめらめらと燃えあがっていた。天守から上がっている火の手だった。鎧は彼の剣で屠（ほふ）られた農民兵たちの血で赤く染まっていた。赤い鎧を着たジークが池の表にさかしまに映って揺れていた。その顔が一瞬髑髏に変じた。ソフィーティアはジークの剣が自分の首を跳ねるのを覚悟した。

　ジークの剣が白銀色の弧を描いた。空気の斬り裂かれる音がした。ソフィーティアは目を閉じた。剣の刃がソフィーティアの首に触れた。

「井戸の底でおれは死を覚悟していた」ジークが言った。「それを救ってもらった。一度だけお返しをしておく。だがソウルエッジを破壊させはしない。次は容赦はしない」

　ソフィーティアが目を開くと、池の水をしたたらせながら立ち去るジークのうしろ姿が見えた。首に手を触れると、皮膚が浅く切れて、血が流れだしていた。

第六章

1

街道は血の道となっていた。殺戮のあとが点々と連なって南へとつづいていた。食糧がなくなると村を襲うのだろうと、最初フォルケルは考えていたが、そうではないことがしだいにはっきりとしてきた。盗賊狩りの追っ手に追われて逃げまわっていたときとはまるで様相が異なっていた。襲われた村は老人も子どもも赤ん坊もみな情容赦なく斬り捨てられていた。犬の首が石ころのようにたくさん転がっている村もあった。四本の脚を切断された馬が地を這いずって息絶えているのも見た。皆殺しの村がいくつも隣りあって現われることもあった。食糧を求めての強殺ではあきらかになかった。北海に面した漁村で隣村のものたちから聞いた惨殺後のありさまとよく似ているとソフィーティアは言った。

フォルケルはギリシアの娘とともにその血の道をたどっていった。ジークはすでに人間ではなくなってしまったのかもしれないと、フォルケルはくりかえし嘆いた。いまはひとりとなって旅をつづけるジークの孤独を思って胸がつまった。もし最初にセルバンテスと渡りあったときにソウルエッジを破壊することに成功していれば、彼にここまでの殺戮を重ねさせることを防げたのにと、ソフィーティアも悔やんでいた。ジークの殺戮を止めたいとの二人の思いは重なりあっていた。

重なりあってはいたが、遠い国から来た娘がなぜそこまで異国の少年のことを心配するのか、フォルケルには不思議に感じられもした。ソウルエッジに惑わされた人々を救うのも神々から託された使命なのだとソフィーティアは言っていたが、ソフィーティ

アの内にはそれ以上のものがありそうに思えた。
　恋という言葉を使って、フォルケルは一度ソフィーティアの胸の内を訊いてみたことがあったが、ソフィーティアは神秘的な微笑を浮かべただけだった。ただ折りにつけ、オストラインスブルク城へ攻めこもうと獅子奮迅する少年の姿を哀しいものに感じたなどと語ることがあった。ジークの金髪はこの世のものとは思われない高貴な手触りをしていて、いじっているだけでせつない気持ちになるほどだった、おとなの男になりきらないその唇のやわらかさには驚かされたなどとも洩らした。そういう気持ちを恋というのではないかとは、フォルケルは言わずにおいた。ジークについて語るソフィーティアの赤い唇を魅惑的なものに感じながら、その顔を眺めるばかりだった。
　ジークがどこをめざして進んでいるのか、めざしている場所があるのかどうか、最初のうちわからなかった。求めているのはセルバンテスとその携えている剣であろうけれども、当のセルバンテスは落城寸前にオストラインスブルク城を落ち延びて以後、杳として行方が知れなかったし、ジークがその行方をつかんでいるとも思えなかった。やがてわかってきたのはジークが追っているのが異国の女らしいということだった。通りすぎるだけでひどく目立つ、赤い服を着た背の高いその旅の女の噂を、街道筋の町で何度も聞いたし、さらには長大な剣を持った少年がその女の行く先をしきりに訊いていったとの話も耳に入ってきた。それがオストラインスブルク城の城壁の上に現われた女であろうことをフォルケルはすぐに気づき、他にもソウルエッジを追っている者があるとジークが言っていたことをソフィーティアは思いだした。もうひとり、フォルケルが城壁上に見た異装の剣士については、旅のあいだもとんと噂を聞かず見かけることもなく、いずこへとも知れず姿をくらましたものと思われた。
　ジークの旅は赤い服の女の足まかせのようだっ

た。赤い服の女は行方不明のセルバンテスを探し歩いているというよりは、すでに決まっているある目的地にまっすぐ向かっているようだった。道は南へ向かい、フォルケルの馴れ親しんだブナやミズナラの混淆林をあとにして、大地から突きでた屏風のように立ちはだかるアルペン山脈の山中へと入っていった。針葉樹林帯を抜け、丈高い樹木が生えずエーデルヴァイスやアルペンローゼが散見される高原の冷え冷えとした空気のなかを進んでいって、フォルケルとソフィーティアはまた、雪と氷に覆われて白く輝く急峻な山の麓に、多数の羊の群れとその羊をのんきに遊ばせていただろう羊飼いの、血にまみれた無残な惨殺死体を見なければならなかった。

気温の急速な低下や激変する天気に難儀しながら山脈を越えると、急に太陽の光が明るく空の青さが濃くなった。アドリア海から渡ってくる風を感じて、故郷の風に似た匂いがすると、ソフィーティアはほっと息をつくようなようすを見せた。旅はヴェネチアからジェノア、そしてローマ教皇領へと入った。ところどころに現われていた古代ローマの石畳の街道はローマが近づくにつれてひとつながりに長くつづくようになり、街道沿いの町々は石造りのりっぱな水道や水浴場や公共の施設を有し、そこがヨーロッパ文明の発祥地にしていまもなお一方の中心地であることを顕示していた。

ローマ教皇領を過ぎ、ナポリ王国へ入ると、フォルケルとソフィーティアは自分たちがジークとの距離をかなり縮めていることを知った。出発のときには二人の受けた傷のある程度癒えるのを待って十日近くジークに遅れていたのが、いつのまにかほんの一日二日の行程の差になっているようだった。ジークは海岸沿いに南へ下りつづけた。そこが大きな半島で、突端まで行きつけば地中海に行く手を阻まれて行き止まりとなることから、赤い服の女の目的地はもう近いのではないかと考えられたが、

案の定だった。とある海辺の村で船ごと漁師を雇ってジークが海へ出たことがわかった。そのときにはもうジークとのあいだにほんの数刻の差しかなく、フォルケルとソフィーティアも急ぎ船を雇い海へと乗りだした。

村人から聞いたところでは、船を雇うのは父の仇を討ちにいくためだとジークは口走っていたらしかった。その仇の名は何というのだとある村人が退屈しのぎに尋ねると、ジークはただちに答えたということだったが、フォルケルとソフィーティアの雇った漁師が船を操りながら教えてくれたところによれば、ジークが口にした仇の名というのがセルバンテス、その名だったという。フォルケルは目を剝いた。

長い旅のあいだに、ジークはまたひとつ新たな物語をつくりだしたのだった。道連れもなくたったひとりの道中、自分自身とのみ語りあいつづけて、その物語はただただ深く強固に築きあげられていったことだろう。仇は強大なものであって、容易に倒すことのできないものでなければならなかった。それをジークは求めていた。あらかじめジークのなかにつくられていたその強大な仇のイメージがセルバンテスへと投影され、投影されることによって強大で打倒不可能なそのイメージがいよいよ拡大し強化されていったのだろう。その限りなく強大な仇自身から剣を奪いとって仇を倒すこと、それがジークのこの旅の目的となったのだ。フォルケルは海の風を冷たいものに感じた。ソフィーティアは黙ったまま、金色の髪をなびかせながら、青い波を見つめつづけていた。

急がねばならなかった。ジークがひとりでいる時間が長くなればなるだけジークは歪んだ物語のなかへ深くのめりこんでいく。現実との接点を失い、狂気の淵へと沈んでいく。呼びもどすことがまだ可能なのかどうか、フォルケルは疑いの方を強く感じたが、ともかくも一刻も早くジークと接触しなけ

ればならなかった。オストラインスブルク城の戦いを境にジークの異常さは加速度的に増大していた。セルバンテスの仕掛けた罠にはまったのだというのがソフィーティアの解釈だった。その罠の中心、セルバンテス自身に向かってジークはひたすらに突き進んでいた。セルバンテスと接触するまえにジークを止めなければならなかった。かすかながら望みは残されているように思われた。オストラインスブルク城でソフィーティアに向かって振り下ろした剣を直前で止めたのは、まだ人間的な心の一片がジークの内に残されている証なのではないかとフォルケルには感じられた。セルバンテスがどこにいて最後の仕上げになにを仕掛けようとたくらんでいるのか、それがわからないのが不安を煽った。

ジークの目指した先を、フォルケルたちの雇った漁師は知っていた。金をはずんで急ぎに急がせると、やがて海原の彼方に小さくジークの乗った船が見えてきた。船は波の間に間に黒く見えている小さな島へと向かっていた。その島は、漁師の言うには、険しい岩礁にぐるりを囲まれて海流が複雑にうねりくねり、馴れた漁師ですら身の危険を感じて近づこうとしない無人島で、しかも黒い噂がつきまとっていた。ベルチーという名の商人が世界を駆けまわって集めた財宝の数々がその島に隠されており、その財宝庫を人々はマネーピットという名で噂していたが、これを狙って島にあがろうとするものが当然のようにときおりあって、しかし、島には凶悪な罠が随所に仕掛けられているうえに、得体の知れない番人、噂をする人々はなぜかその名をヴォルドと知っていたが、そういう名の番人がいて侵入者に襲いかかるせいで、生きて帰ったものはひとりもいないというのだった。生きて帰ったものがいないのにどうして島のようすがそこまでわかるのか不思議といえば不思議だったが、この種の噂が少なくとも真実のかけらを含んでいる場合の多いことをフォルケルは承知していた。

漁師は島に近づくにつれ落ちつきを失っていった。いまは潮が引き、黒々と水に濡れた海底の岩がそこここに姿を現わしていた。漁師によれば、上げ潮になると岩々のあいだの迷路のような水路を海水が島へ向かってどっと流れ、うっかり近づけば船が引きこまれ岩に激突するということだった。それらの岩々を縫って進むのは見るからに危険で、もうこのあたりで勘弁してくれ、あとは泳いででもいってくれと漁師は何度も哀願した。それを脅したりすかしたりしてフォルケルは船を進ませた。

と、向こうから一艘の船の流れてくるのが見えた。ジークに雇われた船だと漁師はすぐに判別し、初め人が乗っていないように見えたが、近づくと船のなかに人の倒れているのが見えた。死体だった。ジークが雇った漁師の、首の失われた死体が船底に横たわり、その周囲が血に赤く染まっていて、フォルケルの船の漁師は悲鳴をあげ、泣きはじめ、断固としてこれより先へは進まないと宣言した。ここで降りてくれ、あんたたちがどうなろうと知ったことではない、おれは引き返すと漁師は泣きわめいた。

フォルケルとソフィーティアは漁師を帰すことにして、流れてきた船に乗り移った。惨殺された漁師の死体は海へ流した。それから、血塗られた船を漕いで島の方へと進みはじめた。

2

殺してやった。

あの漁師、ふざけたことを言いやがるから。約束の倍もふっかけるとは恐れ入る。人の足元を見やがって。帰りの船がないだろうなどという脅しで言いなりになるとでも思ったのか。ばかなやつ、おかげで命を落とした。慾をかくもんじゃない。

島の周囲は垂直に切り立つ高い崖で囲まれていた。ジークはちょうど海面の高さにある岩棚に乗って、

崖にへばりつくようにして横這いに進んでいった。
しばらく行くと頭の高さぐらいに崖にぽっかりと横穴が開いていた。そこへ入る以外に島にあがる方法はなさそうだった。
横穴の縁に手をかけて岩棚を蹴った。頭から横穴へ転げこんだ。
横穴は這ってようやく進める程度の広さで、水平に奥へとつづいており、なかは暗くて果ては見えなかった。
這い進むと闇がジークを覆った。手さぐりで進みつづけた。腰に吊るした剣ががらがらと岩をこすった。
あの赤い服の女、あいつもここへ入ったのだろうな。あれは異様にすばしこいやつだった。
頭のうえをびゅんびゅん飛び越えられたのには腹が立った。ばかにしてやがる。山越えの途中で襲ったのが、失敗だったな。空気が薄くて息切れがした。あいつは平然としてやがった。なにか特別の肉体訓練をしているやつなのか。だいたいどこの国の人間なのだ。得体の知れないやつ。
あの女の持っていた皮表紙の手帳、あれがなにかの手がかりなのにちがいない。ソウルエッジに関するものだろう。奪いそこなったが、まあいい。女の行方は見失わず、こうしてここへたどりついた。この島があの女の目的地。手帳を奪っていたとしても、そこに書かれたことを手がかりに、結局おれはここへやってくることになったのだろう。
ここになにかがある。ソウルエッジを持って逃げたセルバンテスにつながるなにかが。セルバンテスがどこへ消えたかわからない以上は、この手がかりをたぐってみるしかしようがないのだ。それにしても狭い洞窟だ。出口はあるのだろうな。
横穴が急に前のめりの下りにさしかかった。がくりと折れるような感じの急な下り勾配だった。岩がぬるぬるして、滑り落ちていくのに抵抗するのにジークは必死になった。

やがて足元の岩は水平にもどった。かなりの距離を下っていた。海面より低い位置に来ているように思われた。音の反響の感じから、やや広い空間に出たことがわかった。

剣帯の物入れを探り、蠟燭を出して火を灯した。照らしだされたのは、岩壁に囲まれた数頭分の厩ほどの広さの四角い空間だった。岩壁はどこもじめじめと湿っていた。

一方の壁にいま出てきた穴があった。他の三方の壁には立って歩み入れるほどの横穴が開いていた。

ばかにしてやがる。どの穴に入るか選べというのか。

ジークは正面の穴に入った。足元の滑るのに往生しながら、奥へ進んだ。しばらく行くとまた四角い岩室に出た。

先刻と同様の広さで、同様に四方への横穴があった。まっすぐに通り抜け、正面の穴へ入った。

同じほどの距離を進むと、また四角い空間があった。ようすはまったく同じだった。さらにいくつかの室（むろ）を抜けて、ジークは立ちどまった。

いくつの室を通ってきたか、わからなくなっていた。苛立って進む方角を変えた。そちらへ進んでも同様の室がくりかえし現われた。やがて正面が壁で三方にしか出口のない空間に出た。また方向を変えた。

あきらかに意図的につくられた迷路だった。ジークは迷子になっていた。

闇のなかから、蠟燭の明かりに照らしだされて、不意に浮かびあがった不気味な物体があった。灰色の球状をしていて、黒々とした丸い穴がふたつならんであいていた。

髑髏だった。

どちらが島の中心方向か見当もつかなくなっていた。どれほどの時間を彷徨ったのかもわからなくなっていた。蠟燭はすでに三本目になっていた。

うんざりするほどくりかえし同じ形の岩室が現われた。どの室もどの室もぬらぬらと湿った壁と天井と床に囲まれていた。

そのような室のひとつに、白骨死体が落ちていたのだ。手足の骨は見あたらず、頭蓋骨と肋骨の一部だけが残されていた。

この迷路から出られなくなって、死んだ人間にちがいなかった。

それからさらにしばらく迷路を彷徨って、突然、城の大広間ほどの空間にでた。天井も他の室より高くなっていた。

その広さと景色の変化に一瞬ほっとするものを覚えたが、すぐにそこもただ広いだけで構造は他の岩室となにも変わらない場所であり、おまけに墓場と言ってよい場所であることがわかった。

床に五、六人分の白骨が散らばっていた。天井に近い高さの岩壁に、皮製の拘束具で縛りつけられたまま白骨となっている死体もあった。

さらに蠟燭を掲げて観察すると、天井の岩から槍の穂先のように鋭く尖らせた鉄の棒がびっしりとならんで突きだしているのがわかった。そのいくつかには黒茶色く血の痕がこびりついていた。

一見、侵入者を殺すための吊り天井かと見えた。が、天井の岩は四周の岩壁に切れ目なくつながる天然のままの岩で、槍ぶすまが下がってくる気づかいはまったくなかった。槍の一本ずつがいきなり落下してくるというようすもなかった。

では床が迫り上がるのかというと、それもありえなかった。岩室は天然の岩をそのまま刳り貫いた空洞で、天井にも床にも何の仕掛けもなかった。

となると、天井から突きだした鉄の牙の意味はまるでわからなくなる。

ジークはふたたび、出口を求めて、横穴と小室が縦横に連なる迷路へ入っていった。

フォルケルとソフィーティアは海に面した崖に穿(うが)

たれた横穴に這いこもうとしていた。
岩々のあいだを苦労して漕ぎ抜けてきたところだった。岩に挟まれた隘路(あいろ)では海水の流れが速く気まぐれで、船は押されたり引かれたりをくりかえした。
ついには岩に激突して大破した。そのあとは波に洗われる岩にしがみつき、岩から岩へと泳ぎ渡り、ようやく島へと取りつくことができた。
崖に打ち寄せる波の高さすれすれに開いた横穴に、まずフォルケルが、ついでソフィーティアが這いこんだ。
水平に奥へと進んでいたフォルケルが、あっと声をあげた。そこから横穴は急な下りになっていた。フォルケルはほとんど滑り落ちるように横穴の勾配を下った。
蠟燭を灯すと厩ほどの広さの空間。追いかけてソフィーティアが横穴から滑りでてきた。
三方の壁に開いている、立って入れる横穴を、二人して見つめた。恐るべき迷宮の入口だった。
フォルケルが意を決して、正面の横穴に入っていこうとすると、
「待って」
ソフィーティアが止めた。
フォルケルが立ち止まると、ソフィーティアは腰にまとったスカートの裾をつまみ、剣で切れ目を入れた。糸の端が現われると指先でつまみ、それをたぐってスカートの織り糸をほどきはじめた。
「愛しいテーバイの王子テーセウスがクレーテー島のラビリントスに入れられたとき、いとも清らかな聖なる娘アリアドネーがどうしたかご存じですか」糸を引きだしつづけながらソフィーティアは言った。「わたしの国にその物語が伝えられています。アリアドネーは麻糸の玉をテーセウスに渡し、テーセウスはその糸を引き延ばしながら迷宮に入ったのです。牛人ミノタウロスを倒したあと、テーセウスは麻糸をたぐって無事迷宮から脱出しました」

語りながらソフィーティアは、糸の端をフォルケルの手首に巻きつけた。フォルケルが腕を動かすとスカートの裾から次々に糸が繰り出された。

「この迷宮を抜けられたら、糸を強く引いてください。あとを追います。迷ったら、糸をたどって帰ってきてください」

ソフィーティアは言った。

3

なんだ、これは。ちょろちょろ気持ちのわるい音をたてやがって。水が溜まっているのか。

足元の岩の表面に、浅く水の層ができていた。もとからじめじめした岩だったためにすぐにはそれとわからなかったが、気づくと水は踵を浸す程度の深さになっていて、ジークが足を踏みだすごとにぴしゃぴしゃと音をたてた。

迷路の低い部分へきたのかと思われたが、そうではなかった。どちらへ進んでもおなじように足元に水が溜まっていた。

その深さはごくゆっくりとだが確実に増していき、くるぶしを濡らし、足首を越え、ふくらはぎに達した。

歩くのに支障が生じはじめた。水は重く足にまといついた。緩慢な流れがあり、水はどこからか迷路のなかへ流れこんできているらしいことが知れた。

洞窟内に潮の香が強くなった。水を舐めてみると塩辛かった。

ソフィーティアは事態に気づいて悲鳴を上げた。傾斜した横穴から流れ出てきていた水が、見る見る勢いを増しつつあった。

水の流れ出てくるのを、最初は波のせいだと思っていた。波の打ち寄せるたびに横穴に海水が入り、それが流れ落ちてくるのだと思っていた。

そうではなかった。
潮が上げてきているのだ。
海面そのものが上昇しているのだった。それが崖の横穴の位置を越えたのだ。
ソフィーティアのいる岩室は海面より低い。海面が上がり、海への開口部が水中に没すれば、そこは海底と化すことになる。
「フォルケル！」
思わず声を上げながら、横穴の奥へとつながっている糸を引いた。
スカートの丈がもう最初の三分の一以下になっていた。それが糸の長さでどのぐらいを意味するのかわからなかった。
糸がぴんと張り、ぐいと引かれる手ごたえがあった。ソフィーティアは三度続けて強く糸を引いた。その意味をフォルケルが悟ってくれることを願った。
流れこむ海水の量はますます増え、瞬く間に室内の水位はソフィーティアの腰に達した。
海水はいまやごおごおと音をたてて室に流れこみ、室のなかで白く泡をたてて激しく渦巻き、横穴のなかへと流れだしつづけていた。横穴は奔流のあふれる水路となった。
斜面を流れ下る海水の躍動のせいで、岩室全体がびりびりと震動していた。
糸はかよわく水面を泳いでいた。もう糸を引くことはできなかった。濡れた糸が切れることが恐ろしかった。
水位が胸まで上昇しても、なおフォルケルはもどらなかった。迷路の出口近くに達して先が見えたところだったり、なにか気になるものを見つけたところだったりで、引き返す決断が遅れたかとソフィーティアは心配した。
ついに水位は首を越えた。海からの横穴は海中に沈んで見えなくなった。奥への横穴も上部にわずかの空間を残すだけになっていた。
ソフィーティアは顎を上げ、爪先だって耐えた。

しかし、そうしていられたのも短い間で、すぐに足は底に届かなくなった。立ち泳ぎをして息をつないだが、それにも限界があることがわかっていた。岩室の天井が頭上に迫っていた。
突然、激しく咳きこみながら、ぜいぜい息を吸う音が聞こえた。音の方を見ると、フォルケルの顔が水面に浮かんでいた。髪がべったりと額に貼りつき、鼻水や唾液に海水が混じって口のまわりがぐしゃぐしゃになっていた。
「満ち潮か。ひでえ罠だ」
「糸を引いたのがわかった?」
「わかったよ。助かった」
「よかった」
「まだだ。ここから逃げられるのかどうか、一か八かだ」
フォルケルはソフィーティアの手首をつかみ、呼吸を合わせて水中に潜った。手探りで海への横穴を見つけた。
勾配には上からの流れがあった。それに逆らって、岩壁に突っ張り、岩の出っ張りにしがみつき、がむしゃらに這い登った。
たちまち息がきつくなった。頭に血がまわらなくなった。傾斜した洞窟は無限と思えるほど長く、出口は果てしなく遠かった。

助かった。息ができる。
水面に顔を出して、ジークは水を吐き、胸いっぱいに息を吸った。先刻見た大広間ほどの空間に出ていた。あたりは闇でほとんどなにも見えなかったが、天井の高さでそれと知れた。
奇跡だった。他の室も横穴もすでに水の底だった。やみくもに迷路を泳いでここに出てきたのだった。
しかしすぐにジークは思いだした。この部屋にたくさんの白骨死体のあったことを。
あれはこの水没迷路の罠にはまって、必死にここへ泳ぎついた人間たちの死体だったのだ。生き延び

いた。

死体を天井近くに縛った拘束具は、あれは潮が満ちるまでの恐怖の時間をたっぷり味わわせて殺すための拷問装置だ。拘束された人間の腰に、胸に、首にとゆっくりと上がってくる水位の恐怖。この島の主人はとんでもないやつだ。なんという冷酷なやつ。

天井の槍ぶすまは、あれは天井が下がるのでも床が上がるのでもなく、空気を求める人間の方がそれに近づいていってしまう仕掛けだったのだ。

ここは逃げこんだ人間を救うための場所ではなく、その息の根を止めるための場所なのだ。

空気を求めて必死で水を掻いて水面に顔をだすジークの頭上に、天井の鉄槍の先端が迫った。鉄槍は隙間なく植えならべられていて、避けるすべはなかった。

闇のなかで、針のように研ぎすまされた切っ先が髪を分け、額に触れた。

脳を刺し貫かれて死ぬか、水中で窒息して死ぬか、選択しなければならなかった。

どちらが苦しいだろうか。

波に揺りあげられた瞬間、槍の先端が額の皮膚にもぐりこんだ。血が一筋、眉間から鼻梁へと流れた。鉄が骨に当たった。いったん波の谷間にジークの頭は沈んだが、次に揺りあげられれば額に深く鉄槍の刺さるのはあきらかだった。

ジークは肺いっぱいに息を溜めた。

水中へ沈んだ。水は暗く冷たかった。

暴れてやる。もがいてやる。まだ死ねるものか。こんな仕掛けをつくったこの島の主の首をかならず跳ねてやる。息のつづく限り迷路を彷徨って出口を見つけてやる。

横穴へ入った。水圧に抗して緩慢に進んだ。いくらも行かないうち胸が詰まってきた。こめかみがずきずきと脈打ち、鼓膜から後頭部へかけて激痛がぎ

んぎん唸り、眼球が破裂しそうだった。
　息を吐いた。肺に空気がなくなるまでのあいだ、すこし楽だった。吐きつくすと眩暈がした。苦しさに耐えきれずつい息を吸った。海水が鼻と口へどっと流れこんできた。あわてた。水をでたらめに掻いて、もがいた。
　が、どうにもならない。口も鼻も、目も耳も、毛穴という毛穴も、すべてが塞がれていた。水は殺意の塊のようだった。口を開けばさらに海水が有無を言わさず強引に押し入ってきた。
　死ぬのか。おれは死ぬのか。こんなところで野垂れ死ぬのか。闇の底で肉体がふやけ、崩れ去り、白骨になるのか。いやだ。冗談ではない。まだ死ねるものか。息を吸うな。水を呑むな。耐えろ。前へ進め。
　手になにかが触れた。岩から出た突起物だった。鉄のように固く、薄くて、十字型をしていた。ジークの頭に閃くものがあった。
　山中で争ったときに、あの赤い服の女がそれを使うのを見た。空中へ投げて相手の身体に突きたてる武器だった。十字の突起が肉に刺さるのだ。
　それが岩に突きたてられていた。
　あの女、迷路を進むのに、こいつを突きたてながら行ったな。帰り道を見失わないように。頭のいいやつ。
　かすかに希望を感じて必死に先へ進むと、また十字型の武器を探りあてることができた。その連なりが入口へか出口へか続いていることをジークは願った。
　不意にあたりが薄明るくなった。振り仰ぐと頭上から水中に光の差し降ろしているのが見えた。
　助かった。出口だ。
　海面にわずかに顔をだした岩のうえに、ソフィーティアはずぶ濡れの体を横たえていた。かたわらにフォルケルもへたりこんでいた。

波が打ち寄せるたびに岩に砕けてざあっと白い飛沫を噴きあげた。そのしぶきが盛大に顔や体を濡らしたが、二人とも当分それを避けるために動くつもりはないようだった。

岩の向かい側に島を取り巻く高い崖が見えていた。横穴の開口部はほぼすべて海面下に没して、上のへりが波の揺れによってときおり覗くだけだった。

太陽は頭上高くにあった。島のなかに入る道は、夕刻まで開かれることはない。

4

暗闇が怖い。

こんなばかなことがあっていいものか。夜の森の闇のなかを徘徊して暮らしてきたこのおれが闇を恐れるなどということが。人を恐れさせることはあってもおれ自身が闇を恐れたりすることなどあるはずがないと思っていた。

しかし怖いのだ。どうしようもない恐怖を感じる。一歩を進むのに脂汗を滲(にじ)ませ、心の抵抗を強引に押しきらなければならない。押しきって進んでみても恐怖は去らず、かえって岩室に溜まっていく暗い海水のように、すさまじい圧力が体を押しつぶしてくる。

闇の奥から、この島に仕掛けられた数々の罠が襲いかかってきた。

ひゅっ、ひゅっ、ひゅっと空気を切り裂く音がしたかと思うと、いきなり太腿に衝撃と激痛がきた。仕掛け矢だった。あとからその直前に足がなにか糸のようなものを引っ掛けていたことを思いだした。手探りで矢を抜きとると血のあふれだすのがわかった。

足が地面を踏み抜いたと思うと、体が奈落へと墜落した。奈落の底には太い釘状のものがびっしりと植えられていて、鎧ごしに肌を差し貫いた。必死で

這いあがったが、足の裏や手のひら、尻や背中に、いったいいくつの傷ができているのか見当もつかなかった。
ぎいぎいと重い鉄の物体がきしむ音とじゃらじゃらと太い鎖の揺れる音が聞こえたときには、その場に立ち尽くして動けなくなった。頬に風圧を感じたかと思うと、ぐおおんと鉄板の鳴り響く音がした。ついになにが起こったのかわからなかった。
あたりに濃密な獣脂の匂いが急にたちこめ、足に粘り気のある液体がまといついてきたときには、すぐに危険の予想がついたが、逃げられなかった。頭上から体中に油が降り注いだかと思うと、ごおっと足元から炎が上がり、体も周囲も火の海になった。火だるまになり、焼けた空気を吸ってむせかえりながら、炎のなかを走り抜け、床を転げまわってようやく難を逃れた。
いつどんな罠が襲ってくるか予想もつかない。闇のあらゆる場所が死の恐怖のわだかまる場所となった。次の一歩を踏みだせば死ぬかもしれない。その一歩が助かればその次の一歩で死が襲ってくる確率が高まる。罠が出現しなければしないだけ恐怖が増幅された。
異常な島だった。罠は単に侵入者を防ぐためのものではなかった。多数の死者を出すこと自体を目的としているとしか思えなかった。
愉しんでやがるのか、この島の主は。呪ってやる。かならず殺してやる。
自らも覚えた殺戮の快楽に重ねあわせて、この罠を仕掛けた人物の愉悦が想像される分、ジークの憎悪は増大した。
なぜおれがこんな目に遭わなければならない。森のなかで仲間たちと愉快な日々を送っていたこのおれが。誠実な父と愛情に満ちた母のもとで幸せに育ったこのおれが。あの幸福な日々を壊したのはだれだ。木漏れ日のなかで父と遊んだあの日々を。馬の練習をするおれを母が暖かく見守っていてくれた

あの日々を。
　父を殺したやつを呪ってやる。あいつがこんな運命におれを引きずりこんだのだ。かならず屠ってやる。ただ殺すだけですますものか。指の爪を一枚一枚剥いでやる。眼球を抉り、鼻を削ぎ落とし、耳を引きちぎってやる。体中の皮膚を生きながら薄く引き剥いてやる。セルバンテス、待っていろ。
　闇の恐怖を押し返しつつジークは進んだ。赤い服の女の死体が現われることはなかった。この数々の罠を通り抜けていったものが、少なくとも一人はいるということだった。それだけが一縷（いちる）の望みだった。

5

　突然足を滑らせて、ジークはバランスを崩し、足元の岩にしたたかに尻を打った。地面が前下がりの急斜面になっていて、足を踏みそこなったのだった。
　尻もちをついた体は、そこにとどまっていなかった。斜面を滑り落ちはじめた。尻の弾力で一、二度はずみ、体が斜面に沿って沈んでいった。沈むにつれ、斜面の傾斜角度がもっと急になった。
　足をつっぱって止まろうと試みたが、うまくいかなかった。足裏が蹴った岩のかけらがいくつか、先へ転がり落ちていった。その音の反響で、自分が巨大な空洞のうえにいることをジークは知った。漏斗型に地面の落ちこんでいった先に、底知れない奈落が口を開いているようだった。
　体をひねり、俯せになって岩にしがみつこうとした。しかしそのときには滑り落ちていく体に勢いがついていて、岩に指を一、二本かけただけでは勢いを止めることはできなかった。爪を剥がしながら何度も何度も岩に指をかけたが、簡単にはずれた。
　いまや岩の傾斜はほとんど垂直に近くなっていた。腹で岩をこすりながら、ジークは滑落しつづけ

た。岩の出っ張りが激しく腹や顎を打った。

体がよじれたり回転したりして頭がふらふらになり、どちらが上かもよくわからなくなった。ついに岩の感触がなくなり、ジークは空中に投げだされた。大きさも深さも計り知れない闇の底へと落下していった。

衝撃がきた。

鎧の衝撃音が空洞に反響した。

どれほど意識を失っていたのかわからない。意識をとりもどしたときにも、真の闇に包まれているためほんとうに意識をとりもどしたのかどうかよくわからなかった。自分の手さえ見えなかった。体中にひどい痛みがあり、吐き気がした。

地面と思ったものを探ると、毛深い絨毯のような感触があった。立ちあがろうとすると、眩暈がし、腰が抜けたようになって立てなかった。絨毯様のもののうえを這って進んだ。

絨毯のへりを越えると土の感触があった。土の上に固い小石のようで、角張って表面のつるつるしたものがいっぱいばら撒かれていた。

さらに這い進むと、木製の箱のようなものがいくつもならべられているところがあった。棚のように丈高いものもあり、棺のように横長のものもあった。食器のようなものや細かい細工をほどこしたものが多数あたりに散らばっているようだった。

剣帯の物入れにただ一本だけ無理をして残してあった蠟燭に火をつけようとした。

そのとき、不気味な音が闇の奥から聞こえてきた。細い筒の先から空気の吹きだすような音だった。鞴（ふいご）の音にも似ていた。それが呼吸のようにくりかえされた。なにものかの蠢く気配が伝わってきた。

ジークは首を左右に振って音の出所を確かめようとした。しかし音の方角を自信を持って特定するのは難しかった。

「何者！　この島の主か」

闇に向かって呼ばわった。返答はない。あてどな

い憎悪がジークの内にこみあげてきた。
そっと剣を抜いた。それを杖にして立ちあがった。体が頼りなく揺れた。視界がないために自分がまっすぐ立っているのかどうかおぼつかなかった。
音が近づいてきた。いまやそれは呼吸の音に違いなかった。肺を患う者のような苦しげな呼吸音だった。地を擦る足音も聞こえていた。音は右に左に移動して場所を変えながらジークとの間合いをしだいに詰めてきた。
かすかな金属音をジークの耳がとらえた。反射的に剣を上げた。剣が衝撃を受け、闇に火花が散った。
瞬間、鋭く尖った鉄製の武器の先端が見えた。先端は三つあり、王冠のように末広がりに広がっていた。武器はすぐに闇に呑まれて見えなくなった。
呼吸音が続いていた。じりじりとジークを中心に円を描いて移動した。ジークは剣を顔の前に立て、音に正対するように体の向きを変えていった。
敵はジークを焦らした。ゆっくりと進み、止まり、逆進した。焦らしに焦らした挙句、予想外のタイミングで斬りかかってきた。
一撃、二撃。ジークは勘のみを頼りに敵の刃を受けた。二撃目までどうにか躱(かわ)した。三撃目に備えた瞬間、足払いを食っていた。もんどり打ってジークは地面に転げた。
転げながらやみくもに剣を振りまわした。敵が遠ざかった。
また円運動がはじまった。
敵はこの闇のなかで自由に動けるのだ。あきらかにジークのことも見えていた。脂汗がジークの額から伝い落ちた。
ジークの緊張が一瞬緩んだその隙を見透かしたように、憎らしいほど絶妙のタイミングで敵はみたび斬りこんできた。
一度、二度、三度、闇に火花が散った。無毛の頭部と魁偉(かいい)な鼻がつかのまジークの目に映った。
後退し、踏みとどまり、ジークは反撃に出た。呼

吸音に向かって十字に切っ先を走らせた。かすかに手ごたえがあった。
呼吸音がリズムを乱し、遠ざかった。
その隙に、ジークは地面に膝をつき、火打ち石を打った。蠟燭に火がともった。
突然、眩しい光の渦のなかに、ジークはいた。密集する銀河の星々のまっただなかに投げこまれたようだった。蠟燭の光が、散乱し、増幅し、反射していた。
星々は無数の宝飾品だった。ダイヤモンドを連ねた首飾り。ルビーを埋めこんだ王冠。金の杯、銀の皿、銅の水差し。銀細工に縁どられた鏡。磨きあげられた剣。優美な鎧兜。金糸銀糸に彩られた馬具。黄金色に輝く貨幣。光沢を放つ絹の衣裳。分厚いペルシアの絨毯。華麗なつづれ織り。それらの財宝が地の底にいっぱいにあふれていた。
長時間暗黒のなかで過ごしたジークの目に痛みが走り、涙があふれた。潤んだ視界のなかで財宝ひとつひとつが星型に光芒を放った。
敵への影響はもっと甚大だった。敵は異様に長い腕で目を覆い、のけぞって苦しんでいた。爬虫類を思わせる動きで光を避けようとのたうっていた。呼吸音が速く激しく乱れていた。
ジークは斬りこんでいった。床に置いた蠟燭に照らされて、その影が空洞の壁に映った。剣を振るう黒い巨人が壁の上で踊った。
剣の影が走り、手足の長い影が大きくのけぞった。
敵は地に倒れ、長い手足を丸め、体を縮めていた。長い年月にわたる地底生活のために人間とは思われないものに変貌してしまった体が深傷を負っていた。
ジークは剣を振りかぶり、体重を乗せて敵の不気味な体めがけて振り下ろした。
敵が最後の力をふりしぼって避け、剣が地面に突きたったそのとき、ジークの目の端を横切ったもの



があった。赤い人影だった。
ふりかえると、あの赤い服の女が立っていた。女はものも言わず、短剣を振りかざして、襲いかかってきた。
ジークは地面から剣を引き抜いて応戦した。
女は背の高い身体を軽々と宙に舞わせ、ジークの頭上を飛び越し飛び越し短剣をくりだしてきた。その影が、高く切り立つ空洞の壁から穹窿（きゅうりゅう）状になった天井へ、天井からまた壁へとめまぐるしく這いまわった。巨大な蝙蝠が岩壁に沿って飛びまわっているかのようだった。
応戦しながらジークが気づくと、この島の主がどこかが壊れたような呼吸音を荒く乱しながら、触手を半分失った蜘蛛のように地を這いずっていずこかへ逃れていこうとしていた。
とどめを刺しそこなったことをジークは悔やんだ。自分をここまで苦しめたやつを生かしておくつもりはなかった。
赤い服の女の隙を見つけて、そちらを追おうとした。が、隙は容易に見つからなかった。
跳ねまわる女をようやくつかまえ、鍔迫り合いから蹴り倒して隙をつくったときには、島の主は空洞の隅の闇のわだかまるなかへ這いこんで姿を消すところだった。
ジークは走りだした。あとを赤い服の女が追ってきた。
島の主の姿が消えたあたりに、横穴があった。そこへ入った。通り抜けると別の岩室へ出た。
闇に包まれた岩室に、上から揺らめく明かりが下りてきていた。見あげると、頭上高く、空中に蠟燭の炎が浮かんでいた。
岩室の中央に、黒光りする鉄を複雑に組みあわせた装置が置かれていた。装置は人の背丈よりも高く聳えていた。円柱状の鉄材が檻のように組みたてられて全体の構造をかたちづくり、そのなかで大小何十個もの歯車が嚙みあっていた。それは機械時計の

内部のように見えた。
島の主が装置の構造材にしがみついて立ちあがり、装置から突きだした棒状の柄を握った。体重をかけて柄を押しさげた。
危険をジークは直観した。飛びこんで、島の主の身体に深々と剣を突きたてた。
激しく異様な音の息を吐いて、島の主はこと切れた。
その体重が柄にかかっていた。柄はさらに下へと押し下げられていった。それにつれて、檻のなかで大きく渦を巻いているぜんまいが絞りあげられた。最下段まで下がると、機械の気配が変わった。かすかな音をたてて、歯車がいっせいに回転しはじめた。
ジークは一歩さがって、あらためて装置全体を見た。歯車の入った檻の上方に垂直に柱が突きだしていた。柱から水平に出た腕の先に燭台があった。燭台に何本もの蠟燭が立てられ、炎を上げていた。
赤い服の女が岩室に飛びこんできた。ジークは剣を構えたが、女は立ちどまって息絶えた島の主と装置のようすを一目見ると、むっと声を発し、すぐに踵(きびす)を返して岩室から飛びだしていった。
ジークは蠟燭を見あげた。水平の腕がかたり、と一刻み回転した。蠟燭の炎が揺れ動いた。腕が回転していく先に、油を染みこませた何本もの布紐が垂れていた。やがてその紐の先端を蠟燭の炎が順にあぶることになる。
導火線だった。導火線のうちの何本かは岩壁に穿たれた穴のなかへと導かれていた。何本かは天井を伝って隣の岩室へと続いていた。何本かは天井近くの岩棚へと続いていた。岩棚の上に丸く固めた黒い火薬の塊が置かれているのが見えた。
ジークは島の主の死体に飛びついてそれを脇へどけると、装置の柄を押し上げようと試みた。柄は装置内部の固定装置に引っ掛かっていて、微動もしなかった。檻の鉄柱を揺すってみたがびくともせ

ず、内部の歯車には手が届かなかった。燭台も導火線も手の届かない高さにあり、岩壁を登る方法はなかった。

ひとたび作動すれば決して止められないように設計された装置だったのか、止める方法はあるがそれを抱いたまま島の主が死んでしまったのか、いまとなっては知る方法がなかった。いずれにしてもその時限装置を止める方法はなかった。

ジークは岩室を走りでた。

6

導火線がどこへどうつながっているのかわからなかった。自爆装置の規模がどれほどのものか見当がつかなかった。しかしおそらく島全体を巻きこむ規模で仕掛けられているものと思われた。

財宝を守っていた島の主は、財宝が人手に渡るような事態に立ち至るならば、その前に海に沈めてしまえと考えたのだろう。そのような仕掛けをつくりだした。命だけは助かる時間を見込んだ仕掛けだった。

島の主はその時間を利用する前にはかなくなってしまったが、ジークにはまだ利用できる可能性が残されていた。

ただ、いったいどのようにしてその可能性が実現するのか。墜落してきた縦穴はとうてい登ることは不可能だった。

ジークはもとの大きな岩室へもどった。灯しっぱなしになっていた蠟燭の光に、数々の財宝がむなしく輝いていた。赤い服の女の姿は見えなかった。

どこへ消えたのか。あの女が脱出できたものなら、ジークもできるはずだった。

ジークは蠟燭を持って、岩室の周囲の壁に沿って歩いた。別の岩室に通じる横穴がいくつか見つかったが、どれもすぐに行き止まりになっていた。一周

し、さらにもう一周確認したが、出口はどこにもなかった。空洞は閉じられていた。
二周目が終わったとき、爆発音が轟いた。装置の置かれた岩室からオレンジ色の炎と黒煙が噴きだしてきた。予想より強力な爆発で、ジークは爆風に打ち倒された。
続いて、どこか岩壁の向こうで爆発音が聞こえた。爆発は連続的に起こっていくものと思われた。
脱出の可能性は縦穴にしか残されていなかった。蠟燭をできるだけ高く掲げて頭上の縦穴を見あげた。岩盤にぽっかり黒い穴が開いていた。ジークはそこから墜落してきたのだ。岩盤までの高さは人の背丈の十倍もあり、岩壁は穹窿状で、這い登ることは不可能だった。壁をよじ登ったとしても途中からオーバーハングになる。
視線を下ろし、もういちど他の脱出口を探そうとして、ジークの動きがぴたりと止まった。ふたたび蠟燭を掲げた。
目を凝らすと、天井から垂れ下がって揺れ動いている細い紐が見えた。上から順に見下ろしていくと、先端が足元の地面に届いていた。
その先端の垂れているところへ、ジークは走り寄った。
またどこか遠くで爆発音が轟いた。岩室が震動した。爆発音は三度ほど相前後して響いた。
紐は小指より細い赤い組紐だった。ジークは引いて手ごたえを見た。上端は天井の縦穴の奥のどこかに引っ掛かっていた。
伝い登ることができそうだった。助かった、とジークは思った。
が、体重をかけてよじ登ろうとすると、紐がきしんで延びた。上の引っ掛かりも頼りなさそうだった。
赤い服の女が脱出に使ったまま残していったものだろう。身軽な女だった。だからこそその細紐で縦穴を登れたのだ。
ジークはもういちど体重をかけてみた。紐がその

重みに耐えきれないのはあきらかだった。

ジークは思案し、それから銅丸を脱いだ。籠手や肩当てや脛当てをはずした。シャツだけとなった。迷ったが、剣帯だけは腰に巻き直した。

紐に体重をかけた。重みで延びた紐を慎重にたぐり、全体重をかけて、足を地から離した。

前より大きな爆発音がした。岩室が揺れ、縦穴からばらばらと砂や小石が降ってきた。

ジークは登りはじめた。紐は不安定で体がぐるぐると回った。回りだすと止めようがなかった。ぎしぎしと紐がきしんだ。

天井までの半ばまで登ると、早くも高さの恐怖がやってきた。紐は細すぎてしっかりと握るのは困難きわまりなかった。自分の爪が手のひらに食いこんだ。手に汗が生じてともすればずるりと滑った。

ひときわ大きな爆発音が轟いた。岩室の岩壁が向こう側から粉砕され、炎が噴きだした。爆風でジークは大揺れに揺れた。砂や小石がばらばらと体を打った。

転がりだした大岩が財宝を無残に踏みつぶした。坑道の支柱だったものだろうか、火のついた木材が落ちて、財宝箱や椅子や簞笥（たんす）が燃えはじめた。

熱気が噴きあげてきた。ジークは紐をたぐる手を速めた。ようやく岩室の天井の高さに達した。縦穴のなかへとさらによじ登った。

そのとき、頭上で悲鳴が聞こえた。

女の悲鳴だった。それに男の罵り声がかぶった。砂と小石が降ってきたかと思うと、それに続いて女の体が墜落してきた。一瞬遅れて男の体がジークのすぐそばを通りすぎていった。

男の体がジークの肩に接触し、ジークは紐の先で大きく揺られた。そこから上、縦穴が漏斗状に広がっていく箇所で、紐が岩に擦れていやな音をたてた。

がくっとジークの体が落ちた。上端の引っ掛かりがはずれたのだ。

が、半身ほど墜落して、落下は止まった。どこかに再度引っ掛かったにちがいなかった。その引っ掛かりは頼りなかった。

あわててジークは紐をたぐり、先を急いだ。

最後の漏斗状の斜面にかかったとき、急に紐の手ごたえが失せた。ジークは岩壁にしがみついた。ジークの脇を、鈎爪のついた紐の先端が滑り落ちていった。

岩の凹凸を手がかりに、どうにか縦穴の上まで這い登った。

一息ついて、縦穴の底を覗きこむと、円筒形の闇の向こう、財宝の燃える炎のなかに、ソフィーティアとフォルケルが折り重なるように倒れているのが見えた。

ジークはじっと二人を見つめ、それから縦穴のそばから立ち去った。

7

うなり声をあげてソフィーティアが身を起こしたとき、頭上の縦穴から赤い紐が落ちてきた。先端についた鉄の鈎爪がざくりと地面に突き立った。

あたりは火の海だった。爆発音が連続的に聞こえた。岩室が震え、砂や小石や人の頭大の石が天井から落下してきた。

「フォルケル！　フォルケル！」

気絶したフォルケルの体を揺すった。

フォルケルが意識をとりもどしたとき、爆発で岩室の岩壁の一部が吹き飛んだ。砂礫混じりの爆風がソフィーティアとフォルケルを打ち倒した。フォルケルのうえに覆いかぶさったソフィーティアの背に、砂礫が降り注いだ。

爆発が収まり、身を起こすと、二人の体のうえに

層になっていた砂礫がざらざらと流れて落ちた。爆発で岩壁から剥がれた大岩が、ゆっくりと倒れこんで、轟音と砂煙を巻き起こした。

さらに爆発音と震動は続いた。

「この分では島ごと沈むわ」

ソフィーティアが言った。

フォルケルはあたりを見まわし、天井を見あげた。

「さっき縦穴の途中にしがみついていたのはジークだったろう」

フォルケルが言った。

ソフィーティアは置き去りにされているジークの鎧を指さした。

「ジーク！　聞こえるか。ジーク！　助けてくれ。登る方法がない」

フォルケルは大声で天井の縦穴に呼びかけた。

応答はなかった。

ソフィーティアが鈎爪を地面から引き抜き、赤い細紐を何重もの輪にまとめはじめた。まとめあがるとフォルケルに渡した。

フォルケルは肩口から地面に触れる程度に細紐を垂らし、鈎爪を振りまわしはじめた。十分に勢いがつくと、

「やっ」

掛け声とともに投げあげた。

鈎爪は縦穴の下の縁に触れただけで落下してきた。岩室の壁の一側面から、海水が噴きだしはじめた。ものすごい水圧で、水は高々と弧を描いて噴きあげた。

噴きだし箇所から、幾本ものひび割れが岩壁に走った。ひび割れの数か所から水が噴きだしはじめた。噴きだす水柱は次々と増えていった。

フォルケルは細紐をまとめ、もういちど投げた。鈎爪は縦穴のなかに入り、しかしすぐに落ちてきた。

足元に海水が溜まりはじめた。ひび割れは壁から穹窿状の天井に伝い上り、天井にあちこちから水が噴きだしはじめた。水圧で押しだされた大きな岩塊

が落下してきた。
天井からの海水を浴びながら、フォルケルはあきらめず何度も何度も鈎爪を投げた。どうしても縦穴の上までは届かなかった。それだけの距離を投げあげ、鈎爪をどこかに引っ掛けるには、相当の熟練のいるものと想像された。
何十回目の試みだったか。鈎爪が縦穴のなかで止まった。
「受けとめたぞ」
声が振ってきた。ジークの声だった。
「鈎爪は固定した。登ってこい」
フォルケルが紐を引いて手ごたえをたしかめた。
「ひとりずつしか無理だな。まず、あなたからだ」
紐をソフィーティアに差しだした。それからつけくわえた。
「鎧の重みもない方がいい」
ソフィーティアはジークの鎧が脱ぎ捨てられていた意味を頓悟した。一瞬ためらってから、胴丸をはずした。ヘパイトストから賜った胴丸だった。ここに脱ぎ捨てていってよいものか、煩悶があった。結局、籠手や脛当てもはずした。
紐をたぐって登りはじめようとしたとき、大音響とともに大岩が落下してきた。天井に開いた穴から太い水柱が噴きだした。他にも数か所、樹齢数百年の大木のような太さの水柱が噴きだした。天井のそこここからぼろぼろと岩塊が落下した。
「もう時間がないわ。岩室が崩壊する」
ソフィーティアが言った。
「急げ」フォルケルが言った。「あなただけでも助かってくれないと困る」
「でも、もしあなたの方が速く登ることができるなら……」
「いや、あなたが先だ。ジークのために、あなたが助かった方がいい。ジークを救えるのは、おれではなくてあなただ」
「ジークのために？　あなたはそこまでジークのこ

とを思っているの」
「心配させるやつなんだ。だから、そばを離れられなかった」
「わかったわ。大急ぎで登るわ。あとから来て」
「行くさ。まだ間にあわないと決まったわけじゃない。しかし、もし、間にあわなかったら、ジークを頼む」
フォルケルは微笑した。
ソフィーティアは細紐にぶら下がってよじ登りはじめた。上でジークが紐をたぐった。
井戸のような円筒形の闇のなかから上がってきたソフィーティアに、ジークが腕をさしのべて引っぱりあげた。
縦穴の上に這いあがるとすぐ、ソフィーティアは穴の底を覗きこんだ。
フォルケルが片手を高く掲げていた。まるで別れの挨拶のように見えた。ジークがたぐりあげた分の紐を投げ落とした。
紐の下端がフォルケルの手に届いた瞬間、それまでにない激しい揺れが島を襲った。ジークもソフィーティアも立っていられず、床を転げまわった。
揺れが収まってから縦穴を覗くと、フォルケルの姿は見えず、岩塊のあいだを渦巻く海水ばかりが見えた。
また揺れが激しくなり、ジークとソフィーティアのいる床も崩壊へと進みはじめた。二人は闇のなかへと走りはじめた。

8

夜の大洋のまんなかで海水が逆巻き流れ巨大な黒々とした渦をつくりだしていた。島がひとつまるごと沈み、そのあとに生じた海底の陥没部分へと海水が流れこんでいるのだった。地底にどれだけの空洞があったのかわからなかったが、渦は容易には消

えず、ごおごおと音をたてて渦巻きつづけた。

その大渦から逃れでようと、ジークは水の流れに逆らって必死で泳ぎつづけていた。渦の中心部は海底に向かって海面が低く引きこまれ、大渦の外縁部に向かって水が山の斜面のようにそそりたっていた。

星空が見えていた。乳白色に煙るような銀河がゆらめく帯となって天球を横切り、ジークの体がまわるせいで天球全体が回転しているように見えた。その回転の中心へ落ちていきそうな気持ちがした。

牛の胴体ほどもある血まみれの肉の塊が流れ来たり流れ去った。海底の爆発の巻き添えを食った鮫の死体だった。底に住む見慣れぬ形の魚も多数死んで浮かび渦に流されていった。焼け焦げた木材が何かきらきらと輝くものをまといつかせて流れていくのは、財宝箱の残骸であろうか。

もはや体がぼろぼろになっているところへ海水で体温が奪われ、急速に体力の失われていくのをジークは感じた。黒い大渦に身を任せ、中心部へと引きこまれていく方がどれだけ楽かと想像した。目を閉じ体の力を抜けばそれは簡単にできることだった。

水を呑んで、ジークはもがいた。気づかないうちに、手足の動きを止め、ぼうっとしていて、体が沈んだのだった。体力の残り少ないことは歴然としていた。

黒々とした海面の向こうに、闇が凝り固まったような巨大な影が現われた。影は渦の流れに沿ってゆっくり動き、ジークの方へと近づいてきた。近づくと見上げるばかりの大きさになった。

船だった。舷側の板もマストも朽ちてぼろぼろになり、帆も破れて襤褸のように垂れ下がっていた。掲げられたマストに髑髏のマークが見えた。

甲板から舷側へ垂れた縄梯子の揺れているのが見えた。ジークは最後の力をふりしぼってそちらへ泳いだ。船の近くで複雑に揺れる波に翻弄されながらどうにか縄梯子に取りついた。

腐臭をジークは嗅いだ。船全体から漂いだしてきていた。しかしかまっていられなかった。縄梯子をよじ登った。
登りきり、のめりこむように甲板に倒れ伏すと、もう動く力が残っていなかった。そのまま額を甲板につけてじっとしていた。
船の上は静かだった。大渦のごおごおと唸る音も遠く聞こえた。その不思議な静けさのなかに、ジークはおのれを呼ぶものの声を聞いた。
ジークは甲板に手をついて身を起こした。船首楼上に何者かがいた。どこから差してくるとも知れぬぼうっと鈍い光にそのものの姿が浮かびあがっていた。
尖った靴を履き、膝まである脛当てを皮帯で止めているのが見えた。腰から垂れたマント状の覆いは三角形の影をつくって腿の裏側に広がり、四角いバックルのついたベルトで腰に止められていた。肩章のついた短いベスト状の上着の下から、固く盛りあがって波打つ胸と腹の筋肉が覗き、胸にはしゃれてスカーフを結んでいた。口髭をたくわえ、凶悪な光を放つ目をした蒼白な顔の上に、金糸の縁取りのある帽子が載っていた。
「待っていたぞ、ジーク。おれがだれかわかるか」
男は船首楼の屋根から身を躍らせ、腰のマントを翻らせながら、ジークのいる中央甲板へと飛び下りてきた。その両手に雌雄のソウルエッジが握られていた。
「セルバンテス……。父の仇……」
ジークは言った。
セルバンテスは嗤った。
「上できだ」セルバンテスは満足げに言った。「上できな答えだよ、ジーク。最高だ」
ジークはすわりこんだまま腰の剣を引き抜こうとした。が、疲れた腕は剣の長さを上げきれず、途中で力尽きた。
「マネーピットは辛かったか」

セルバンテスが訊いた。
「マネーピット？　沈んだ島のことか。おれがあそこにいたことを知っていて、ここへ来たのか」
「もちろん」
「なぜ知っていた」
「おれが行かせたからだ」
「おまえが？　どういうことだ」
「知りたいか？」
ジークは再度剣を引き抜こうと試みた。こんどは成功した。剣を杖にしてよろよろと立ちあがった。
セルバンテスはソウルエッジを構えもせず、ただジークを見ていた。ジークは斬りかかっていった。が、簡単にかわされ、よろけてふたたび甲板に倒れこんだ。
セルバンテスが嗤（わら）った。
「そうだ、ジーク。父の仇を討つのだ。このセルバンテスを刺し貫くのだ」
「殺すさ。かならず殺してやる」
「いいぞ、その調子だ。憎悪の炎を燃やせ。おれを憎め」
「いちいちおまえは妙なことを言うな。おまえを殺そうとしているおれに、もっと憎めとは。死を欲しているのか。いったいなにものなんだ」
「知りたいか？　話してやろうか」
ジークは再度剣を杖に立ちあがった。
「言えよ。どういうことなんだ」
「おまえをここに呼びよせたのは、このおれなのだ。おまえは苦難の旅の果てにここへたどりつかねばならなかった。そのようにおれが仕組んだのだ」
「仕組んだだと」
「そうさ。おれの仕組んだ罠におまえはまんまとはまった。まるでこの海に渦巻く大渦に巻きこまれた小舟のように、逃れようもなくここまでやってきた。見えない渦に巻きこまれ、奔流に呑まれ、その中心部へと吸い寄せられてきた」
「ばかな。おれが旅をしてきたのは、おれ自身の意

志だ」
「ちがうな。オストラインスブルク城におまえがやってきたのは、剣の噂のせいだったろう。あれはおれがわざと流した噂だったのだ」
「おまえがわざと流した噂……」
「おまえがやってくるまえに、おれは城に仕掛けをしておいた。戦争の火の手をできるかぎり大きく煽るために、大量の武器弾薬を双方の城にたくわえさせた。しかし容易には決着のつかないようにした。おまえの部隊からたくさんの人死にがでるようにしたかったのだ。城のようすを探りにきた赤い服の女も利用することができた。あの女のおかげでちょうどうまいときに最後の攻城戦がはじまった。敵味方とも最大限に武器弾薬をたくわえ、しかもまだ士気の衰えないとき、つまり、もっとも大量の死者の出るときに戦争ははじまった。あの女にはロシアで一度会っているが、あの女はソウルエッジのありかを示唆する書物を持っていた。おれが姿をくらませば、そこに記された手がかりからマネーピットへ向かうはずだった。おれはあの城から消えるだけでよかった」
「そこまでして、おれになにをさせたかったのだ」
「おれを憎むようにさせたかったのさ」
「なぜ?」
「それはおれを殺せばわかる」
「死が望みなのか」
「そうだ。楽になりたいのだ。そのためにはおまえに殺されなければならん」
「妙なやつ」
「おれを殺せ。マネーピットで受けた苦痛を思いだせ。あれはすべておれの仕組んだことだ。おまえはゲームの登場人物として、おれに操られていたのだ。操られ、踊らされ、傷つき、死の恐怖を味わったのだ。さあ、立って、おれを殺せ」
　ジークは斬りかかっていった。島の迷路で味わった苦痛が、暗黒のなかに仕掛けられた数々の罠のも

たらした恐怖が、甦ってきた。それが、この目の前にいる男のたくらみだったと知って、憎悪はいっそう掻き立てられた。

セルバンテスは簡単にジークの剣を受け流した。ジークの剣の動きを読み切り、からかうようにわずかな動きで身を引き、剣を打ち返した。

「まだまだだな。それではおれを倒せん。もっと憎め。暗黒の炎を掻きたてろ。おれを憎み、おのれの運命を呪い、世界を憎むのだ」

セルバンテスが二本の剣を唸らせて反撃してきた。ジークは受ける一方となり、逃げ場を求めて甲板中を動きまわった。

動きまわるうち、体が温まり、汗がにじみはじめた。ようやく体力がもどり、剣を思うように扱えるようになってきた。

いつしか星の光が薄れていき、水平線上に白々と朝の明けはじめるのが見えた。

9

明星が消え残る藍色の空がぐんぐん明るさを増し、茜色の朝焼けが広がりはじめた。水平線のうえに薄くたなびく雲が金色に輝いたと見えた瞬間、太陽が顔を覗かせた。

海面に顔だけ見せて、ソフィーティアは船に泳ぎよると、縄梯子に手をかけて登りはじめた。朝の光に海の色が急速に変わり、波が輝きはじめた。

大渦はごおごおとなお渦巻きつづけていた。エイドリアン号はその海水の流れのままに渦の中心部へと引きこまれつつあった。中心部に達し、海底に引きずりこまれるのは時間の問題だった。船の主がそれ以上長く生きているつもりのないことをソフィーティアは察した。

ずぶ濡れの衣服から水を滴らせながら縄梯子を登

りきり、甲板に立った。朝日に長く延びた二人の男の影が甲板で踊っていた。

ジークが斬りこみ、蹴りあげ、頭突きを食らわして、セルバンテスを追いこんでいた。セルバンテスの口には不気味な笑みが浮かんでいた。

下段から斬りあげたジークの剣が、セルバンテスをのけぞらせた。ベストの前ボタンがちぎれ飛んだ。露出した胸の肉に、縦に赤い筋ができていた。

セルバンテスは笑いを浮かべたまま、自らの胸を見下ろした。赤い筋から血が流れ落ちはじめた。

ジークは飛び離れて、間合いをとった。剣を構えなおし、とどめの一撃を放つべくセルバンテスの方へ突き進もうとした。

「待って、ジーク！」

ソフィーティアが声をあげた。

ジークは動きを止め、ソフィーティアをふりかえった。セルバンテスも新しい闖入者を見た。

「ジーク、あなたはもう気づいているはず」ソフィーティアは言った。「あなたが戦っているのが、セルバンテス自身ではないことに。セルバンテスの背後にある、暗く巨大で邪悪な存在が、剣を交えることで感じられるはず。それがソウルエッジなのです」

ジークはセルバンテスに視線をもどし、いつでも突きかかる用意をした。

「あなたはいま、ソウルエッジの餌食になろうとしているのよ」ソフィーティアはつづけた。「ソウルエッジはあなたの暗い魂を必要としている。新しい生命のエネルギーをあの剣は求めているのです。ロシアではイワン雷帝に世界征服の野望を吹きこんだ。うまくいくかに見えたけれども、ソウルエッジは急ぎすぎて、あの凶暴な皇帝を使いつぶしてしまった。そこでセルバンテスを利用して次の駒を探した。それがあなただった。ソウルエッジは邪悪な力であなたを呼びよせ、翻弄し、いたぶった。あなたの心の奥底の邪悪なものが育つようにしむけた。長いあいだ利用してきたセルバンテスは、もう心も

体もぼろぼろになり、新しい犠牲が必要になっていたのです。あなたがセルバンテスを殺すことは、ソウルエッジの思いどおり、あなたがソウルエッジに取り憑かれて、世界に破壊と混乱をもたらすソウルエッジの代理人を務める結果になるのです。セルバンテスはすでにそのことに疲れ果てていた。ソウルエッジから自由になることを望んでいたのです。それでソウルエッジの策謀に加担した」

「なにを御託をならべてやがる」ジークは言った。

「ここまでセルバンテスを追いつめて、剣を収めることなどできるものか。おれはただ父の仇を討つだけだ。おまえはソウルエッジを破壊することが自分の使命だと言った。それを果たしたいがために、おれにセルバンテスと戦うのをやめろと言っているだけなのだろう。おまえにソウルエッジを渡してなるものか」

「ちがうわ。ソウルエッジを破壊することがわたしの目的だというのはそのとおりよ。だけど、セルバンテスに手をだすなと言っているのはあなたのためなのです。わたしはずっとあなたを見ていました。オストラインスブルク城にあなたが現われたそのときから。いいえ、そのずっとまえから。あなたを追ってマネーピットに入ったのも、あなたを救いたいと思ったからよ」

「なぜ、おれを救いたいなどと思う」

「あなたの傷つきやすいやさしい魂に魅かれるの」

ジークが無言でソフィーティアを見た。

赤かった太陽が金色に変わり、雲から光輪のすべてを現わして甲板に眩しい光を投げかけはじめた。

「ジーク、思いだせ」

セルバンテスが言った。その胸からは血が流れつづけ、滴って甲板に血溜まりをつくっている。

「おまえはすでに殺戮の歓びを知っている。オストラインスブルク城で農民兵を斬り刻んだときのことを思いだせ。その肉や骨の手ごたえに、死んでいくものの苦痛の声や表情に、愉悦を感じていたはず

だ。全身が打ち震えるほどの歓喜を感じていたはずだ。それを思いだすのだ。おまえは部隊の仲間の多くを自ら下した命令で死地におもむかせた。親しい仲間の死でさえ、おまえには歓びだったのだ。さあ、その歓びを取りもどすのだ」

「その殺戮の歓びを味わわせたのも、セルバンテスの仕組んだ罠だったのよ」ソフィーティアが口をはさんだ。「それを、ジーク、あなたに味わわせるために、彼がオストラインスブルク城の戦いを煽った」

「そのとおりだ。おれのたくらみだ。しかし、たくらまれたものであっても、ジークはすでにその歓びを満身で味わっている。味わってしまったものは、もとへは返らない。その味を求めつづけるのだ」

急に海上に黒い雲が広がりはじめた。岩のように分厚い雲が激しく流れ、渦巻き、逆巻き、たちまち天を埋めた。

と思うと、雲が流れて切れ間が生じ、そのあいだから眩しい日の光が差してきた。雨粒で波立つ海面で日の光がきらきら躍った。

が、それもつかのま、ふたたび黒雲が太陽を隠した。雲のなかで稲妻のはためくのが見え、雷鳴が轟いた。

「さあ、ジーク、おれを殺せ。おれを殺せば殺戮の快楽へのもっと大きな扉が開かれる。その先にあるものを見たくはないか。すでにおまえが味わった快楽の何百倍もの快楽が待っている。心の奥底にある欲望を解放するのだ。人間ならだれでも持っている破壊への欲望を解放しろ。おまえのなかにはその欲望が渦巻いているはずだ。農民兵たちの血のにおいを思いだすのだ」

ジークが天に向かって咆哮した。その目に、天空の稲光が映っていた。

剣を構え、突進した。

セルバンテスは両刀を下げて仁王立ちになったまま胸から血を流しつづけていた。その胸へジークの長大な剣が深々と突き刺さった。

剣がゆっくりと引き抜かれるのを、セルバンテスはじっと見下ろしていた。苦痛とも恍惚ともとれる表情を浮かべていた。

セルバンテスは膝をつき、それから前のめりに甲板のうえに倒れ伏した。その体の周囲に血の海が広がりはじめた。

ひときわ激しく雷鳴が轟き、大粒の雨が甲板を打ちはじめた。うなりをあげる風に、マストの髑髏がばたばたとはためいた。

ジークは剣を下げたまま、じっとセルバンテスの死体を見下ろしていた。

その口から、言葉が洩れた。

「これも父の仇ではなかったか。父の仇がこのように簡単に倒せるはずはない……」

言いながら、自らの剣を甲板に置き、セルバンテスの手から二本のソウルエッジを奪い取ろうとした。

「だめ。その剣に触れないで」

ソフィーティアが止めた。

「止めるな。この剣でこそ、父の仇が倒せるのだ」

ジークは言って手を伸ばした。

そのとき、死体の背中から、鈍く赤く輝く不気味な光の塊が湧きあがった。光は揺れ動きながら凝り集まって、人間の形を成しはじめた。それは髑髏の顔を持っていた。

ジークは飛びさがり、自らの剣を拾って構えた。

10

いまや豪雨がエイドリアン号を包んでいた。天空は雲に塗りこめられ、あたりは夕闇のように暗かった。雨粒が耳を聾(ろう)する音をたてて甲板に当たった。

雨に打たれながら、赤い髑髏が立っていた。髑髏は腐臭と冷え冷えとした空気と人知を越えた邪悪な存在の気配を濃密に発散していた。

「ソウルエッジ……」
その名を、ソフィーティアがつぶやいた。
それが剣の正体だった。世界に破壊と殺戮をもたらすことだけを望みとし、セルバンテスを操り、ジークを呼び寄せた存在だった。
髑髏はいつのまにか先刻までセルバンテスの握っていた二本の剣を掲げていた。ジークは間合いをとって長剣を構えた。
ジークの目がきらめいていた。その相手こそがついに巡り会ったほんとうの父の仇と感じているのだ。しかしその相手を殺すことは、永遠の闇の世界への扉を開くことだった。ソウルエッジを倒したとたん、ジークの仇を探す旅は、世界を相手の殺戮と破壊の旅へと変貌する。
「ジーク!」
ソフィーティアは少年の名を呼んだ。
「思いだして、あなた自身がやったことを」
もはや真実を告げるときだった。それを告げることがジークにどんな衝撃を与えるかはわからなかった。ただ闇の奥へと突き放す一撃となるかもしれなかった。ジークの心が完全な崩壊へと至るかもしれなかった。それでも告げてみるほかはなかった。ジークを闇への道から連れもどすチャンスはそこにしかなかった。
「あなたの父上を殺したのは」ソフィーティアは言った。「あなた自身なのよ!」
ジークがソフィーティアを見た。
「なにを言っている?」
ジークは不思議そうに言った。心の奥にかすかな動揺のあるのが見てとれた。
「信じられない?　でも、あなた自身がそれを証明できるのよ」
「何を言っているのかわからないな」
「父の仇はどんな男?」
「偉大な父を倒すほどの強大な力を持った男だ。試練を積んだ人間にでも容易には倒せない」

「それから？」
「赤いハンカチーフを持っている。母のイニシャルのMの飾り文字の縫い取りのあるハンカチーフ」
「それを持っているのが、あなたの父上を殺した男なのね」
「そうだ」
「あなたがそれを持っているわ」
「なに！」
ジークはたじろいだ。
ソフィーティアはおっかぶせた。
「あなたの着ているそのシャツ。その襟を開いてごらんなさい」
「………」
「できないの」
「いやだ」
ジークは言って、シャツの襟を押さえた。
「なぜ？　忘れているつもりでも、そこに赤いハンチーフがあることを、あなたは無意識のうちに知っているからよ」
「ちがう。いやなだけだ」
「わたしは見ました。そこに赤いハンカチーフがあるのを。井戸の底から助けあげたとき、あなたの傷の手当をしたのがだれだったか、覚えているわよね」
「………」
「自分で真実を知る勇気がないなら、わたしが見せるわ」
ソフィーティアはやにわに剣を引き抜いた。引き抜きざま、ジークに斬りこんだ。
白銀の光が閃くと、ジークのシャツの胸元が切り裂かれていた。
垂れ下がったシャツの裏側に、ぴったりと赤いハンカチーフが縫いあわされているのが現われた。胸から流れでた血のように見えた。その赤い色のなかにMの字の縫い取りがあった。
「フォルケルにその赤いハンカチーフのことを追求

されたとき、あなたは皮の小物入れを川に捨てた」
ソフィーティアは言った。「でも、中身は捨てなかった。そうして、自分自身を騙すための嘘が二度と露見しないように、シャツの裏側に縫いこんだ。そうだったのでしょう?」
ジークの顔が青ざめ、手がわなわなと震えだした。喉の奥から声が洩れはじめると、声はしだいに大きくなり、絶叫へと変わった。
「そう、森のなかであなたは遠征騎士団を襲い、父上を殺した。思いだして。真実を見つめて。辛いでしょうけれども、真実を見つめて、それを乗り越えるしかないのよ。ジーク……」
ジークの声が止まった。心のなかに激しい葛藤の生じているのが見てとれた。雨はジークの肩を打ちつづけていた。
やがてジークが言った。
「うそだ」
ソフィーティアは目を見開いてジークを見つめた。
「おまえの言っていることはすべてつくり話だ。そんなことは信じられるものか。こんなシャツなど――」
ジークは裂かれたシャツに手をかけ、さらに引き裂き、かなぐり捨てた。シャツは甲板に丸まって、雨に打たれた。
ジークは剣を構え、赤い髑髏に向かって突っ込んでいった。

11

ジークの剣がソウルエッジの胸を深々と刺し貫いた。背中へと突き抜けた剣を、ジークは雄叫びとともに両手で持ちあげていった。赤い髑髏の体が高々と宙に掲げられ、それから甲板へと叩きつけられた。魔物の体は甲板に横たわった。ジークは剣を引き抜き、もういちど突きたてて魔物を串刺しに

した。

長い戦いが終わった。ジークは雌雄の剣を魔物の手から奪いとった。

それを両手に掲げた瞬間、ジークの両目が赤い光を放った。

いまやジークが破壊と殺戮の代理人となったことをソフィーティアは知った。

ソウルエッジの魔手からジークを救いたいとのソフィーティアの目的はついに果たすことがかなわなかった。フォルケルとの約束は果たせなかった。が、ソフィーティアにはまだ使命が残っていた。邪剣を破壊し、この世から葬り去らなければならなかった。

ソフィーティアは剣を構え、ジークに挑んでいった。ジークの二本の剣がそれを受けた。

東の空で、急流に流した黒いインクのように、目覚ましい速度で雲が流れていた。雲のあいだから光の柱のように幾本もの光線が差しこんで、広がりながら海に落ちた。

頭上にはなお黒雲が厚く溜まり、雨を降らせつづけていた。西の空の果てでは、雲から空中へとくりかえし稲妻が閃いていた。

ジークを殺すほかはないのか、とソフィーティアは思った。ほんとうにもう望みはないのか。

「ジーク！　ジーク！」

ソフィーティアは剣を交えながら、ジークの赤い目の奥にいるもうひとりのジークに呼びかけた。

「マネーピットの縦穴で、あなたはわたしを助けてくれたわ。オストラインスブルク城に続いて二度までも。あれはどうしてだったの。殺戮の快楽をあなたはすでに味わったのだとセルバンテスは言ったけれど、あなたの心にはまだ人間らしいものが残っていた。そうだったのでしょう？　ジーク、聞こえる？」

言いながら、ソフィーティアの目に涙があふれてきた。

ソフィーティアの斬りこむ手が緩み、その隙にジークが激しく巻き返してきた。二本の剣がヘパイストスの神託を受けた娘の剣に打ちあたる音がたてつづけに響いた。

ジークの目には何の表情も浮かんでいなかった。冷酷な光を放ちつづけていた。

その目の向こうに、ソフィーティアは宇宙を覆う巨大な闇の存在を感じとった。想像を絶した広がりを持った闇だった。その闇が地球に荒廃をもたらそうとしていた。

ジークの剣が水平に旋回し、ソフィーティアの鼻先をかすめた。飛び下がったソフィーティアの目に、旋回する大砲が見えた。大砲は、キャタピラを回転させて進む鋼鉄の乗物に載せられ砲塔に取りつけられていた。

戦車の砲塔が火を吹くその先に、敵の塹壕（ざんごう）があった。塹壕からはすさまじい速度で連続的に大量の弾丸を射ちだす銃が射撃をつづけていた。塹壕の上空を翼を具（そな）えた空飛ぶ機械が飛び過ぎ、爆弾を投下していった。数知れない死者が戦場のそこここに横たわっていた。

ソフィーティアは未来を幻視していることを知った。

自分の住むこの時代を境に、人類の戦争が飛躍的に激しいものになっていくことを、ソフィーティアは知っていた。火薬が最初に戦争に使われたのがこの時代だったが、それはとめどもなく威力を増し、一挙に大量に人を殺す能力を持つようになる。ついには一つの爆弾が一つの都市を一瞬で潰滅させてしまうほどになるのだ。

そのような未来を、ジークの背後にいる存在は望んでいた。

ソフィーティアはもはやジークを殺すことをためらうわけにはいかなかった。気をとりなおし、踏みとどまり、反撃に転じた。

東の空に青空が広がり、雲の切れ間から太陽が顔



を覗かせはじめた。
　雲が流れ、雨が上がり、あたりが明るくなりはじめた。
　ソフィーティアが垂直に高く跳躍した。ジークの頭上で回転し、剣を陽光にきらめかせながら落下していくと、剣がジークをとらえていた。
　ジークが仰向けに甲板に倒れこんだ。
　雲のうえから、まばゆい光の柱が下りてきた。光の柱がエイドリアン号を包みこむと、ソフィーティアの耳にヘパイストスの声が聞こえてきた。

エピローグ

エーゲ海に浮かぶ小さな島の海辺の町に、小さいがおいしいパンを焼くパン屋があった。
パン屋の主人と妻、その娘がパン種をこね、窯で焼いていた。石造りの家の周囲にはいつも香ばしい匂いが漂っていた。
そのパン屋に住みついている男があった。どこから来たとも知れなかった。パン屋の家族の一員ではなく、隣近所のものたちはいったいだれなのだろうと首を傾げていた。
男は言葉をしゃべらず、いつもぼうっとして海を見ていた。彼の心は現実を現実と認識せず、どこか遠いところを漂っているようだった。
パン屋の娘が男の身のまわりの世話を焼いていた。
この娘は、むかしこの町の若者と婚約していたが、結婚式の直前に突然姿を消した。若者は娘の心がわからないままにがっくりと落ちこみ、一時は自暴自棄のように呑んだくれていたが、やがて別の娘と恋に落ち、いまでは子どももできて幸せに暮らしていた。
失踪したパン屋の娘は、いつのまにか舞いもどってきていたが、以前のようには町のものたちと話をしなくなっていた。
その娘が唯一、しきりに話しかけたり、心配をしたりするのが、例の男だった。
男はしかし、その娘にさえ、話もせず、興味も示さないようだった。
男が興味があるのは、町はずれのとある場所から掘りだされる剣だけだった。
その場所にはなぜか錆び果てた剣が大量に埋まっており、地面を掘り返せばいくらでも剣が出てくるのだった。

刃がよじれていたり、波打っていたり、異様に幅広かったり、先が二股に分かれていたり、奇妙な形の剣ばかりだった。
むかしの刀鍛冶が試しにつくっては捨てた剣だと言われていた。
パン屋の娘は男がその場所へ行くのを嫌っているようだった。
しかし男は、娘が気づかぬうちに、すぐその場所へ行き、土を掘り返しては剣を拾っていた。
娘はそれを見つけると、ひどく叱って男を連れもどした。
ある日のこと、男の姿がパン屋の周囲に見えないので、娘は大急ぎで剣の出る場所へと駆けていった。
しかし、そこには男の姿はなかった。
深く土を掘り返されたあとがあり、その底に、それまでにはなかった大きくりっぱな剣の埋まっていた跡が残っていた。
娘は青くなって、男の姿を求めて島中を探しまわった。
けれども、どこをどう探しても男を見つけることはできなかった。
パン屋の娘は、エウリュディケー神殿に住む老婆のもとへ走り、剣の発掘跡まで連れていった。
老婆は剣の跡を見て、難しい顔を見せ、それから悲しげにゆっくりと首を振った。

そのギリシアの事件から数年後、ドイツの片田舎で、ひとつの村の人間が皆殺しになる惨殺事件が起こった。
隣村の人間の話によると、その夜、村を駆け抜けた騎士があって、その騎士は真紅の甲冑を身にまとい、二本の剣をかざしていたということだった。

『ソウルエッジ　ジークフリート編
昏(くら)き森の彷徨』完

あとがき

「美那編」のあとがきはゲームのことを中心に書いたので、今回は小説の方を中心に心覚えを書きとめておくことにする。

作品の方も、「美那編」はゲームを再現する方向性が強く、たとえばゲームの画面上でのキャラクターの動きを流用したバトル・シーンを多く用意したが、「ジークフリート編」ではゲームの再現よりは小説としての世界を豊かなものにしようとの配慮の方に重きを置いていて、あとがきもちょうどそれに対応することになる。

ちなみに、この二編は、一方がどこまでも拡散発展していくアクション中心の物語、他方が内面に深く潜りこんでいくパッション中心の物語で、対称的な一対となる趣向を有してもいる。

思うに、ヴァーチャル・リアリティのおもしろさを人間が発見した最初は、絵画における遠近法と文学におけるリアリズムの描写だったろう。これらは、二次元平面に描かれたものなのに立体的に見える騙(だま)し絵や、見たことのないものを目の前に髣髴(ほうふつ)とさせる文章が、現実とは異なるもうひとつのリアリティをつくりだすという、驚異の発明品だった。初めて遠近法の絵画を見た人は腰を抜かしたに違いない。

私たちはいまその発明のお陰で、テレビゲームの画面を作ったり、小説を書いたりできるわけで、私ももちろんその恩恵に浴している。

非電子的なヴァーチャル・リアリティである小説というものの発明以後、これに関していろいろのテクニックが開拓され、蓄積され、小説家共有の財産となっているわけなので、それを及ばずながら使える限り使ってみようと本編ではたくらんでみた。書き終えての感想として言えば、その結果なかなかおもしろい感触のリアリティが獲得できたようだと密かにほくそえんでいるところである。

テクニックというのは、もちろん小説の場合、言葉のテクニックである。言葉のテクニックのなかで特に重要で頻繁（ひんぱん）に使われるものに比喩がある。

我々が言葉を使うときには（というのは小説家だけではなくて一般的にだれしもがということだが）比喩なしにはほとんど何も語れないと言っていい。たとえば「いい考えがひらめいた」というのは、考えがぱっと頭に浮かぶようすを、光が一瞬光るのに喩（たと）えているわけだが、ほかに言い換えようがない。と書いたときの「頭に浮かぶ」もやはり、水中からなにかが浮かんでくることに喩えた比喩だということはすぐにわかる。

このようにふだんは気づかずにいる比喩、使われすぎて比喩としての新鮮味のなくなった比喩を、なんとか新鮮に感じられるようにできないかというのは、作家ならだれしも文章を書くときにこころがけていることのひとつである。たとえば、「考えがひらめいた」という言葉の近所に、ほんとうに光のひらめく場面をつくって、「考えがひらめく」という言葉の背後にその光のイメージが忍びこんでいくように仕掛けをつくってみたりする。

そのほかあれこれの工夫や仕掛けや趣向や遊びをやっていくことによって、小説はおもしろくも深くもなり、それによってキャラクターが思いのほかに成長したり、物語が意外な方へ発展したりもしてくる。

たとえば本編ではソフィーティアが特に顕著にそのようにして成長していった。彼女はつねに空や光や鳥と関わりながら行動し、ジークを見るときにはいつもどこか高い場所から見下ろしている。これはとうぜん彼女が天界から差す光を浴びて神託を受けた女性であることと関わっているわけだが、そのような趣向をつくり、それと関わる比喩をあれこれ使いもしながら書いたせいで、彼女は予期したよりもはるかに大きく重要な存在になった。最後の方でただ一度だけ、それまでとは逆に、ジークが上からソフィーティアを見下ろす場面のあるのも偶然ではない。

ついでに言ってしまうと、巫女のメリボイアが、作中、「偶然はただの偶然ではない」というセリフを吐くのは、そのような趣向のこと、つまりはこの作品自体のことをもさして言っているわけであり、そのように二重の意味を持ったセリフを吐かせるのもまた小説的たくらみの一部というわけだ。

自作解説をあまり得々としてやると野暮になるからこのへんでよすけれども、そういった趣向を凝らすのが、小説を書く楽しみのうんと重要な一部だし、読む楽しみのうんと重要な一部だと言えるだろう。それを楽しまなければ、書くにしても読むにしても、小説の楽しみは半分以下になってしまう。

本編では作者は存分に楽しんだ。読者もまた、テレビゲームの画面の端に描きこまれた、あまり人に気づかれないディテールを発見しておもしろがるのと同じように、小説的な趣向をおもしろがっていただければと思う。

一九九七年六月

中井紀夫

ASPECT NOVELS

ソウルエッジ　ジークフリート編
昏(くら)き森の彷徨

1997年8月12日　初版発行

著　者　中井紀夫
発行人　廣瀬禎彦
編集人　浜村弘一
発　行　株式会社アスキー
〒151-24　東京都渋谷区代々木4−33−10
電話　03−5351−8111(代)
発　売　株式会社アスペクト
〒160　東京都新宿区西新宿3-11-20
オフィススクエアBLD新宿5F
電話　03−3299−1493
アスペクト営業部
編　集　第六書籍編集部
振　替　00180−8−562721
デザイン　リックデザイン事務所
C T S　東京書籍印刷株式会社
印　刷　図書印刷株式会社

ISBN4-89366-691-6

定価はカバーに表示してあります。